

版本になつて居らぬものが頗る多い、然るに、それが悉く纏つてゐる一事であつた。且つ、詩を録した紙が、皆、其の裏に多少の文字が書かれてあつて、昔時、他に書状を送る時には、必ず半紙に包んで封筒に代へたものであつたが、其の手紙を包んだ紙を利用したのであることを知り、春水が、居常物を節約して、反故紙までも用ゐて居た儉素の美風も窺はれる。

又、其の録された詩は、總て謹嚴で正格なる楷書を以て、實に立派に書かれてある。「在津紀事」は既に版本となつて居るから、人の知る所であるが、こゝに藏されてゐるのは其の原稿である。

地域争ひから訴訟

種々珍しい遺物や逸話を見聞して、ツイ時刻の移るを忘れてゐるうちに、次第に晝食の時は迫つた。そこで自分は氣を揉んで、是非、早く山紫水明處を拜見したいと申込むと、頼氏の言はれるにはそれは御易い御用であるが、實は、山紫水明處に關係した訴訟沙汰が六年間も續いて、漸く近頃落着いて、私の勝訴に歸した。それこれの騒ぎで、訴訟中は手を附ける譯にも行かず、抛擲して置いた爲に、全然、掃除一つもしてない。随つて、お茶一碗も差上げかねる位になつて居る始末である。仍つて、願はくは、此の次の機會に御譲り下されたい、と頻りに斷るのであつたが、自分は強ひて一覽を乞ふと共に、其の所謂訴訟事件の顛末を問うた。ところが頼氏の答へは斯うであつた。

山紫水明處の庭に面した所に隣家があつて、そこに一條の境界線が劃されてあつた。それを、隣家の者が家を建て直す時、恣に境を超えて頼家の庭の地域を侵し、三四尺の所を占有した。その侵された地域が頼家のものであることは、そこに植わつてゐる樹木に就て見ても一目瞭然、すぐ知れる。此の狼藉には頼家でも大いに憤つて先方へ掛け合ひ、今より六年前に於ても訴訟を起して頼家が勝つたが、隣家はいかにも狡獪の徒で、その後問題の土地を他へ賣放つたため、所有者が變つたといふ所から、更に其の新所有者に對して訴訟をやり直すことになり、旁々永い歳月を訴訟に費して、最近までかゝり、漸く問題が解決されて、今度も頼家の勝訴となり、土地を取り戻すことが出来たと。此の話で自分は初めて訴訟事件の経緯を知つたが、山紫水明處一見に就ては到底斷念し切れぬので、無理な望みとは思はぬでなかつたが、此の好機を逸しては、と再三、頼氏に承諾を迫つた。

一軒の茅屋

「たゞ一通り其の外観を見るだけで宜しい。又、此の邊から大分道も遠いやうであるから、わざわざ主人公の足を勞しては恐縮の至り、婢僕でも遣はされて戸だけ明けて貰へば十分であるから」と熱心に自分に説き立てられた頼氏は、流石に「それならば」と諾してくれたので、一旦頼家を引取り、午後三時を期し、山紫水明處を訪ふことに約して辭去した。

さて約束の時刻に、雪堂氏と共に、東三本木といふ所へ腕車を驅ると、この邊に鴨川に架した橋で「丸太橋」といふのがある。その因縁からして、此の邊を、字丸太町ともいふさうである。恰も能樂堂かとも思はれる所を折れて曲ると、腕車が止まつて、モウ目的の場所に着いた。二見いかにも古雅な構へで、入口から少し奥まつた所に、玄關附の一軒の家がある。此の家は、實に其の昔山陽が住んだ母屋である。

或は、下男でも來てゐるか、と玄關から訪づれて見ると、頼家の主人が早くも來て居て、早速玄關のくゞり戸を明け、此方へと案内するので、其のくゞり戸を入ると、直ぐ庭になつて居る。庭園は、面積こそ狭いが、種々の植込みがあつて、流石に京都風の茶人趣味がそここゝに漲つてゐるのであつた。そこへ入ると、一軒の茅屋が眼についた。この茅屋こそ、自分が多年見んことを欲して、夢寐猶忘れることの出来なかつた「山紫水明處」なのである。主人の頼氏は、頻りに戸を開き雨戸をも繰つて、一行を中に迎へ入れられたが、成程、久しく明けてあつて手も入れなかつたと覺しく、雨戸の建附も滑かでなく、或一枚の戸は、どうしても動かなかつた位であるが、一枚位は明けないからとて、眺望を妨げることもあるまいといふので、強ひて押し止め、總ての戸を明けることだけは、辭退に及んだ。

さて、其處に座を占めて見渡すに、思つたよりは狭小で、四疊半と二疊敷だけである。其の二疊敷

に副うて板の間があり、板の間から下駄脱があつて、室へ入るやうに出來て居る。別に、裝飾らしいものは、一切、施された跡がない。その四疊半の室には、極めて小さな掛物を掛ける床が設けられ、床の横手に當つてゐる天井に袋棚が造られ、その下にも亦棚がある。其の棚も、戸をあけて見ると、突き通しになつてゐて、外部から物を運び入れられるやうに出來てゐる。これは茶室などにはよくある趣向で、庭傳ひに杯盤でも持つて來て、すぐに下駄穿きのまゝ此の棚へ上げてゆく。何が運ばれたか、座敷からは見えぬといふ所に、面白みが深いとされたものである。

叡山と鴨河

書齋の何處に、書籍、文稿、詩稿などが置かれたのであらうか。さうした設備は幾ど見られぬ。併し、全體の建物は、小さい縁側を隔て、直ちに鴨川の流れに臨み、恰も川涯に突き出して造つたといふやうな構造で、その縁側へ出て欄干に倚るときは、澄み切つた鴨川の水が、その下を流れてゐるのが見られる。

おそらく、山陽の存命時代には、鴨川も水量が多く、其の川の中に洲などもなかつたと想像されるが、今は中間に幅の廣い洲が出來て、其の爲に水流が狭められ、「山紫水明處」の欄下には、狭い細い川が流れてゐるといふに過ぎない。前面に當つて、兀然として聳えてゐる山は叡山で、山紫に水明ら

かといふ対象の一つの山は、即ち是だ。此處に在つて、此の山に對し、此の川に臨んだ山陽が、「山紫水明」と名を附したのは如何にも寫實的で、決して牽強でないことがわかる。唯、時勢の變化で、今は丁度對岸に目を遮る二つの建物があるので、あたふた山に對しての眺望を破壊してゐる。其の一つは愛國婦人會の建物、今一つは京都教育會の建物で、何れもペンキ塗りの二階建であるから、自然の風景を没趣味のものたらしめ、甚だ目障りとなつてゐるが、其の背後に、叡嶽が、萬古不易の雄姿を以て聳えてゐる。更に、眸を右方に轉すれば、そこには、鴨川を、こちらの岸から對岸に對する、極めて長い、虹の如き橋梁が架けられてゐる。これが丸太橋である。以上、見たゞけの風景では、餘り雅趣に富んだ地とも思はれないが、今より約百年前のむかし、山陽時代に遡つて、四圍の風光を幻想の中に描いて見ると、幾分當時の眺望が浮んで来る。先づ、對岸の、目障りになる二三のペンキ塗りの大建物を無いものにし、鴨川も、亦洲などを取除いて、全江たゞ玉の如き水が、淙々と流れてゐる光景を想像し、又、丸太橋といふ橋も、其の名の如く、昔は、決して今のやうな立派な橋でなく、たゞ丸太を渡して繩かに途を通じたといふ、其の頃に立戻つて考へて見ると、比叡の山は、今より多く其の體を現はしてゐたに違ひなく、又、其の山麓の鬱蒼たる樹木なども、必ずや、えも言はれぬ雅趣を加へたであらうし、鴨川對岸の田家美、田野美も、亦その趣を助けたであらう。

賴氏の話に、此の對岸の杜に隠れた中に、熊野神社がある。元は鳥居があつて、それがこちらから

見えてゐたといふが、今は其の鳥居も無い。その當時、田舎美の漲つてゐる風景の間に、赤い鳥居の隠見する景色を味ふことによつて、初めて山陽當時の風光が出現してくる。斯うして舊時の眺めを腦裏に描いて考へると、なか／＼此の眺めは凡ではない。前面に大岳を控へて、雲烟の間に望むといふ、一つだけでも、京洛有數の勝區たる値は十分にある。自分は、山陽がこゝに居を占めたのも、「山紫水明處」と名けたのも、共に偶然でないことを知つた。

東西南北の風

川を隔て、前面の景色を賞し了り、座に就て室内の構造を見廻せば、たゞ床のある所に壁あるのみで、三面は皆開いてゐる。これは山陽が工夫の存する所で、坐るに此の室を作つた當時の彼の詩を想ひ起さざるを得ない。文政十一年の春、此の室の成つた時の詩が三首ある。

樂室三首

八分樹竹二分家。庇得琴書已覺香。都向東南費一室。要將三面看梅花。  
 向新書室壁纒乾。唯恨先人不及看。壁上施釘新挂下。數行遺墨淚闌干。  
 小似燕巢營費疊。曲如蟻穴鑿傍空。多開窓牖供三伏。要納東西南北風。

これで見ると、窓を多く設けたのは、三伏の時節、東西南北の風を納れるためと、三面から、坐な

がら梅花を賞する用意からであることが知れる。中の詩は、折角、書室は出来たが、先人は既に歿して、看せたくも及ばないから、其の遺墨を壁に懸けたといふのであるが、其の壁は即ち是だ、と床に向つて、自分は無限の感に打たれた。

尙、此の鴨崖が京都の名區で、當時風流を喜ぶ文人墨客が、好んで此の邊に住したことは、貫名菘翁、梁川星巖、藤井竹外も、皆鴨崖卜居の人であつたことによつても想像される。中島棕隱も、亦會てこゝに住し、而も山陽と隣合つたことがある。棕隱は、銅駄餘霞樓と云ふ名を書齋に命じた洒落もので、詩人仲間には、此の人を通人と推し、自らも通人を以て任じた。銅駄坊に居つたことは此の堂號でも知れるが、山陽と隣り合つたことは、其の詩集に山陽と唱和の詩があるのでわかる。即ち、一才子、一通人が、南北相隣り、互ひに此の勝景の一半を分つて、日夕往來し、杯酒の間に吟詠を興にしたのである。その間には面白いこともあつたであらうが、今は唯左の應酬が其の間の消息を語るに過ぎぬ。

三本樹僑居。贈南隣賴子成。

中島棕隱

分酒分歡情自深。洋筏何必問高音。

古巷結隣三樹陰。六六烟嵐露彩筆。

風及我尤非小。半榻新涼直萬金。

區區伎倆媿塵襟。清

棕隱僑居北隣。見贈長律。姑酬以一斷句。

山陽

快書隔樹和朝誦。濁酒過牆同夕醺。鴨岸斜陽寂峯月。暫將一半與君分。

此の應酬は文政八年四月中のことで、山陽四十六歳の時である。

庭中の石室

果しもなくひろがり行く想像の翼を収めて、更に、此の書齋に眼を配ると、山陽が、其の頃、机を据ゑてゐたと思はれるやうな場所に、二枚の明るい障子がしまつてゐる。それを明け放つと、瀟洒な植込みの下に、自然石の手洗鉢が、苔蒸して唯一基あるばかりで、如何にも茶的で且つ寂しみを帯びて居る。これは、慥かに、山陽の嗜好その儘のものが残つてゐるのだと思はれた。又、其の庭續きで恰も此の室の床の間の後に當る所だが、そこは此の庭中で一番廣い所で、植込みがいかに面白く出来てゐる。たゞ、こゝに意外な物が一つあるのを發見した。かう可なり大きな石を幾重ともなく積み上げて、餘り廣くもない庭園に、穴の如くに石で圍んだ岩窟やうの物が、一つ造られてあつたのがそれである。二段ばかり礎を降つて、其の下へ行つて見ると、下は眞つ平で、其の廣さは、僅かに榻を二脚ならべて對坐し得る程の、誠に狭いものであつた。さうして穴の一隅には、極めて浅い方形な井が掘られてある。そこは清水が湧き出ると見えて、甚だ清冽な水が湛へてあつた。或は、三伏の暑さに耐へぬ日などは、涼みがてらに此の穴に入つて、杯盤を置き、一杯傾けるといふことも、敢て出来

ぬ譯ではない。併し、いくらか俗臭を帯びた方で、どうも山陽自らの經營とは思はれない。多分、後になつて、一度此處を所有した醫師安藤の手に成つたものであらう。いかにしても、山陽趣味とは受取りかねた。尤も此の點は聞き漏したが、頼氏の話に、此の庭の他の一隅に廁がある。これも茶室に相應したもので、離れて建てられてあるが、此の廁は元からあつたものでなく、今の頼氏の手に造られたものだと思つた。斯ういふ譯で、庭の全部が、必ずしも山陽在世當時、其の儘のものではないことが知られる。

且つ、昔は、此の小さな書齋から、一方の庭傳ひに、母屋に往來し得られたのであるが、今は、母屋と書齋との間は塀で遮断されて、通行は出来ぬ。頼氏の話によると、山陽自身で建てたのは此の書齋一つで、彼の住んでゐた、其の頃の母屋の方は、他人の建てたのを買込んで、其の儘用ゐたものだといふ。今の母屋は其の當時の物ではなく、其の後に至つて、更に建て直したのださうで、元は平家であつたのが、今は二階建てで、部屋割なども、全く舊時と違つて居るといふことであつた。今此の母屋は他に貸してあつて、現に人も棲んで居る。既に山陽當時の原形の儘でないとするれば、自分等にとつて特に見る必要もないから、母屋の方は見ずじまつた。

二枚の額

更に、話が元へ戻るが、書齋には二枚の額が懸けられてあつた。何れも「山紫水明處」と題したものであるが、これは、無論、山陽當時の物でなく、恐らく、其の在世時代には、斯様な文字を題したものは掲げてなかつたものかと思ふ。果して、頼氏の話でも、一枚の額は、山陽の幼年時代からの朋友であつた海仙(或は百谷とも稱した)の揮毫で、落款に安政四年七十三叟海仙とある所から察すれば、山陽歿後に書いたのである。想ふに、海仙は山陽とは遊び友達であつたが、此の人頗る長壽で、後に残つて永らへてゐたのを、山紫水明處が安藤の手に移つた時、安藤が、山陽ゆかりの者を物色して、偶々海仙を捜し出し、此の額を書かせたのであらう。他の一枚の額は、頼氏(龍三)が、舊藩主といふ因縁から、特に淺野長動侯に染筆を乞うたもので、先づ「山紫水明處」とあつて、左の如く題識が書き添へられてあつた。

此爲山陽頼翁修史之亭名。翁歿後易主六十餘年于茲。頃者翁孫龍三購還修葺復舊。翁與余家往時有主從之義。龍三欲請余書額相贈。余亦欽翁之世德。乃忘陋拙而書之。

時明治丙申春日

侯爵 淺野長動

又、袋戸には、琅玕たる竹が畫かれてある。これも山陽時代の物でなく、安藤時代に額と一緒に海仙に書かせたものらしい。まさか、山陽が海仙などに書かせて、之を自分の書齋に掲げ、珍重してはゐなかつたであらう。

書室に伴ふ聯想

かやうに考へると、實は此の茅屋其の物の外には、山陽時代の物としては、一つも残つて居らぬことになる。唯、其の間に、幸にして山陽自身で造つたといふ建物も、少しも他人の手を入れずに、木材、壁土、全く當時其の儘で今猶存してゐることは、誠に、自分等に、此の上ない嬉しさを覚えさせた。大體見終つて、更に又、山陽が會て坐して筆を執つたといふ、机のあたりに座を占めて、頼氏相手に山陽追懐談に移つたが、實に書齋は小さなもので、天下を風靡した大文章が、此の書齋から出たといふのは、殆ど不思議なくらゐである。外史を始め、政記の如き、新策の如き、或は又、通議の如き、皆此の書齋で修められた。且つ、其の友人、筱崎小竹や、田能村竹田などを集めて、山紫水明の風光に對し、共に語り、共に興じ、時には杯盤の數を重ねて、燭淚堆を成すまで飲み更かしたのも即ち此の書齋であつたと追想すると、身親しく其の當時の空氣に觸れるやうに感じて、まことに去るに忍びぬほどの情緒が湧いた。

此の書齋に就ては、まだいろ／＼と想ひ起すことが多い。こゝには、會て、山陽の叔父杏坪も宿泊したことがあつて、其の山紫水明處觀は左の一文に残されてゐるが、簡單ながら流石に勝槩を盡してある。

余自三月上潯入京。寄食家任襄僑居。居在三本木。近臨鴨川。隔水對東山諸勝。正面如意嶽。而比叡亦不甚遠。襄所植楊柳數株。扶疎數陰。一株多絮。花卉亦弗鮮。交錯各發。別置小亭。切在水湄。最宜撫景。客來則捲簾凭檻。酒茶談論。每極娛樂。云々

又、山陽と親交ある小野泉藏も、山陽が此の勝區に居を構へたことを羨んで、一詩を寄せてゐるのを擧げると、

山陽の勝區に居を構へたことを羨んで、一詩を寄せてゐるのを擧げると、

又、山陽と親交ある小野泉藏も、山陽が此の勝區に居を構へたことを羨んで、一詩を寄せてゐるのを擧げると、

又、山陽と親交ある小野泉藏も、山陽が此の勝區に居を構へたことを羨んで、一詩を寄せてゐるのを擧げると、

これは小野泉藏に申送つたのであるが、山陽も、強ち三絃の聲は聞えぬとは辯疏して居らぬ。事實は、絃聲も時に水を渡つて來るのである。そして此の人間の、享樂的の味は、天然の風景に一段の情

趣を添へ、一層勝區を彩るのであるが、此の味は、茶山のごとき道學的詩人には、到底解し得なかつたことであらう。

頼家買戻し

この「山紫水明處」は、京都の頼家には極めて大切な建物で、假にも他人の手などに渡すべき筈のものでない。然るに、それが一度安藤といふ人の手に移つたには、固より仔細が無くては叶はぬ。茲に其の大體を書くと、今の當主頼龍三氏の養父支峯の時代には、財政不如意のことがあつて、この山紫水明處を、一旦人手に渡したのだ。然し、どうしてもさうはならぬ頼家無上の記念物であるので、之を取戻さうとして、大いに苦心したものであつた。然るに、因業なる持主は、中々譲る色もないので、久しい間、懇望はしてゐたものゝ、ツイ其の儘に打ち過ぎてゐた。ところで、明治何年かに西村捨三氏（醉處と號した人）が京都府知事の時代に、山陽の舊居、母屋も土地も、凡てを擧げて、安藤から買取らうと云ふ話があつて、兩者の間に略交渉が調はうとしてゐる折柄、これを耳にした頼氏（龍三）は、西村氏とは未知の間柄であつた爲に、人を介して、自分の方へ譲つてくれる譯にはゆかぬかと懇願した。西村氏は、頼家から此の懇願に接すると、「御尤もである。全體、こちらは強ひて欲しいといふ譯でもなかつたが、たゞ山陽先生記念の建物で、名も無いものゝ手に渡つて、空しく朽廢

に委するのは遺憾であるから、買取らうとしたのである。斯様の歴史ある建物は、頼家に取つては、無二の記念物であるから、自分の手から頼家へ戻るやうに斡旋しよう」と快く承諾して、自己の希望を潔く抛つと共に、西村氏から改めて此の事を安藤に談判することゝなつた。元來、西村氏は、俠氣に富んだ面白い人であり、又、物の道理のよく分つた人でもあつた。頼家の爲に一肌脱いだのも、此の人としては、さもありさうな事と領されるのだ。

ところが安藤は、利慾の深い人であつたか、西村氏から交渉があると、一旦は、西村氏ならば譲らう、と話が決着しかけたのに、今度は足許を見て取つて、高いことを言ひ出し、なか／＼譲らうとは言はぬので、西村氏も憤激して、人によつて値を二三にすると怪しからぬ、と頻りに安藤の沒情誼を責めたが、頼家の方は頗る軟派で、價は少し位高くとも、力の及ぶ限りは、其の極點まで金を出しても苦しくないと言ひ出した。察するに、今こゝで買ひ損じては、他日、買戻す機會が無くなる、と竊かに心配した弱點もあつたのであらう。初めは、西村氏が、そんなに焦らずとも、マア我輩に任せ置いて言つてゐたが、萬一破談にでもなつては大變だ、と頼家の方では、益々氣を揉み、果ては、西村氏だけでは話が纏らぬとあつて、富岡鐵齋、谷鐵臣などの人々も、追々これに参加して、譲り受けの交渉談判を續けた。西村醉處、富岡鐵齋、谷鐵臣など、總が／＼で交渉に及んだが、相手の安藤は益々意地になつて、

飽くまでも値段は引かぬと頑張り、交渉は行詰るといふ次第だ。これではならぬ、と頼家側では局面展開策を講じ、價の論は打ち切らう。高いとか、廉いとか、負けろ、負からぬの議論は、畢竟君子人の口にすべきことでない。仍つて、持主の方は、好意を以て頼家へ進呈する。その代り、頼家でも、持主の満足するだけの代金を、包み金として提供するといふ仲裁案が持ち出され、遂にそれに決して、山紫水明處を始め、母屋竝に土地ごと、再び頼家の手に戻ることとなり、地坪二百六十何坪、それれに母屋、書齋を入れて、價幾許であつたか、それは聞き漏したが、鬼に角、少からぬ金で取り戻すことが出来た。斯うした記念建物の一室中に、今、自分等は、種々の経緯を、互細に頼氏から聞き得たのである。西村又が附載して、人々がうらやまするに足るものがある。安藤の墓所は、山陽の歴史に記してある。頼家と山紫水明處

久しい間、頼家を苦しめた、此の安藤といふ人は、越前福井のものだといふ話から、フト思ひ出したのは、橋曙覽のことである。曙覽も福井出身で、曾て伊勢参りをした折、其の序でに京都に遊び、同國人の誼を以て安藤を頼つた。安藤は大いに喜んで之を迎へ、幸ひに「山紫水明處」が明いてゐるから、そこに起臥して、氣樂に遊んでゆくがよいと言はれ、そこに泊つたといふことが、曙覽の書いた紀行に、委しく載つてゐる。其の紀行は「榊の薫」と題したもので、曾て自分はそれを讀んだ。讀

んだ當時は、山紫水明處と安藤と、如何なる因縁のあることか、と種々想像を馳せてゐたが、今に於て事の事情を審かにして、「榊の薫」の記事を想起して、「一層の感興を惹くのである。そこで、此の事を頼氏に語ると、氏は曰く、その御話は、まんざら聞かぬことでもなかつたが、紀行はまだ見たことがない。さうして安藤は確かに福井のもので、名を精軒と呼んだ醫師であると附け加へた。曙覽は、山陽の門人から教へを受けた、山陽系統に屬する人で、山陽に對しては孫弟子に當る。其の人が京都に遊び、而も山陽の舊居に二晩なり三晩なり泊るといふのも、何か宿縁がありさうに思はれて面白いが、更に、紀行を通讀すると、其の當時の光景が歴然と浮んで來て、興味津々たるものがあるから、茲に其の大略を紹介して見ると、其の當時京洛に名高かつた蓮月尼は、曙覽に向つて、何處に泊つて居るかと聞いた。曙覽は、山紫水明處と答へると、あそこは、久しい間、空家になつてゐたのだから、萬事、不自由勝であらう。就ては、茶器も御持ちなさい。土瓶も御持ちなさい。此の品もあの品も、と深切に世話を受け、茶まで貰つて歸つたことが、詳しく紀行中に收めてある。又、或時、曙覽が、その息子を伴うて蓮月尼を訪づれ、夜遅くまで話し込んで歸つた時の如きは、提灯まで借りて歸つた。さうして山紫水明處へ來ると、鍵がかゝつてゐて、開かない。力を籠めて開けようとしたが、錠に錆がついて居ると見えて、容易に開かぬ。苦心した末に、隣家から合鍵を借りて來たがそれでも開かぬので、困つてゐると、提灯の蠟燭が消えかゝる。息子が焦つて、力任せに押して見る



と、戸は既に朽ちてゐたので、少しばかり壊れて、辛うじて人間の入る位の間隙が開いたを幸ひに、親子二人は、漸く家に入ることが出来たといふ話なども、やはり紀行中に見える。

又、曙覽が初めて山紫水明處へ泊つた夜の事であるが、醫者の安藤精軒、安藤方の書生等と、互ひに酒を酌交した末、夜も更け、さて寐ようとすると、灯の用意も無いので、燭臺の明りのまゝ褥に就いたが、まばゆくて困る、又其の蠟燭を點してしまふと、夜中萬一の時に困りもするので、消した。ところが、久しく空家になつてゐたためでもあらうが、夜氣人に迫つて、寐つきがわるい。其の上、壁虎が頸筋のあたりを匍ひ廻るので、氣味のわるいこと夥しく、一夜、まどろむことが出来ずに、天明を待ち、雨戸を推して、鴨川の涯へ飛び出して見ると、何とも言へぬ光景で、眞に、甦つたやうな、壯快な感を覺えたとのことである。曙覽は、其の時の事を叙して、拂曉の狭霧、川の面に立ち上り、兩岸の柳が煙つてゐるあたり、げに畫の如き景趣で、夜來の苦悶から脱して、此の好風光に接した時は、實に爽快限りなかつたと書いてある。

こんなことを、自分から話し出して打ち興じたのであつたが、此の間に、胸中、竊かに結んで解けなかつた、一の疑問は、賴氏の話中にあつた、地域争ひをしたといふ、其の家は、即ち、曙覽が合鍵を借りたといふ、隣家のことではあるまいか。それとも、違つてゐるかといふ、一事であつた。斯くて、争ひになつた所はこゝだ、と指される所を見ると、手洗鉢の置かれてある方の一隅で、そこには

隣家の塀が建ててゐたが、訴訟落着後、立ち去つたといふことで、三四尺引込めた形迹が見えてゐた。樹木其の他によつても、引拂ひの迹の新しさが歴然と残つてゐた。さうして、訴訟で争つたこの隣家こそ、曙覽が合鍵を借りた隣家であるらしく思はれた。

支峰の日記

曙覽の旅行日誌の事から、賴氏の言ふには、日誌と申せば、養父支峰の日記を、今も猶保存してゐるが、それを讀むと、越後旅行のことがあつて、號は忘れたが、市島姓の人のことが散見される。もしや貴下の御宅のことではあるまいかと。此の質問に接した自分は、即座にそれは私の家のことだと答へた。當時、父は、まだ青年時代ではあつたが、大人に師事した関係をもつてゐると。こんな談話に主客俱に打ち興じてゐるうちに、覺えず時刻を移したので、賴氏の熱情を厚く謝して暇を告げた。

以上が山紫水明處を見た時の情況であるが、どう感じたかと問ふ人があつても、早速、斯うだ、と明確に答へるには、それに相應した言葉を有たない。兎角、遺蹟といふものは、唯遺蹟其のものを見ただけでは、さ程の興味を感じないもので、有形の遺蹟を通して、或無形にして且つ大なる何物かを握り得た時に於て、始めてそこに汲めども盡きぬ感興が湧いて来る。自分は、山陽に就ては、從來、相當の研究も重ねてゐる積りではあるが、山陽修史の場所に至つては、未だ其の片端すらも窺ひ知ら

ぬことを遺憾として、徒に影ばかりに憧れて、其の實體に觸れぬ不満を抱いてゐたのが、幸ひに此の時を機會として、漸く山紫水明處を訪づれ、其の室内に、其の後繼の人と相對して語つたのは、實に忘れ難い印象で、同時に、積年の懊惱が此の時を以て全く拭ひ去られたのである。

曙覽の日記

著者が山陽の山紫水明處を訪うた記事中、越前の歌人橋曙覽が、伊勢參宮の序に京都に廻り、此の山紫水明處を假の旅宿に充てたことを一寸引合ひに出して置いたが、此の事實は、長く文界に傳ふべき翰墨の縁ともいふべきものであるから、爰に、重複を厭はず、曙覽自身をして其の際のことを語らせたいと思ふ。そこで、其の旅行日誌「柳の薫」から、こゝに宿泊した間の事だけを抄録することにす。曙覽は、越前に聲名を馳せた歌人で、藩主春嶽侯の長敬を受け、或時、その茅屋を訪れたことさへある。往年、故正岡子規が、此の歌人を世に紹介してから、近世稀に見る大家と持て囃されるやうになつたのは、誰も承知の通りである。此の大歌人が、三十年を隔て、一代の文豪の舊宅に宿つたといふのは、不思議な因縁である。當時、この山紫水明處の持主安藤氏は福井出身の醫師であつたが、同藩の誼で、曙覽も此の人をたより、そこで爰に宿することになつたのである。常には人の住まぬ此處に、曙覽は、其の伴つた悴の今滋と、腰を据えては見たが、不自由の事や、夜間、守宮に

襲はれた不快や、夜分外から歸つて、錠が開かぬのに困難を感じたなどで、僅か二三夜泊つて厭氣がさし、安藤の本宅に轉じたけれども、鴨河のけしきには餘程惚れ込んだと見えて、天地間に、こんなよい所があるかなどと歎稱し、坐りに故文豪を偲んで無量の感想を馳せてゐる。山陽と曙覽、和漢、其の學を異にはすれど、共に文壇の雄で、勤皇の志も亦一つである。山陽の靈若し知るあらば、必ず好客來ると歡んだことであらう。此の日誌は、僅かに三日ばかりのことを叙したに過ぎぬが、まことに、委曲を悉してゐる。殊に、和歌と製陶と美人とで名の高かつた隱栖の尼、蓮月と、曙覽が此の山陽の舊居から往復した巨細の記事は、一段の趣味を覺えしめるものである。讀者、幸ひに精讀せよ。

廿六日、ひよし、人のかねことつてたる東洞院に、村上某のもとにもてゆく、むろ町なる安藤氏とぶらふ、茶くだ物いだし、ひるのまかなひくま、物ず、あるじ、こゝにやどりて、ゆくらかに物見ありき給へ、はた旅路のづかれをや止め給へなど、ねるごろにいひけるにより、やがて二人ともに此家にうつるひやどる、蓮月尼とぶらふ、安藤氏より人つけてあないきす、丸太町すぢの川ひがしなか處なり、聖護院宮のしり給ふ御さかひ内にて、植木屋某のうしろのかたに、さきみだれたる秋の花どもおしわけ、柴の戸うちたく、うちより誰れにやととがむ、あないの人、こしのあけみといふものに侍りと先いひけるに、いとうちおどろきたるけはひして、そよととて出むかはる、此厄いまだたいめはえせざるなからひなれど、此春ばかりなりけん、せうそこしはじめで、かたみに心かよはず思ふどちなれば、物のついでにおとづれ物しけるを、いたくよろこびて、か

ねてなつかしうは思ひわたり侍る物から、まのあたりかうたいめし侍らんとはゆめ思ひよらざりしなど、かへすくいたはりいふ、や、時うつるまで物がたりし、いまはかへりなんといふに、みやどりはいづこにかし給へると問へば、室町なる安藤氏に今日ものし侍りつるが、明日よりは、三ぼん木なる山紫水明處とがいへるに、かり居し侍らんとすと答ふ、(自注、山紫水明處は、もと頼山陽の幽居なりけるが、山陽なくなりてのち、安藤氏かひとりて、今は此家の別業にせられたるなり、おのが此度都にもものしける、同じくは靜なるところよかめりとて安藤氏、この別業をしばらくかしくれたるなり) さあむには、こゝにはいと近く侍り、かならずあまたゞび物し給へなどいふ、あたりみまはし、おほきなる急注、また茶のふくろにいりたるなど、おのがまへにつきすゑ、これもて行給ひてよ、かりやは物たらはぬがちなるものなり、よろじ給ふもの侍らば、おろく子して告給へ、御こゝろをなほ給ひそ、とかへすくいふ、いとかたじけなうとて、うなづく、わか

廿七日、ひねもす雨ふる、安藤氏にゐる

廿八日、けふは三本木へうつろはむとて、安藤のあるじとよもに、かのかたへものす、此はなれや、加茂川へのぞみてたてり、高らむの下ちかう水ながる、川ひとつへだよりて、東の岸つゞき、いはゆる白川へものする大路なれば、人のゆきかひもとも多し、柴いたゞきたる大原女、冠き給へる大宮人、あき人のものうりありく、法しのさく杖ふりゆく、高きいやしききらいひなう、絡繰不斷とやいふらむありさまも、さはいへど、都のでぶりはかり、こよなうなつかしきはあらず、安藤氏よりさけかなはさらなり、夕げのまうけ、手ならず調度なにくれともてはこびたり、こゝのとなりなる奥田葉きたり、こゝは醍醐殿の御うち人なりとぞ、こゝに

給はん限りは、よろじ給はむこと、なによらざるおのがかたにおほせ給へなどねもごろにいはる、杯かたみにとりめぐらす、此家なみにをりて、物よくいひとほりげなるをの子、はた安藤氏のことによびにやりたるがきゐて、よろづうしろみだちものいふ、杯をおのれひとりりやうして、すすりつゞけるが、あひすゝみてくり言する、かくみやびたる處には、ふさはしからぬを人のふるまひよ、と心の中にはなく思ふ、うはべ繕ひてうちききゑる、たゞしはらくのかり居と思へど、家ひとつとめいでぬれば、たゞちにかううるさきもの、うちまじりきぬるにうんじて、はやくこゝのすまひもさまでこのましからず思ひなりにき、時うつりぬとて、まろうどみないで、安藤氏のをしへ子某、はじめよりあるじにそひてきみけるが、物かげにありて、よろづの事とりまかなふ、酒あたゝめむとしけるが、おとし火のあまりにするどくて、かの蓮月尼のかしくれたるきふす砕けゆく、心ぐるしう思へどすべなし、うちらしたるうつは物どもとりをさめさせ、おのれら二人をこゝにおきて、あるじ家にかへる、あぶらびともしおくもの、心づかざりしにやもてこず、そくたひの火のあかりにて、夜のものとりいでうちぬる、ありあけのともし火ほしけれど、夜ふけたれば、とりにゆかかんやうもなし、そくたひの火はまばゆくて、ぬるにびんあしきがうへに、みなかうともしはてなば、夜中にいかなることの出こむにも、せんすべなしと思へば、よき程にてうちけつ、はじめてやどりたるひとつやの、つね人をらぬ屋なれば、やもりといふ虫などはひ出、なにとなうあたりさうざうしきに、くらやみにさへなりてあれば、心おちるねど、ねむじてめふたぎをる、かも川の水のおと、枕がみにものがなしう聞え、千鳥の夜すがら鳴くなど、かきあつめたるさびしきを、心ひとつにかぞへたて、夜ひとよあかす

一さよふけてなくこゑくらき友千どりやみ路にまよふ心しりきや

まくらよりあとより物のおそひくる心ちせられてのねまよひつゝ

廿九日、ひいとよし、戸のひましらみれば、とくおきて、まへなる川におりたち、手あらひなどをしつつをちこち見わたす、東山まむかひなり、清水智恵院見ゆ、吉田山ひえの山も見ゆ、川ぎしつたひに柳いくもとよなるあるが、のどかに杖うちたれ、消わたれる朝霧のなごり、一寸ちうすう明はへたる、あなおもしろ、世にはかゝる處もあればある物かな、としばし物もいはで、見ほれをる、今滋かたはらにありて

ひがし山朝日のどかにのぼりきてかもの川原にちどり鳴くなりとおのれも、（下略）

こよなうをかしき山紫水明處や、頼山陽がありし昔思ひやらる、此人なくなりて今は三十とせばかりになりぬらむを、（下略）、さりげなうながくつたはり、あはれと見らん人の目をたのしましむる、山水無常主、山屬愛山人といへる、古しへの人の言のは、そゞろに思ひ出られ、人のよのうつり行あはれさ、涙さしくまれで、かなしう覺ゆ（下略）

三十日、雨ふる、今滋安藤氏に物す、歸り路はたつものかひてもてく、やがてひるのまうけにそなふ、ひるすぎて蓮月尼とぶらふ、なにくれものがたりす、烟草紙など御つかひれうにし給へとてくる、日暮になりたればとて、火ともす物よりいでよかす、かり居に歸り来て、戸ざしかぎもてあけむとするに、いとふるびてさびたるがうへに、うまくはあひがでなるにてえあかず、あまたよびとかくすれど、同じやうにて時うつる、すべなきに、となりなる奥田氏に行て、しかん、のよしいひければ、ありとあるかぎとり出して、この中にあふべきがありや、こころみ給へといふ、それかりきて、ひとつ、もちひみたれど、みなえあはず、かくて戸のま

へに立をる程いとひさし、ひさげもちたる火も消ぬべくなりぬ、心いられて、あふべくもあらぬかぎをしひてあはせ、くるくめぐらせど、なほおなじさまなり、今はあきれいかはせむ、さりとて此まゝ安藤氏へ行んも口をしなど、もてわづらひをるうち、今滋ちから田して、戸をいたくおしければ、しきみはづれて、内のかたへ戸ねじれいる、ねじれたるひまより、肩すばめてからうじて入えたり、さて火をけさぐり出し、火ふきおこして湯わかし、夕け食ひたりき（文久元年九月）

備中の小野家を訪ふ

備中には、山陽の遺蹟が多い。殊に、彼が、親類同様の親しい關係のあつた小野家は、備中の長尾村に、今も儼然大門戸を張つてゐる。此の家には、少からず山陽の揮毫があることを、久しく耳にしてゐたから、一たびは訪ねて見たいと思つてゐたが、つい其の機縁を得ずして過した。然るに、十數年前、關西旅行をしたに就て、岡山縣まで幸ひ出かける用事が出来た。そこで、自分は、此の好機會に小野家を訪ねて見たいと思つた。すると、幸ひにも、小野家の住んでゐる村へ、不思議に出かける事となつた。實は、小野が備中の人とだけは聞いてゐたが、備中の何村であるなどは知らなかつた。然るに、偶然にも、處用が生じて、其の村へ出かけて行つたとは、頗る奇遇といはねばならぬ。

岡山から、庭瀬(大養木堂の郷里)、倉敷の二驛を経て、次が玉島の驛になる。そこから十町ばかり

歩くと、長尾村であるが、其處には舊友田邊碧堂（爲三郎）氏が居る。自分は此の人に處用があつて訪問したのであるが、氏は生憎不在であつた。止むなく、數時間待合せねばならぬので、其の間、無聊の餘り、あちこちと村内を徘徊すると、田邊家を去る四五十間の距離に、宏莊な豪家が二軒あつて、殊に、其の二軒とも並んで、「小野」といふ家札が出てゐる。一つの家の表札は婦人の名、一つの家の表札には「小野映太郎」としてある。自分は、フト其の家の前に歩を停めて、もしも之が久しく自分の訪ねたいと思つてゐた小野家ではあるまいかと考へた。山陽の屢々往來してゐた小野家は、「小野泉藏」といふ人であるが、此の兩家の孰れか、多分、其の「泉藏」の後に違ひなからう。斯う思ひ浮んで來ると、自分が偶然にも碧堂氏を訪ね來て、意外の發見をしたことに、少からぬ愉快を感じずにはゐられなかつた。それにしても、訪問するには誰かの紹介を得ねばならぬが、碧堂氏に頼めば、それは容易なことであらう、と自分は益々萬事の都合よさを喜んだ。

斯くて、田邊氏の家に待つこと二時間許りにして、碧堂氏が歸つて來たので、用談後直ちに小野家の話に移り、「日頃の念願で、是非、小野家を訪問したいが、君の紹介によつて、其の家に傳はつてゐる山陽の遺墨を一見したい」と自分が頼むと、碧堂氏は快く、「小野家の當主映太郎氏は同窓の友で、且つ同年でもあり、少年時代から、兄弟も當ならぬ交際もしてゐて、極めて別懇であるから、紹介などは容易である」と直ちに受込まれ、且つ曰く、「全體玉島村（川田斐江の出た村）は、昔から、小野

家と田邊家が互ひに豪家として對立した所で、田邊家の山陽時代に於ける先代といふものは武の趣味を以て立ち、學問は朱子學をやつた。随つて極めて嚴肅な人であつたが、之に反して、小野家は文を専らにし、山陽時代の小野家の主人本太郎（務とも云ふ）といふ人は、歴史趣味を有して、研究も深かつた。漢學の力もあつたが、寧ろ國語の方に造詣があつて、歌を善くした。小野泉藏といふ人は、本太郎の叔父さんに當る」といふはなし。此の泉藏のために、山陽が「招月亭記」といふ文を書いて居ることなどは、自分が青年時代から熟知の事である。その家は何れにあると聞いて見ると、碧堂氏が「叔父の泉藏は小野家の分家で則ち此處だ」と指さされた。それを見ると、丁度田邊家の向ひの家がそれであつた。氏は更に語を次いで、「小野本太郎といふ人は、菅茶山の門に入つたことがある。其の頃、山陽は、茶山の塾頭をしてゐた因縁上、小野家に接近することゝなつたので、一つには又、小野は歴史趣味を有してゐたから、山陽の史才を愛でたゝめでもあつた」と。

凡そ、一郷の中で、二つの豪家が並び立つと、兎角、互ひに頡頏の態度を執るもので、一方の悦ぶ所は、他方の悦ばぬ所である。況んや、小野家と田邊家は、文武、其の趣味を異にし、其の性格も異つてゐる。山陽は、茶山の系統から小野家に頼り、いつも長尾へ來ると、小野家に宿泊して、田邊家へは交際が疎であつた。

尤も、田邊家でも、山陽の文學を認めたには相違ない。現に同家に映碧堂と書いた山陽の額が掲げ

であつた。(當主爲三郎氏が碧堂を雅號とするのは、之から出たのである)これは、當時の田邊氏が山陽に頼んで堂號を選んで貰つた時の物で、之を見ても、相當、山陽を敬したことが諒解し得られる。併し、山陽は、例の磊落豪放で、小野家に來てゐても非常に大酒で、酔後、縁側に出て放尿する、或は下婢に戯れるといふやうな譯で、之を見聞した田邊氏は、其の失態を難じて、「いくら學問があつても、あんな行狀では困る」と言つて、敬して遠ざけた。隨つて、田邊家に山陽のものは残つてゐないといふ。

碧堂氏は語り來つて更に曰く、「ところが妙なもので、時代は一變し、自分は文を専らにし、小野映太郎君は銃獵なんかをやつて居る。文を嗜んだものが武を専らにし、武を専らにした家の自分は、幼少から文事を好み、即ち昔と今とは小野家と田邊家は、全く顛倒してゐる」と一笑し、それから、話は有名な歌人、木下幸文の事に移つた。序でだから附記するが、幸文は實に小野家の番頭の息子であつて、幼にして歌を詠する天才があつた所から、「此の子教ふべし」といふので、香川景樹に學ばせ、遂に一家を爲させたのだといふが、「其の家は其處だ」と碧堂氏の指さす所は、丁度、田邊家の筋向うに當り、小野泉藏の家と隣つてゐるが、家は既に亡びてしまつて、其の跡が畠となつてゐた。

彼は話をしてゐると、兩小野家へ出した使が歸つて來ていふ。「お向うの小野さん(泉藏氏の跡、今の主人節氏は文學の才あり、和歌を善くす)は、御留守です。御本家の方は、やはり御主人は御留守

でしたが、奥さんが、何か御覽に入れるものを指定して下されば、私が出しますから、御出で下さい」といふ特別の挨拶である。これによつても、平素、田邊、小野兩家懇親のことがわかり、主人が不在でも訪ふ事の出来るのを、自分は深く喜んだ。碧堂氏が「サア参りませう」と言ふので、伴れ立つて其の門を出ると、「マア兎も角これを御覽なさい」と、碧堂氏は、自分を小野泉藏の家の側に在る空地へ案内して行つた。行つて見ると、家の裏には川が流れてゐる。其の川に臨んだ座敷を碧堂氏は指さして、「此處が招月亭です」といふ、見ると、未だ一度も火災にも罹らず、昔其のまゝになつてゐて、川を隔て、一望千里の田野を眺められる工合は、山陽記文の通りに見晴しはあるが、併し、其の招月亭といふのは、彼が文章に飾られたごとくに、決して立派なものではなく、丈の低い質朴な普通の座敷にしか過ぎない。自分は、文章の美と實物の質朴さを對照して、少からぬ懸隔のあることに驚いた。

更に、山陽の文中にある「秦川」といふのは、即ち、此の亭の前を流れてゐる川だと聞いたが、是も、文章で見ると巨川のやうに思はれるのに、實は、幅三間位の、飛べば飛び越されさうな川で、本名は「畑川」である。つまり、畑の用水に過ぎない。然るに、一たび山陽の筆に上ると、如何にも天下の大川らしくなるのであるから、事實に遠ざかるといふ非難もあらうが、又、それだけ、文人として異常の才筆を語るものといふことが出來よう。碧堂氏は更に語る、「今日は此の家の主人が不在で、

甚だ遺憾だ。實は此の川に臨んだ座敷には、山陽揮毫の招月亭の記の額が懸つて居るし、其の他種々の墨蹟があつて、君に示したいものが頗る多い。中にも書簡類に殊に面白い物がある。山陽の死んだ時に、山陽の妻の梨影が、覺束ない假名で、非常に精細に病中の事を通信した手紙の如きは、殊に参考になるべきものだが、何分、主人が不在なのは残念だ」と。自分も、實に、此の話を聞いて、先を急がぬならば、是非、一見したいと思つたほどだ。

それから、伴れ立つて本家を訪うた。本家は婦人の名で、今は末亡人が二人居る。映太郎といふのは隣家で、是は、分家になつてゐる。併し、本家で全く男が絶えたので、映太郎氏が、萬端の差配をしてゐるといふことであつた。碧堂氏は、幼少の頃から、自分の家同様に親しくしてゐるので、自身で案内して本座敷に自分を通された。其の時先づ目に觸れたのは、「移山亭記」と題した山陽の文章の額であつた。此の記は山陽遺稿中にも載せてあるが、どうして此の家を移山亭といふのか、其の理由を碧堂氏に質すと、氏は之に答へずして、「先づこれを見給へ」とばかり、直ちに座敷の戸を開けた。すると、古く寂びた庭が現れて、其の小高い所に、富士形の巨石が、庭に威嚴をそへて居る。いかにも富嶽の形に似た石で、自分は之を見て、移山亭の名もあるかなと合點したが、其の時、碧堂氏は、「此の岩を主人が得た爲に、山陽に亭名を撰ばせ、そこで此の額が出来た」と語り、且つ自分の立つてゐた縁側のあたりを指さし、「今君の立つてゐる其の邊が、恐らく、山陽が放尿した所だらう」と

一笑した。此處も火災に遭はぬので、昔其の儘の家だから、山陽の遊びに來た時と、少しも面目を改めない。彼は、此の室で鯨飲し、此の疊の上で古今を談じ、大氣焔を吐いたのかと思ふと、興趣は胸に湧いて來るやうであつた。兎角、來歴のある家に行くと、其の座敷の構造とか、庭の泉石などに就て、趣味深く感ぜられるものであるが、殊に、一種故人に就ての聯想が浮んで、更に、面白みを増して來る。

此の移山亭の額を讀んで見ると、當時の主人であつた本太郎氏の親の樸翁といふ人が、近郊に遊んで、富士に似た一大石を得たので、之をひどく愛した餘り、わざ／＼移し來つて、移山亭の名を附したのである。山陽は之に對して、「勝石の奇は既に諸名士の題詠あり、余又何をか云はん」といふ風に、通常の書きぶりを避け、主人が歴史家だから、請ふ、史實を以て富嶽を論せんと云ふ鹽梅に、古來、富嶽を訪うた英豪の名を多く挙げ來り、是等の英豪は、禍亂を平らげ、群雄を駕馭すること、宛ら奕棋のごとく、その抜き難きを抜き、其の封土を移すが如きは、掌を指すが如く容易であつたが、さて、富嶽は、之を奈何ともする能はず、皆千里を遠しとせず、足を勞して訪問せざるを得なんだ。然るに、翁は、是等諸豪の爲し能はなかつたものを、容易に邸中に引き來つて、朝夕坐臥、其の娛玩を縱にするといふやうに、流石は、歴史家が歴史家の爲に書いた記文だけあつて、例を總て歴史の中

元來、樸翁とは如何なる人かといふに、泉藏の兄で、山陽が初めに泉藏と同じく親しんだのは此の人であつた。此の人の傳は、やはり山陽遺稿中に一篇載つてゐるが、それに依ると、翁は備中の大儒西山拙齋の教へを受けたもので、相當の學問もあつて、非常に客を愛したが、其の普通俗人等が爲すことゝ違つて、金のあるに任せて、無暗に御馳走などはせず、一通り酒食を供へて終日話し、山陽が寢に就いた後も、何か思ひ付く事があると、深夜、燭を照して模索し來り、山陽の枕側に坐して話をしたとは、山陽の自ら記する所である。話題は、云ふまでもなく、和漢の興廢、忠孝節義の跡に於てしたに相違なく、慷慨恠むことを知らず、時に雜へるに諧謔を以てしたとある。翁、諱は方、字は仲直、通稱は猶吉と云うた。翁の傳によつて其の人を按ずるに、極めて謹厚質朴であつたことが推測出来る。此の人が、放縱なる山陽を迎へて親しんだといふのも、蓋し、其の才を愛したからであらう。翁は、此の行狀書にあるごとく、儉素な人であつたらしいから、山陽を待遇するにも、必ず有合せの肴で賄つた位のものであらう。山陽が、ヨツバラツて亂暴をしたり、或は、飲み過ぎたりなどするのを、此の氣質の翁が咎めせず、爲すに信せて、始終、蔭日向なく親しんだのは、よく、山陽の才を愛したと見える。

樸翁は、山陽の父春水が歿した少し前に此の世を去つたので、山陽は、其の後、樸翁の嗣子たる本太郎と往來を續けた。本太郎と、年輩も大分違つてゐた山陽は、さぞ門弟に對する如く、随分、我儘

を言つて困らせたものであらう。かゝる關係上、山陽が書き残した書畫詩文の類は、此の家にも、泉藏の家にも、無論、多く傳へられてゐる筈で、自分は、會て、大阪に於て山陽遺墨の陳列會があつた時に、數百點を見たが、總て此の小野家から出た物が逸品であつた。此の日は、汽車の時間も迫つて居ると、主人不在のために、餘り多くを見ることが出来なかつたが、十點ばかり見たものは、皆、特殊の味があつて、頗る興味を感じた。詩などを録したものにしても、これは道中の興の内得た詩だとか、此の句は斯うも考へたが、どちらがよからうかなど、作詩の徑路が題識で知れるものなどが多く存してゐる。これらは他家の藏中には見難いものである。就中、自分の最も興味を感じたのは、幾通かの書簡で、何れも長文であつたが、時間が無い爲に、碧堂氏と走り讀みをした。其の中には、拍案、奇を叫ばざるを得なかつたものもある。其の一通は、別項、書簡のうちに收めて置いた。また、同じ書簡の項に、小野家で見手紙に就て所見を陳べて置いたから、こゝには重複を避けるが、樸翁は、尾道の橋本とは違つて、儉素一點張りで、山陽に對しては、酒を飲み過ぎぬやう、金を無駄に遣はぬ様、常に意見をしたらしく、山陽の得た潤筆は預つて遣つて、利殖を圖つたりしたことなどが、山陽の書簡に就て推測される。山陽も、樸翁に對しては一目を置き、其の安心を博するため、「自分は近頃は酒を一切廢して、何處へ遊びに行くにも、酒瓢の代りに茶籃を携へる、祇園邊へはトント足を向けず、専らタメ一方だ」と云うてゐる。又、樸翁の病を聞いて、保養を勧めるあたりに



は、「どうぞ御自愛を願ふ、獨り貴家の爲に之を願ふのみに非ず、囊の爲にも之を願ふ」といふやうなことも書いたり、先生なか／＼先の呼吸を呑み込んで、其の歡心を失はぬやう、十分に筆を回してゐる點から見ても、なか／＼隅に置けぬ人物である。彼が如何に巧みに筆を遣つてゐるかは、書簡の項の内に收めた、小野氏宛の一長簡が其の標本であるが、山陽の人となりを研究するには、此の邊に存在する手紙を材料にしなければ、其の面目は分らぬといふことを痛感した。

耶馬溪探勝

山陽の名と共に、何人も聯想を禁じ得ないのは、大分縣豊前の耶馬溪で、山陽の遊記や詩で天下に初めて紹介されたのである。耶馬溪と云ふ名も、山陽が雅名を附したので、實は、山國谷と云ふ平凡な地名であつたが、今はむづかしい字で書く耶馬溪が、寧ろ通り名となつた程に、此の勝區は、山陽に宣傳を受けたのだ。自分も、青年の頃から、其の遊記を読み、其の詩を誦し、夢寐の間に憧憬して、一たびは此の名區に遊びたいと心懸けつゝも、久しい間、其の機會を得ずして、却つて他の名山大川を跋涉して、可なり多くの風景に親しんだ。日本第一の絶勝と云はれる紀州熊野の勝區は、まだ探つたことはないが、其の他は大抵訪ねてゐる。隨分、無名の山水で、日本三景など古來持て囃されてゐるものに比し、幾段も以上のものは決して少くないが、それ等もいくらか見てゐる。然るに、

耶馬溪だけは、訪ふの機會が無くして、漸く、四五年前、別府に浴した折に一遊を試みた。これに依り、長い間の渴望を癒したが、實は、幾多の風景美を味つた其の後に、此の勝區に游んだのであるから、自分の山水眼は、決して初心ではなかつた。從來耶馬溪を見た人の話では、耶馬溪も評判程では無い、恐らく、君が見たら失望するであらうなど云うた。自分も、それ等のために、内心、多くの期待を抱かなかつた。其のためか、幸ひにそれ程の失望を感じなかつた。茲に、聊か自分の眼に映じた耶馬の風景を論じて見たい。

自分の見た所では、山勢の雄偉は木曾の諸峰に及ばない。莽蒼の味は別してない。其の奇形に於ては、白雲、金洞に數齣を輸さざるを得ない。たゞ溪流があるから、白雲や金洞などに優るといふ論は公平を得てゐるが、其の又溪流の美は、木曾川、保津川に及ばぬのみか、吾が越後の阿賀川の上流にも及ばない。山嶽、溪流、相伴うて美を成すものに至つては、甲州の御嶽がある。山嶽の奇は耶馬に譲らずして、連亘、數里に及び、觀者は、寸刻も、倦怠を覺えない。此の點では、寧ろ耶馬溪よりも一段上に在ると謂つてよからうと思ふ。自分の知る所では、九州の山は、奇峻雄偉の氣がないでもないが、規模稍小で、木曾や甲州の山を見た眼には、甚だ物足らぬ感がある。耶馬溪も、近年、發見された深瀬谷、即ち深耶馬或は新耶馬と唱へる深山は、雄峰、數里に連なり、規模も強ち小ではないが、甲州御嶽の如き怪巖奇石などもなく、且つ此の深耶馬は、山陽の跋涉を経た耶馬の終點から、二

里餘も奥に深く秘せられて、そこまでの間の山水は誠に平凡なもので、何となく造化が手腕を吝んだやうな趣がある。殊に舊耶馬溪は、峰嶽の奇がないでもないが、規模は深耶馬溪より甚だ小で、奇峰怪巖の、目を驚かすものも、十數里に亙る山國川の沿岸中、其の二三里の間に過ぎない。委しく云へば、樋田驛より柿坂の間ばかりで、彼の青洞門、羅漢寺、競秀峰、賢女ヶ岳、佇立巖、醉仙巖などの、人口に膾炙する諸勝は、多く此の二驛の間に藏せられてゐる。此の間の風景は、實に快哉を禁じ得ないが、汽車は遠慮なく疾走して、四十分もたぬうちに過ぎ去る所から察すると、其の規模の小なることが想はれる。耶馬の規模を論じて、之を大なりと云はんには、深耶馬溪をも包含しなければならぬ。然るに、從來、耶馬溪を論ずるものが、之を除外して規模の大を説くのは、甚だ心得難い。山陽は、中國、京洛に住して、足跡、多く關東、東北に到らず、又、當時、耶馬溪の支流に、更に深き耶馬溪あることを知らぬので、忽ち天下の絶勝と叫んだのは、畢竟、彼自身の見た範圍のみに就て言つた月旦で、固より公論とは認め難い。

併し、風景美を秤量するには、種々の尺度があると思ふ。規模の大小は其の一つである。山嶽の峰嶽奇峻も其の一である。所謂平凡の雄偉といふものも其の一標準であらうし、畫趣ありといふも、亦其の一尺度とすべきであらう。其の畫趣ありといふ標準には、規模の小は必ずしも妨げない。種々の雜景が點綴して、却つて畫趣を助けるものもある。山陽が耶馬溪を絶勝と叫んだのも、恐らく、其の

畫趣を標準としての言であらう。さうだとすれば、自分も、亦同意するに躊躇しない。多くの深山幽谷は、地域窄まつて、雜景が之に伴はぬ。木曾の山岳の如き、甲州の御嶽の如きは、是である。白雲、金洞の諸嶽も、唯怪巖奇石のみであるが、耶馬は地域廣濶で、田あり、畑あり、川あり、橋あり、人家あり、寺ありて、畫として風趣を爲すものは、凡そ一境に備はつてゐる。世の山水の奇勝を探るもの、只管、奇峯怪嶽の重疊連互して、他の景を交へぬものを上乘とする風がある。かゝる者流は、耶馬溪が種々な雜景を交へてゐることを、寧ろ厭ふでもあらうが、これらは、畫趣を度外に置くものである。耶馬は全く一卷の好畫卷である。而も尤も人好きのする畫卷である。山は敢て高くもないが、奇峭である。境は必ずしも深くはないが、而も人間味は潤澤である。道は山を穿つて通じ、寺は怪巖に倚つて築かれ、川には香魚あり、到る處に酒を賣る亭もある。好箇の畫材が皆備はつて、畫境とも畫趣ありとも言ひ得られる。且つ、其の世俗的趣味の點綴しある處は、天然の公園とも見るべきであらう。そこで、自分は竊かに思つた。耶馬の人に賞されるのは、恰も山陽其の人が、世に賞されるに齊しい。何人にも可なる山水、何人にも可なる文章、これが洵に似通つてゐる。併し、其の何人にも可なる山水や文章が、必ずしも第一の山水文章と言はれぬことは勿論である。山陽は、倪雲林や黃大癡の筆に非ざれば畫し難し、と耶馬溪を評したが、これは恐らく當つてゐない。彼、不幸にして、内地に於ける名山を見ず、まして支那大陸の雄峰峻嶽を知らぬ爲に、耶馬を以て直ちに倪黃の畫

材と断じたに至つては、惜むらくは、其の眼孔小なりと言はざるを得ぬ。

自分の耶馬溪観は、ザツと右の如くである。交通不便の山陽時代には、勝區は多く隠れて、人間の見るを許さなかつた。古來、多く激賞された風景なども、今から見れば、平凡のものが多く、評判が高いから、習慣的に佳景と思ふに過ぎぬ。實は、雷同である。古來、勝區と持て囃されたものは、曰く天橋、曰く松島、曰く琵琶湖、曰く何、曰く何と、多くは四條派趣味であるのに反して、耶馬は南畫趣味である。山陽が激賞して措かなかつた譯も、恐らく、南畫趣味の風景が餘り注意を惹かれなかつたので、ウンと之を揚げたのであらう。確かに、耶馬は、南畫趣味の一名區に相違ないと思ふ。山陽は、耶馬の風景を賞讃して、番に詩にしたのみでなく、之を畫にして一大横卷を作つた。それが又、有名なものとなつてゐる。今、筆の序に少しく其の事にも及びたい。

山陽は、其の西游の歸途に、中四五日隔て、兩度まで耶馬溪探勝を試みた。二度目の遊には、莫逆の友雲華と同行した。雲華は、耶馬溪附近の、古城の正行寺に住してゐた。これが有名な横卷を畫いた動機となつたのだが、此の圖卷の外に、耶馬溪再遊の遺に宿した淨眞寺といふ寺で、即日筆を執つた一幅の圖がある。畫中に顯された二人の人物は山陽と雲華で、後年、山陽が橋本元吉の爲に寫して遣つた横卷の記文に「遂席溪畔、與合公傾瓢一醉」と云うてゐるのが、即ち是だ。此は豎の掛物であるが、此の幅が先年故朝吹英三氏の手に入り、同氏は其の時大いに喜んだ譯は、氏の郷里も耶馬

溪附近で、而も正行寺を距る程遠からぬ處が出身の地だといふ、淺からぬ因縁があるからであつた。淨眞寺は、雲華と同派の眞宗寺である。

當時山陽が雲華の爲に描いた、有名な耶馬溪の横卷は、雲華の手に珍藏されてゐたが、其の後、回祿の災ひに罹つて、今は天地間に存せぬこととなつてしまつた。併し、同時に揮毫した條幅が、幸ひに現存してゐるのである。また、今も世に頻りに持てはやされてゐる、耶馬圖卷といふものは、尾道の橋本家に藏されてゐるが、これは、山陽が、耶馬探勝後、約十年も経た後に、橋本から望まれて、古い記憶を喚び起し、再び執筆したもので、此の圖卷の副本なども世に流布して、人の多く知る所となり、天下の珍と稱されてゐる。固より、記憶を辿つて筆を下したのであるから、恐らく、最初、雲華の爲に描いたものより、幾分、遜色があるであらう。斯う考へると、當初、先づ興に乗じて揮灑した圖卷を、今見ることの出来ぬのは、誠に残念至極である。さて、朝吹氏は前に擧げた條幅を得た因縁から、橋本家に傳はる圖卷を、是非、自分のものにしなさいといふので、頻りに手を盡して見たが、何分、其の家の珍藏とあつて、いかにしても手離さぬので、結局、田邊碧堂氏を煩はして其の摸本作つたが、茲に、朝吹氏が甚だ幸ひだと感じたことは、山陽が圖卷を作つた折に、雲華に贈つた手紙を手に入れたことである。これは、自分も、曾て見たことがあるが、其の手紙は、山陽が、圖卷を作つて、非常にそれを得意とし、京都あたりでも大評判、これ程のものを描くものは、當世にないさま

で激賞されたと吹聴し、例の橋本吉兵衛（灰屋）も是非ほしいと言つて居るなどと、例の一流の筆で、頗る其の得意の状を現し、更に、戯れ半分に、潤筆の一段にいたつては、先づ、君との間柄ではあるが、これは一つ奮發して貰はねばならぬといふ事に及んで、さて、如何なる大要求を持ち出すかと思つて讀むと、これは又意外千萬、天下有數の大自然と誇る所の大作品に對して、求むる所は甚だ薄く、僅かに一部の詩集に過ぎない。それは、唐宋詩醇を一部か、それよりも、寧ろ國朝詩別裁集の方ならば更に結構だと言つて居る。此の兩書の何れにしたところで、其の頃も今も至つて廉いもので、山陽自らも其の價を語つて居る。即ち、京阪の價は金三分、長崎では、舶載の書が廉いわけだから、二分には買へよう。君は長崎に近い所に居るから、これは長崎で求めてくれと言つて居る。天下の名品と大威張りの畫の代りとしては、至つてお廉い註文を出したもので、いくら、今日の相場とは違ふとしても、二分や三分の價だとすれば、思はず一笑を發せずには居られない。

斯ういふ手紙まで、己に手に入れた朝吹氏は、更に、副本でもよいから、耶馬の圖卷をほしいと望むのは無理ならぬことで、偶々田邊碧堂が橋本家と懇意な所から、其の圖卷を借受けて、先年臨寫したのであるが、自分も曾て見たことがあつて、それは頗るよく出来てゐる。恰も詩人にして且つ畫を善くする碧堂君の如き人が臨寫して、且つ跋に代へるに若干の詩を以てしたなども、此の卷には極めて適切な、實に其の人を得てゐると感じた。碧堂氏は自ら語つて、自分は、此の頼みを面白いこと、

して快諾した。唯、自分は、山陽に及ばぬことを遺憾とするが、併し、朝吹氏が雲華を以て任ずるに對しては、自分の、山陽を以て任ずるのも、強ち不權衡ではあるまい、と言ひ終つて一笑した。

尙、序に付け加へて置くが、山陽が、前後二度、筆を執つた耶馬溪圖卷は、山陽存命中から四方に喧傳して、誰とて激賞せぬものはなかつた。そこで雲華も、種々の人に題跋などを需めたが、茲に餘り此の畫を褒めないものが一人あつた。それは、今こそ、多くの人も知らないが、當時、尾道に橋本家と覇を争つた豪家で、龜山（號、夢研）といふのがあつた。山陽にも縁故淺からぬ家で、尾道へ行けば、橋本家か此の家かには必ず行く程の間柄であつた。現に、山陽の叔父杏坪は、此の夢研の爲に、先代の墓誌を作つて居る。又、竹田が、或者に與へた手紙によると、夢研が百貫目をかけて雅室を建てたともあるから、當時、龜山家の豪者を想像するに足るが、夢研は、相當に畫を作り、其の實弟某も、亦畫を善くした。斯かる文藝趣味ある豪家であるが、これが、有名な耶馬溪圖卷を見て、餘り感服しなかつたといふのは、一つは、本人自身が畫を善くする上から、専門家ならぬ山陽の畫に慚らなかつたであらう。又、龜山家と對立して、富を競うて居た橋本家の爲に、揮毫した圖卷であるといふ點から、一種の反感も手傳つて、尙更、賞讃を吝んだ氣味もあつたであらう。兎角、一郷に二豪族の並び立つ場合、其の間柄は面白からぬが常であるから、或は、そんな關係から來ても居るであらうが、いづれにもせよ、佳評嘖々の間に在つて、獨り感服せぬと言ひ放つたものは、唯、夢研あるのみ



氏の家は、雲華の正行寺を距る、僅かに十町ばかりの處と聞いたことがある。氏は此の幅を獲たのみならず、雲華所藏の山陽の書簡數通をも手に入れた。それは皆耶馬溪のことに關係ある文通で、ナカナカ興味がある。尙、これらの文通の内に、雲華の妾が京に在つて、男子を分婉したことなどもあつて、情味がある。自分は、幸ひに、朝吹家から詩畫二幅を撮影することを許されたのみならず、同家にある、山陽書簡全部の借覽を許された。此等書簡の中には、雲華宛四通の外に、山陽が母堂に送つた二通の長文もあつて、一通は母の病を慰める孝情淋漓たるもの、他は餘一が後妻を迎へる折の經緯を録したもので、共に此の篇に逸すべからざるものである。

先づ、雲華宛の書簡に就て、少しく書いて見よう。耶馬溪卷に關する書簡の大意は、朝吹氏、生前一通の書簡を示された時の記憶により、本篇に略叙して置いたが、尙、仔細に讀んで見ると、補足を要することがいくらかある。三月廿七日附、第一信とも見るべき書簡の内に、横卷發送の後れた理由として、表具の手間取れたこと、尙、箱を作らせたため、愈々手間取れたこと、箱代は安直に出來たが、表具代は案外に高く、臆を潰されるであらうなどある。箱の出來た日、月峰の展觀があつたので、それへ出陳して見せたことを報じ、自分も、斯様のもの、二度と書く精力が無い、潤筆は、おきばり下さい、と云うて何を求めるのかと云へば、僅かに價二分の唐本、國朝詩別裁集を買つてくれとの無心。山陽の意氣としては、餘りに謙遜な要求に一笑を禁じ得ぬとは、本篇にも書いた通りであ

る。六月十日附、第二信と見るべき書簡の内には、三月末に、大阪湊橋迄、長卷を出したところ、良山堂に借りられ、在阪の南宗趣味家は、日々、良山堂へ推しかけて、閲覽するもの多き中に、讃岐の梶原九郎左衛門といふ好事家が見て、ひどく褒め、そして、梶原は、その姻家である、尾道の灰屋(橋本)吉兵衛へ傑作だと報じたのを、橋本が山陽と懇意である所から、梶原の手紙を輸送して來たことなどを報じ、陰で褒めたのだから、諛辭ではないと吹聴し、大阪邊では拙畫大評判となつた、と大いに得意がつてゐる。九月廿三日附、第三信の内には、長卷の評判愈々高くなつて、野呂介石までも、一見したいと云うて來たなど、毎信必ず吹聴を怠らず、且つ、其の都度、謝物をお忘れあるなと繰り返してゐる。併し、あまりクドイと自覺したか、第三信の終には「此方へもらふ事計、甚だ慾心不當の奴と御見限恐入候へ共、寒士之常、御海恕可被下候」と言ひ譯をしてゐるなどは、愛嬌がある。

以上は、耶馬溪卷に關する條のみを抄したのであるが、此の名高い横卷の緣起に、山陽手筆の此の文書を缺いてはならぬと思ふから、長文ながら、全部を收めることにした。

尙、雲華宛、同じ手紙の内に、雲華の妾の事が散見する。殊に、一通の小簡は、全く此の事のみに関してゐて、取りわけ情味を覺える。今、それに就て聊か書いて見よう。雲華は眞宗の僧であるから妻帯自由で、食饌にも魚鳥の肉を載せたので、菅茶山は、生臭坊主と呼んでゐる。毎年、或季節には

京都に上り、本山本願寺で講演をするのが其の勤務であつたので、自然、京洛に妾もあつた譯だ。其の妾の素性はわからんが、名をお露というので、東山あたりに住はせたと見える。雲華に親しかつた山陽は、勿論、其の妾を知つてゐる筈で、雲華在莊の時は、往來もし、不在の時も、音づれたと見え、第一信の尙々書に「阿露兩度ほど尋申候、其後逢不申候、貴錫東飛を待居候様子に候」とある。此の阿露が男子を分娩した。それに就て山陽は、第二信に、滿幅の喜びを云うてゐる。其の文は例の談話縦横で、人をして顔を解かしめるの妙がある。其の大意は、耶馬溪卷よりも何よりも大切な寶物を得られ候は、お露が六男子を擧げたことで、それがまことに貴君に酷似し、小雲華と云ふべきだ。これに就て思ふに、これ迄出産の無かつたのは、田地がわるかつたため、貴君の耒耜の盡さなかつたためでは無かつた。實に祝すべきだといつて、序に自家の事に及び、私方の山の神も腹が大きく、十月に生れる筈だが、これは、熊が生れるか、蛇が出るか、其わからぬと云うてゐる。山陽は此の座子を小雲華と假稱して、第三信にも、御入洛の日はいつか、早く来て、小雲華に御對面なされと云ひ、第四信には、雙林寺の歸りがけに、お露と小雲華を見舞ひ、其の際の情景を、ありありと描いてゐる。即ち左の一簡がそれである。

小雲華見子成、駭笑、蓋知其爲父執也。...

只今双林寺歸に、久々小雲華を見舞不申候故、鳥渡立より申候、阿露は留守、小雲は裏の力御なじみ小座敷

にね、いと云事にて、参り寐顔を一着候内、大に啼て起被申候、見れば見るほど小雲華也、大に丈夫になり、下手な相撲ひにもなるべき狀貌の、きつと先途可憑事、御羨しく奉存候、私もあやかり申度候、來月也、先薄暮なれ共、圓信公に又々出合候故、作數字追啓如此、何分東錫奉持候、頓首

廿三日、...

此の一簡は、阿露の宅に認めたとあるから、一層の情味を覺える。雲華の法嗣圓信（大有）が其の頃上京してゐたのが、九州へ歸るに託し、既に一書を裁し、更に此の小簡を追啓として託したのである。乳兒が、山陽の近づいたので、目を覺して啼き出したが、其の山陽であることを知つて笑つたのは、父の友であることを知つての故だ、と例のお得意の漢文を弄してゐる。文は簡だが、情緒、紙幅に溢れ、眞に好尺牘である。案するに、雲華は庶子の生れたのを知りながら、數月上洛しなかつたと見える。法嗣圓信が上洛中は、豊後の寺を留守にしかねたであつたらしい。山陽の書中にも、法嗣と入り替りに上洛ありたしとあるを以て推すべき歟。又、書中、大有上人、諸母を訪はるとあるを以て見れば、お露は、雲華の家庭にも、公然と許されてゐた妾らしい。

尙、雲華宛三通の書簡中に、研に關してこまごまの記事もあつたが、爰に一々説くのは煩はしいから、それ等は、讀者の涉獵に任せる。

尙々、表具屋(高倉五嘉)案外高く取申候、箱は貳匁歟、よく拵へ且廉也、彼崎の潤筆私より取計置候、二分二朱位にてマルデヌミ可申候、御序にのぼせ可申候、表具屋書付、只今妻留守にて分り不申候、三十五匁とか申事に候、贈御漬し可被成候、四拾匁と云をねぎり申候、最初は二十匁にてあつらへくれと至つてザツト申候也○只今書付搜出候、三十五匁貳分にてよろしく候

扱も御無沙汰候と云も、巻出来候は其節と存候ての事、所が表具屋大隙入、出来候て直にと存候所、箱なれば、損可申と存候而、鼎に相談いたし候所、鼎申には、折角箱もさせての御頼と申候故、させ候所、是に又十日程も延引、大方貴錫東飛と行違にはなるまじやとも存候へ共、御約束にまかせ祝座へ差出申候

扱て是には骨折申候て、京の評判も一統よろしく候(箱出来の日、月峯展覧の日にて出申候)私も數日經營甚可惜覺申候、又々ケ様の事を書候精力もなく候、恩にさせる様なれ共、此は潤筆ニハキツト御きばり可被下、貴手にてあまり物不入、私方にて大調法と云もの考申候、長崎(二字不明)手筋にて、唐本の國朝詩別裁集少々板のよろしき分、アノ方にては壹分二朱山で二分か、二分迄は致まじ、(京阪にて三分と申ものなればアチラ一分か)板は至つてあしく可有之、大阪杯にある方はよろしかるべし、是を御申遣被下まじくや、唐宋詩醇と申上度候へ共、是は長崎にても三分計のものも存候故さし控申候

何分萬々拜類奉待候、文作此節上り一度逢申候、書狀御遣被下候よし、アレハ中々何にても行ケがたくと申居候、萬拜類と申納候、以上

三月廿七日

尙々、令圖様によろしく、阿露兩度ほど尋申候、其後逢不申候、貴錫東飛を待居候様子に候

其後は御疎濶、如何哉と奉存候、折節御國之僧被上候よしにて、五月朔之御書到来、龜座御安穩のよし、竹田は歸省、文兵衛參候義杯高興可有、春琴御心持のよし、是も備中は私添書にて大分當り候よしなれば、西三馬首候事はあるまじ、鐵餅之義可申候○長巻は三月末に大阪湊橋迄出候處、良山堂横鎗を入て暫借り、大阪南宗家日々良山堂へ見に參候よし、讃岐の梶原九郎左衛門と申老好事家別而譽申候事私へ不申越、内々尾之道の梶原婿に灰屋吉兵衛と申ものあり、此方へ申遣候を、吉兵衛より、狀の其所だけを切て差越候、陰の噂ゆへ眞實と存候、此度御慰に懸御目候、是にて大阪邊拙畫大評判になり候よし、是僉上人之御蔭と存候、大笑大笑、然し上人之潤筆もねだる氣は未だ、國朝詩別裁ノソキにて奉希候、先便申上候事

○研は此節漆乾き候時節故、必當月中には致すと申事、扱も、長き事○大有様御滞在、一度御來訪、枯魚濁醪上申候、其後未得面候、研は此上人に託可申候

○さて長巻より研より何より角より御寶物を被獲候事は、東山阿露分焼出ニ生一個小雲華、來候よし、(誠に酷似ノ由、雲華と相違無之と見候)是迄無りしは、皆田地あしきにて、雲華未茹不單にはあらざりしと見候、恭賀申度事に候、私方山神も腹大く、十月に生候筈也、未だ知爲熊爲蛇、山神へ毎々御傳語、忝がり申候、お露へ何ぞ遺度申候のみにて無音仕候、先日大有上人拜謁、諸母に被行候よし、先は右御理且致慶度如此御座候、頓首

六月十日

梅天より打續淫霖、鴨水壯漲可觀





る件についての細叙があるが、山陽家庭の部に關き難い資料である。山陽の母に寄せた多くの書簡の中で、頻々、阜さほの名を見るが、此の阜こそ、餘一の後妻で、此の女は寺川茂司馬といふ人の妹であることは分つてゐるが、その結婚の際の事などは、これまで知ることを得なかつた。此の一簡により、漸く少しわかつて來た。しかし、猶不明の事は、何人が媒妁して寺川家から貰ひ受けることになつたのか、その邊の事が、まだハッキリしない。全體、餘一は、文政三年正月二十一日、廣島藩の戸田勝馬の妹國を娶つた。これが先妻であるが、間もなく離縁となつた。そして後妻阜女を迎へたのは、文政五年八月八日であるから、其の中間、僅かに二年にも満たぬ。此の中間に、山陽が母の不自由を察し、餘一のため後妻を早く定める必要はあるが、破鏡を繰返す様事があつては、世間體もよろしくないから、自重せねばならぬ、と母に申送つた書簡は、本篇に收めて置いたが、斯く自重を説き居る内、早くも後妻が定まつたと見える。此の書信に據れば、縁女は、一たびは山陽に招かれ、出發の時は、暇乞に兩度まで山陽の居を訪うてゐる。寺川の家所在は不明だが、兩度まで往來した所を見ると、餘り隔絶してゐないと思はる。山陽は、縁女引見の時、特に先考の詩幅を床にかけて、形ばかりの酒宴を設け、頼家の家風などを説き聞かせたとある。初對面の直覺、縁女の風采やら性質やらに一語も及んでゐないのは、何となく物足らぬ心地がするけれども、山陽の所謂大まぜ返し（大混雜）の折柄、省筆したものであらうか。但し、再び嫁を貰ふに就ての注意は、母に對し、こま／＼と認めて

ゐる。乃ち、今度は二度目のことでもあり、質素の家風でもあるといふので、成るべく經費のかゝらぬ様にしたい。何よりも大切なことは、長久の工夫であると云ひ、餘一に對しては、これが妻を御する入門第一義だというて、親らしい教へを垂れてゐる。山陽自身も、おのが先妻に懲りてゐるから、此の教訓には無量の意味が籠つてゐるのである。尙、爰に本篇に書き漏したことで、追補を要するところのあるのは、山陽が、其の先妻を離別したのは上去といふものである、と嘗て近藤南洲から聞いた。當時、廣島藩の法で、藩命で妻を離別せしめる制度があつた。それが即ち上去で、良人が逐電した場合、或は、妻に不貞行爲があつて、良人が知らざるか、或は、知るも不問に附し置く場合などに、藩から離縁を命ずることがあつた。これは廣島藩ばかりでなく、他藩にもあつた様子だが、此の命があると、設令嫁を引きとめて置きたくとも叶はないのだ。山陽の先妻は、則ち、良人逐電のため、上去を食つたのである。

書添申候、芋は八月十五日の御供になど御たばひ被遊候はゞ、あしくなり可申、其内九月望の御間に合候様に、又々上可申候間、此分は着早々被召上可被下候、南大人へも御上可被下候、此書狀勿論大人へ懸御目被下度候

七夕前一日之御書到來、其節殘暑之御障も不被爲在、家内寐冷兩三日ほど宛之義にて事濟候段、無此上大慶仕候、其以前一書前後に相達し、其比は御風邪に被爲在候由、御執筆出來候へば、御當分之義と安心仕候、後之



年の御遊山のかはりに、是非思ひ立たれたい。兎角、御老齡に針仕事などは、お體の爲にならぬ。斯様な事は、早に申付けられたい。東三郎に乳母が出来たとあれば、早も手明の筈、と飽くまで母をいたはつてゐる。嵐山の遊びに就ては、昨年お供したことを思ひ出すのが苦しく、本年の花見は見合すつもりであつたが、星巖や細香がやつてきたり、門人共も勧めるので、亦参ることになつた。此の度は天氣もよく、花も三四分の處で、辨當の用意も昨年よりも行届き、「あはれ、昨年、此の位の花の時此の位の行厨あり候へば、よかつたのにと存出候」と、昨年、此の事を追懐し、一詩を録してゐる。尙、此の行、細香も加はつたので、急に妻も又二郎も伴ふことになり、又二も、幼弱ながら大方あるいたなどと報じてゐる。

尙々、金春(?)は大阪切にて歸、書狀のみ差越候、事ツカリ候とて大箱に大瓢入れ差越候、馬鹿らしきもの、セメテ古瓢なればよろしく候へども、新瓢にて酒も持まじく、口の處大切レニテ朱塗などはたまらぬ事、もらふて仕方なく、旅持とても不便に候、二升入ほどのもの貳つなれば、荷物に入候てもよろしく候、先日便に被申越候故、先とめ置候て此方より申遣候迄待くれと可申遣と存候内に参候、二十人前後の古き膳箱に入れ参、何物かと存候  
書狀差上可申と存居候所へ、當月六日用之御狀到來、其節之御様子承知仕、恭喜仕候、尤御病氣之氣味、とかく御よろしく不被爲在候よし、御困可被遊、併御酒食に御かはり不被爲在、御氣分に拘不申候は、先そむにてよきと被思召、御病氣を苦に被遊まじく、是即御療治と被存候、醫者の藥にて腹中をませかへしよわらせ候

は、無用之事に候

御長壽被遊候へば、それ位之事は有内にて、けつく御壽光と被存候  
御針仕事は御無用に可被遊候、乳母出來候て、東三郎肥候よし、御安心に候、左候は、早など仕事可致事に候如何、六十歳位より以往は、針などはつかはぬものと申候者御座候、御氣つまり候は、御痲痛にやはりサワリ可申候、それよりは、去年の四度の記御歌とも御整理可被遊や、私方賣物に相傳申候間、必々思召立、それを今年の遊山のかはりと可被遊や

○此間、泉川古酒五升差出申候、近々相違可申候、劍菱よりも差出候様申居候、(伏清へ向と申候)是ハ新酒、(泉川と申候)劍菱主人も此間上京、去年兩度の答禮と存、沙川など振舞申候

○此度、山鳥肉鹽漬一壺、被挂尊意、離有拜戴仕候、細香上京對話候處へ届、是も御馴染故、早速看に振舞可申と相樂候、是もよろしくと申事に候

○今年、去歲之事存出候てよろしからず候故、嵐山などへは不参積之處、詩禪も上り合、細香も参、彼是参州勢州邊門人ども、相勸候て、辨當は皆々持寄にて、生洲物ども持参、昨日参、花は三四分之處、天氣よく、細香参候故、梨影も同伴に俄かに参事に相成、又二もアルクナラ可連行と申候て参、大方あるき申候、あはれ、昨年此位の花の時、此位の行厨あり候へば、よかつたのにと存出候

侍興去歲已殘葩、搗酒今年半發花、誰識醉歌含暗恨、音容一別又天涯  
と獨言仕候

小倉野もらひ合候、新しく相見候故、今日早速差出候、不情に被召上可被下候、たばひて知らぬ客に御出し候

ては、非本意候、草々頓首  
三月廿四日

母上様  
餘一草同覽

山陽と四條派

山陽が、一時、四條派の畫を學び、美人を描いたことなどがあると、本篇、畫の部に録したが、山陽自ら、斯かる戲畫を作つたことを、告白してゐる手紙が、今度見當つた。それは、雙林寺長喜庵に寄せたものである。此の寺は、時々、書畫の展覽會場に充てられ、當時の文人墨客は、或は珍藏を陳したり、或は自作の書畫を持寄つて展覧したりした。其の關係から、山陽の書簡の内に、屢々此の寺の名が出てゐる。そして出陳の時には、手数料や席料として、百銅を納めるのが常例であつたことは、この手紙にも見えてゐる。この手紙に據ると、山陽はいつも立役をつとめて、得意の詩書や山水などを出すを例としたのだが、此の度は破格に、美人畫を出したらしく、「はじめて女形をやり申候」とある。そして尙々書に「大幅にはやすく」とあるに依つて察するに、大幅の美人繪を出したと見える。例のごとく芝居に擬ひて筆を遣り、「棧敷受如何可有之哉」と云ひ、「兎角座元の御引まはし

襄

を願上候」と云うて、談話を弄してゐる。僅々數行の短文ながら、彼が美人畫を作つたことの左券とすべき手紙であるから、珍とするに足る。但だ年紀の不明であるのは遺憾だが、「かの牡丹餅を相たのしみ申候」とあるに依つて察するに、山陽が、いまだ酒を解しなかつた、壯年期の書簡であることが、略々察せられる。彼が、四條派の畫を書いたのも、此の頃であらう。

口上

例の場ふさげもの差出申候、立役今度の藝にはじめて女形をやり申候、棧敷受如何可有之哉、兎角座元の御引まわしを願上候、日晡の比、又々拜候、かの牡丹餅を相たのしみ申候、以上

三月廿三日

尙々、百銅相添申候、大幅にはやすく候へども、御なじみ甲斐に御受納可被下候

雙林寺  
長喜庵様  
掛物一幅百銅添

二十三日五半過

尙又、山陽が、四條派の流を汲んだ因縁から、河村文鳳の帝都雅景一覽に、詩を題し、且つ序を作つたことは、本篇に録した通りで、其の序文は、山陽の平生に似ず、如何にも平凡であるので採らなかつたが、文鳳の歿後、其の子俊聲が、先人の遺稿を輯めて、山水畫稿と題し、文政七年出版したものに、亦、山陽の序がある。これは、前年のと大いに趣を異にし、其の四條派を論ずる頗る要を得、山陽ならではと思はれる所がある。先づ、四條派が、圓山應舉で一變し、更に吳春で再變したことを

説き、大抵、輕纖妍麗を主とし、一時、畫家は、争うて之に倣うたが、岸一派は、此の間に立つて、獨り粗豪の筆を以て對抗したと云ひ、文鳳に就ては、別に一族幟を樹て、岸派の粗豪に本づき、和するに圓吳の纖麗を以てし、構圖は皆自家獨立の營運に出で、一種蒼古勁鍊の風を成す。これ他家の無き所で、文鳳獨り造る所であると云うてゐる。そして、前年の帝都雅景一覽と此の山水の優劣を比し、前者は寫貌に掣肘され、大いに胸臆を傾寫しかねた氣味があるが、後者は開合に變化あり、情を恣にして筆隨ひ、能事を窮めてゐると評してゐるが、山陽でなければ、此の評が書けない。山陽は、畫に對して一隻眼を有してゐたは、言ふまでもないけれども、四條派に對し、斯くも適評を下し得るのは、畢竟、一たびは此の畑の薰陶を受けたことがあるからであらう。前の書簡と共に、此の序は、山陽の畫の源流を語るものである。

文鳳山水遺稿序

京師之畫一變於圓翁。而再變於吳叟。大抵主輕纖妍麗。一時匠手爭慕倣之。而岸子獨以粗豪之筆對壘不下。而文鳳山人踵起別樹一幟。本於岸氏之粗豪。而和以圓吳之纖麗。至其結圖構局。則出於自己之營運。洗刷流落無稍褻閑筆。以成一種蒼古勁鍊之風。是佗家所無。而山人之所獨造也。曩圖環郭諸勝。爲世所傳稱。然猶掣肘於寫貌。未能大傾寫胸臆。此卷乃爲其晚際絕筆。峰巒竹樹。開合變化。恣情縱筆。窮極能事。眞足發學者巧思也。前後皆因書肆文徵堂主人之囑。而此卷成。堂主已沒。其子繼志。謀上之梓。請予一言。予與山人及令嗣琦鳳相知。又徵堂主父子。故不辭而書。嗚呼嗚畫之人與受囑之人。皆吾存存目。俯仰陳迹。余焉得不授筆悵然哉。

文政辛巳小春十又九日山陽外史題

山陽印癖の追補

山陽が篆刻に通じ、往々、自作もやり、且つ篆刻趣味のあつた東寺の侍田邊玄々(憲)に懇意であつたことは、本篇に云うたが、玄々は、印刀を揮つて相當の作もあつた外に、巧みに瓷印を製した。其の自作の瓷印をあつめた玄々山人瓷印譜には、當時の名流十數家が序跋を作つてゐる。此の序跋の中には、多分、山陽のもあるであらうと思つたが、此の印譜は、家藏にありながら、震災後手元になく、出して檢することが出来なかつた。然るに、幸ひに一本を得て、閲するに、果して、山陽の序があつた。此の序は、山陽の小品文の妙を見るものであると共に、彼の篆刻趣味を語るものである。實は、玄々の瓷印譜に、澤山名家の序跋が載つてゐるが、皆平々凡々で、此の印譜の神髓に觸れてゐるものは、山陽の文の外には一篇もない。言ふまでもなく、此の印譜の中心は瓷印である。さて、殊に瓷印に就て言ふことは、甚だ難い。印に造詣のない人が言ひ難いは勿論だが、印に造詣のある人でも、瓷印に就て一説を立てることは難事である。流石に山陽の才は之を難しとせず、おもしろいことをいうてゐる。其の大意をいふと、瓷には、杯、椀の如きものもあるが、此等は俗士の口に觸れ、動もすれば、よくもない酒や茶をつがれるが、瓷が印となると、必ず雅客の珍玩となり、常に貴い朱に親し

み、鄭重に取扱はれる。同じ瓷でも、甚だ幸不幸がある。若し瓷にして靈あらば、其の印となつたことを、必ず欣ぶであらう。併し、印も、自分の如き俗文士に逢つては、どう思ふか。試みに瓷に問ふとあるは、印を知り、兼ねて瓷を知るもので無ければ、斯かる趣向の文は出来ぬ。玄々の瓷印譜は名家の序跋の多いので有名だが、他の序跋は皆刪り去るも差支へない。唯此の山陽の序は、どうしても去ることが出来ない程、よくはまつてゐる。序は斯くありたきものである。

## 玄々山人磁印譜序

秦漢印皆銅。銅不可速鑄。則用磁。磁亦不可速成。則用凍石乃木。唐宋元明是已。而銅不如瓷之滑澤也。石與木不如瓷之可拖文也。是伯表所以復用瓷爲印歟。然用諸杯碗。用諸印。於磁孰得意乎。杯碗雖俗父之口犬腹買之手不得擇也。而印必文人雅士。杯碗以受佳茗芳醴。固應得意。邊納茶甜酒。不得辭也。而印必染漬孔陽之朱。鈕製已雅馴。而文之篆篆漢字銀鈎鐵畫。而擬填於伯表手。通體文章。面裏爛然。使瓷有知。必欣然也。然印逢俗惡文士如余者。未知其意如何耳。姑書問伯表。併以問瓷。

文政戊子春二月廿又九日三十六峰外史頼襄題

## 補遺

拙著「隨筆頼山陽」を上板して後、年餘の間に、諸方から寄せられた書簡は少くない。知人からも来たが、多くは未知の人からである。中には、誤を正してくれられたものもあり、本篇に漏れた新材料を寄せられたものもある。又、珍藏の書畫を寫眞として贈られたり、序跋に擬した詩文を寄せられた向もあつて、數へ来れば百件にも及ぶであらう。尙都鄙の新聞や雑誌に批評を辱うした向も十數件あるが、中には數號を重ねて連載された長篇もある。後藤肅堂氏の「東洋文化」雑誌に於ける、三田村高魚氏の「日本及び日本人」に於けるがごときはである。此等の寄與により、著者が、誨を受けて啓發したことは少くない。私は茲に謹んで深く謝意を表す。版を重ねる毎に訂正増補を加へたいと思つたが、俗務に忙がしいので其の暇がなく、遂に五版を重ねた。今度、六版を出すに方り、版元から、是非、増補訂正を促されて、匆卒、稿を屬したが、さて、到底、全部を收めかねる。何分にも小冊子であるから、餘り多くの紙數を増しては體裁が崩れる。爲に、遺憾ながら、増補訂正の材料は、私信で寄せられた者の内から取り、公刊された新聞や雑誌により指摘された誤謬などは、他日本書を組み直し、體裁を一變する時に訂正することにした。

大正十五年四月

著者 識

## 山陽竹田對坐の圖に就て

大阪玉手町の藤本定男氏から、竹田の畫した、山紫水明處に山陽竹田對坐の圖と、山陽の愛玩品陳列の圖との寫眞を寄せられた。此の對坐の圖は、自分が久しく見んことを欲し、又、此の著の巻首に收めたいと思ひながら、終に果し得なかつたものである。普通、山陽傳の初めに載つてゐる肖像は、羽織袴で、本を机案に載せ、講釋をしてゐる圖であつて、門人大雅が畫したものである。寫眞だと云ふけれども、其の畫の出來た時、既に門人中に異論があつた。と云ふのは、病中の相貌を寫した爲に、頬もこけ、元氣も沮喪してゐて、如何にも貧弱に見える。門人等は、先生の、斯様な、衰へた様子を、後に貽すのは面白くない、と苦情をいうたとある。自分も同感で、その畫を拙著に取らなかつた。

竹田の畫が果して寫實であるかどうかは分りかねるが、何といつても、永い間深く交つた間柄であり、見馴れた友人が寫したものとすれば、必ず風貌は似せてあると思はねばならぬ。先づ此の圖と大雅の畫いたのと比較して見ると、彼は瘦せ衰へてゐるのに、これは肥え太つて頬も豊かである。山陽は酒客であつたから、壯健の時は酒太りして、脂肪澤山であつたとも思はれ、此の肥滿の態は、少くとも寫實であらねばならぬ。題識に依ると、此の圖は、竹田が、山陽の家に三日逗留した間に寫したとある。又、山陽の像を主として、わざと自分を後向にした竹田の氣轉も面白い。座敷の様子は、私が見て其の實境を見た書齋をつくりである。盆栽が置かれた欄下には、鴨河が流れてゐる。實際は

可なり遠い東山を、殆ど欄を壓せん許りに近く現した處に、竹田の筆の妙がある。一隅に題した詩も、風景を取り入れて興味を感ぜしめる。

殿角塔尖紫翠門。練光一帶鴨河灣。吾今來此寓三日。寫取十年夢裏山。

癸未榴月寫於頼氏寓居東山

田 畫 □

遺愛品陳列の圖に就て

前掲の圖と姉妹幅になつてゐる他の一幅は、山陽遺愛の文房陳列の圖である。それは、机案の上に筆硯、卷子、圖書、石などが飾られ、右側の高卓には香爐がおかれ、左側には火爐があり、少しく離れて煎茶器一式が排列されてゐる。此等の品々は、皆、山陽が、生前、人に向つて誇つた愛玩品であることは言ふまでもない。この幅は、山陽歿後、故人を偲んで、人の爲に書いたものであることが題識に依つて知られる。曰く、

此卷爲亡友頼山陽水西草堂圖。余作之後棄置不復記憶。頃在田仲兄田示素題。乃言二十八字曰。曾寫斯圖已幾春。蕭條門徑舊松筠。夕陽落盡前川暝。不見同呼家鴨人。題畢不覺愴然涕下。

竹田生再題 □

此の一幅の圖に就て想ひ起すことは、竹田の畫跋の中に、ある時、山陽の家に逗留してゐると、一



卜朝、蚤く山陽が起きて、自ら書齋を掃除し、愛玩の筆研や茶具などを陳列し、花を瓶に挿み香を焚きなとして、竹田に向つて、どうぞ君の一作を願ひたい、と毛氈を敷き絹を展べて、晝を請うたことが書いてある。前の一幅に山陽の家に寓する三日とあることから聯想すると、山陽が自ら洒掃までして斡旋した時の事などを竹田が追想して、此の圖を作つたのではあるまいか。山陽の生前と死後とを書いた此の二幅が、一箇所に集まつてゐるのも奇しき機縁と云ふべきである。詩中に「不見同呼家鴨人」とあるは、嘗て水西草堂に、鴨河を眺めて對酌の折、其の邊に遊んでゐる家鴨を兩人で呼んで、打ち興じたことを思ひ出で、結句としたのである。

枕を雲華に贈る

山陽が沙河の旗亭に飲み、詩を僧了教の笠に書したことは本篇に録したが、爰に、了教の爲に、山陽竝に雲華が書いた雙幅がある。その藏者は新潟の阿部儀作氏で、拙著を讀み、初めて了教の人となり分つたと喜び、其の藏幅の寫眞を寄せられた。それによりて了教が雲華の門弟であることが知れた。詩の題識に、明かに雲華の侍者とある。尙此の雙幅には、山陽雲華の贈答の詩が録してあるが、これによりて、圖らず山陽の逸事一件を得た。即ち雲華が巡錫するの祖道に、山陽から、旅行用の枕を贈つたことが此の幅で知れた。山陽の詩は枕に添へたもので、雲華の詩は次韻して謝意を表したも

のである。そして兩者の間に立つて斡旋したものが了教で、其の緣故から、了教の請ふに任せ、兩人が贈答の詩を書き與へた。其の事は、二詩の識語に依つて明かである。枕は紫檀製で、搦疊枕とあるから、屈伸自在で、用ゐる時は伸ばし、用が済めば疊んで、荷嵩にならぬ重寶なものであつたと見える。其の詩は左の如くである。

屈在懷中伴念珠。津梁疲時出相扶。囑伊記取南飛鶴。幾處寒燈夢我無。

雲華師南遊。余以搦疊枕贈之有此作。侍者了教。事師甚勤。故亦書此與之。未知其扶掖之力如何於枕也。

山陽外史裏□□

惠來檀枕潤如珠。到處安眠藉汝扶。思起故人連榻夕。耳邊聞水俗羣無。

山陽老兄贖余南遊以紫檀枕。復副小詩。次韻謝呈。書信往來。侍者了教周旋甚力。老兄憫而書其詩與之。

余亦錄似。老 含□□

雲華の詩中、山陽を故人と云うてゐる所から考へると、雲華の詩は、山陽歿後に書き與へたものと思はる。

腥史と精進

山陽が、樂翁公に「日本外史」を獻するに當り、公けに奉るの文を草し畢つた時、傍に細君がそれ

を見て、多年の苦辛こゝに漸く成就したのを、如何に歡喜の情に堪へざりけん。かねて熟交の雲華にそれを知らせてやり、祝酒を差上げたいから、来てもらひたいと申送つた。然るに、雲華は、生憎、大切な精進日に當つて、行きかねると断りを云うて來た。流石に肉食法師と云はれた雲華も、宗門上大切な精進日に當つてゐたのでは當然の遠慮であるが、頼家ではひどく失望したと見えて、山陽は一書を認めて、是非にと來訪を求め、書中こま／＼と外史成功の喜びを叙して居るは、さもこそと察せられる。其の「觀書は無精興、醒之別」と存候、修羅記録、お眼に觸るも殺生之意と被思召候と相見候」と皮肉を言ひ、宛名に「雲華肉食大師」とあるは更に皮肉である。此の書簡は、先頃、廣瀬淡窓翁の末裔、廣瀬寅太郎氏から示された。

今朝は拙荆より馳稚婢、外史落成、請來一觀と申候由、婦人了簡ニハ奇ニ候、如何様、仕立上、箱などニ入候へば、乍レ我二十餘年精神出現候様にて生氣御座候、上ニ樂翁ニ書を呈ニ卷端ニ候、是は自筆にて、十年以來稀作小楷候、是等私は却而心付ねども、山妻數々師之事申出、懸御目と申候也、所が今日は大切之精進日にて、御來臨無之よし、觀書ハ無精興之別と存候、修羅記録、お眼に觸るも殺生之意と被思召候と相見候、御尤也、明日沙川は妙ナラン、併文字之交、非飲食之友、願は今夕御來宿、明午後より出遊も妙歟、雖レ非レ不レ必甚不レ少、あなかしこ

梅月廿八日

弟子 襄

拜復

雲華肉食大師

祝座下

校書袖笑に書き與へた詩書

山陽が長崎に遊んだとき、出會を期した江芸閣(辛夷)が、丁度、歸國して、不在であつたので、ひどく失望し、其の狎妓袖笑を酒席に招き、悶々の情を洩したといふは、山陽傳中、隠れもない一節であるが、「山陽詩鈔」を見るに、唯「舉袖嫣然」云々の一詩を存するのみで、題も亦簡單、物足らぬ心地がする。嘗て何かで、長い引と三四の詩を録したのを見たことがあるが、失念して思ひ出しかねてゐると、もと支那の蘇州に領事を勤めた、白須益氏が、拙著を讀まれた因縁で訪ひ來られ、鑑定を請ふというて出して示されたものを見るに、それが袖笑に書き與へた詩の原書であつた。前に長い引があつて二詩を録し、別に又鄰星巖に贈るの詩二首を細書し、それにも引がある。前年見たのは、確かに此の寫しであつたに違ひないが、實物を見るはこれが始めである。此等の詩は、袖笑のため其の席上で書いたものらしく、引の中にも「酒間就其手帕代爲題詞」とある。成るほど、手帕といふは、風呂敷形の統本で、四邊に縫込んだ所を展ばした痕跡があつて、多少、煤氣を帯びてゐる。或は、三絃の撥でも包んだものではあるまいか。幅は約二尺七八寸、堅が二尺二三寸許のものである。

白須氏に就て其の來歴を尋ねると、長崎の某好事家が、珍藏してゐたのを、十數年前、江上瓊山氏を介して、やつと割愛を得たものと云はれた。氏は、蘇州に在勤の折、江辛夷の子孫のあることを聞き、わざ／＼それを訪問して、山陽と應酬の詩や書簡の類があらば見たいと努力したことを語られたが、それは不成功であつたさうだ。兎に角これは頗る奇品で、居ながら寓目を得たのは眞に幸ひである。乃ち、今回の改版に其の寫眞を卷首に收めることにした。其の全文は、

昔人云。思其人而不見。見其所與。則如其人焉。僕千里襄糧。本意欲一嘗長兄。結海外良緣。而爲造物所妬。天長海遠。此恨最極。開校書袖矣。會忝捧研之選。因聘致莊對。託此慰勸。渠近爲憶兄。搜損芳容。然僕自謂。憶兄不必讓渠。酒間就其手帕。代爲題詞。叙渠之情。即叙僕之情也。

眼穿鱗羽信沈沈。翠袖倚寒江閣深。三十六灣秋波綠。不如一寸憶君心。

舉袖嫣然掩袖啼。玉釵敲斷酒醒時。相思何干封姨事。阻卻郎船故故遲。

山陽外史 □ □

見袖笑所携繡巾。上有長兄及鄰君星巖題詩。又次其詞。自叙即日之事。且贈鄰君。爲佗日之笑資。

紅暈徐潮玉頰研。酒籌爲我拔花鈿。屋烏愛及君休恠。脂粉緣成翰墨緣。

不獨談天託古情。更看麗句筆端生。茫茫瀛海留鴻迹。一幅吳綾付愛卿。

山陽重題 □

### 外史の材料を寄與した人

京都の田邊朔郎博士より、數通の山陽書翰の寫を寄せられた。此の書簡の中には、拙著に逸す可からざるものもある。殊に、「日本外史」編纂中、山陽が材料の供給を依頼した手簡は、本篇外史の部へ添補を要する。全體、博士の家は、山陽とは舊縁が深かつた。博士の祖父田邊石庵翁は山陽の友人で、昌平黌の教授となり、又、甲府の微典館の學頭を勤めた。此の人、名は誨輔、字は季德、石庵と號し、又、不二石齋とも號した。通稱は新次郎。初めは村瀬と云ふ姓で、後に江戸に遊び、田邊次郎太夫に養はれ、田邊姓となつた。三宅雪嶺博士の岳父、田邊太一氏が、即ち此の人の次男である。山陽の書簡が多く此の家に藏せられてゐるのは、斯様な關係があるからだ。殊に、石庵翁は昌平黌にゐたから、多くの書籍を見る便利があつた爲に、山陽より、種々、材料を求めたものと思はる。石庵翁にはいろいろの著述がある中に、「續八大家文」もあつて、世に流布してゐる。山陽が此の書の序文を書いたのも、畢竟、翁と深交があつた機縁から生じたものであることは言ふまでもない。左の書簡は、即ちその間の消息を傳へてゐる。

其後逐日和暖。御旅況如何。嘯官暇不被爲有。日々西窓滿架之書掩。門而看之外無。御座。義と奉存候。御佳令被成御座奉慶候。其節被仰下候拙序文甚御急ぎ之由。全體開春第一筆に起草。彼雪朝御來訪之時。水亭酒間に

申上候通、其時已脱稿候へども、傾と看梅に奔忙にて因循至今日、其内に京阪諸友にも相談任、願御目候事  
稽緩仕候、具稿候而此度東方へ被遣被下候様相認候、一齊老兄へ乞政申度候、如祭酒公、則非所敢望候  
へども、萬一御一瞥、賜是正候は望外に候、其上にて淨書と存候へども、先日之如く、先々一本淨録相副  
差上候様御催迫に候故、別本板下之様子に相認候、此序命意狂悖、埒もなき事、御一笑可被成候、是は一番兄  
之書牘に而、去陳言批抗掃虛之手段と申より存付候、辯美勝に吐舌させ、使曰、泰有、人之趣向に御座候、  
實に諸公之言にて何も角も盡居候故、爲此雜胡樣議論候也、しかし其義は不謬於正と奉存候如何、一齊  
兄之文所謂經緯於不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>已、夫子自謂なるべし、前後結局老手段と相見候、然に林郎君之序得<sub>レ</sub>其體面、穩當  
而不<sub>レ</sub>流<sub>レ</sub>陳腐、眞大方之言と可<sub>レ</sub>申候、海外にも驚服可<sub>レ</sub>仕と奉<sub>レ</sub>存候、劉公亦自在之事ども、何分非<sub>レ</sub>小生輩之  
列<sub>レ</sub>贅辭、眞塞<sub>レ</sub>責候迄に御座候、餘其内期<sub>二</sub>面<sub>一</sub>警候

三月二日

季德雅契

裏頓首

次の二簡は「日本外史」に關するものである。

八月中實書延著候へども、其節御安否を奉<sub>レ</sub>審大慶仕候、續讀本拙序改刻の分御見せ、是にて可然候、劉様撰  
字神候事多御座候へども、不<sub>レ</sub>必物々候事と奉<sub>レ</sub>存候、記録もの御上せ被成がたく候段御尤奉<sub>レ</sub>存候、無致方候、  
武田上杉事跡は其後於<sub>二</sub>當地<sub>一</sub>好記録を得、大抵實録と相見候、川中島などの事も軍鑑とは大相違にて、是迄の  
拙著採用之處大直に相成、此節落成候、小田原北條の事、五代記之外當地に無之様被<sub>レ</sub>仰下候、盛衰記相尋候へ  
ども無之候、何卒板本に有之候ものに候は、吉次方へ直段脚費とも御書附御越被<sub>レ</sub>下度奉<sub>レ</sub>託候

外に急に承度候事は

肥後菊池、伊勢北畠

右兩家系圖大槩承知仕度候、續類從之内相見候、是は鳥渡御しらべ可被<sub>レ</sub>下奉<sub>レ</sub>類候、又

甲州武田系圖

是は鎌倉大草紙に信滿と申もの有之、其以前義光迄之世數、其以後信虎迄の代數を鳥渡承<sub>レ</sub>度奉<sub>レ</sub>存候

楠氏系圖

正儀降否之的説、其後正勝正元と申もの正儀の何に當候か、楠次郎と申ものは正勝とも別人とも申候、是は委  
敷相し居候事と奉<sub>レ</sub>存候、水府改正之傳之寫本にて御寫示被<sub>レ</sub>下候事は出来間敷候や

何分拙著一本整録奉<sub>レ</sub>寄、其御地にて刪正を願、謀<sub>レ</sub>久傳<sub>レ</sub>度ものとも奉<sub>レ</sub>存候、其外無<sub>レ</sub>一計<sub>レ</sub>様に御座候、猶追々  
類計畫申度、今日吉次來居、幸と走筆差急ぎ候事のみ、草々御推讀可被<sub>レ</sub>下候、頓首

十月十八日

不二石齋主人

座右

尙<sub>レ</sub>外史體裁の義も御親切に被<sub>レ</sub>仰下、是には大分御酌意も有之、差礙候事も多有之、何分全部御歴覽被<sub>レ</sub>下候へ  
ば相分り候事と奉<sub>レ</sub>存候、兩上杉細川とも足利傳中に悉之、東國伊達西の鳥津は諸傳中に散見、斯波は織田語中  
に有之候と申様の事に候、必竟使<sub>レ</sub>初學領<sub>レ</sub>治亂大要、非<sub>レ</sub>廣記備言之正史、されども戰闘事實などは委曲を盡し  
候、非<sub>レ</sub>史略之類候、水府皇朝史略は好書と被<sub>レ</sub>存候、出版候は、是又吉次へ早々御下<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下度、清朝の東華錄



ること、山陽飽くまで知りながら、自分より求めることが自衒の嫌ひありとして、どうか、あなたの取持で、先方から見でやらうと出るやうにしてもらへぬか、如何々々と、謎のやうなことをいうてみる。如何にも苦しい書き方であるが、そこに亦興味もある。

南遊卷

拙著上版の後、人より示された山陽の遺墨は一にして足らないが、文政乙酉の四月、雲華、小竹の二友を伴うて南遊の途次、雨に阻てられて泉南の舊門人岸琴泉を訪ひ、滯留、數日に及び、其の間互ひに筆を揮つて横披一卷に詩畫を録したものが賣品となつて都下に来り、居ながら寓目を得た。これが拙著上版後見た内では壓卷である。頗るの長巻で、巻首に小竹の「圖南息翼」の題字があり、賴潔氏の長文の識語もあつて、山陽が同行の小竹を揶揄した詩や、目前の風景を寫した畫など、皆共に珍とすべきである。卷中の賴潔氏の識語は、此の旅の大略を叙してゐるから、先づそれをこゝに收めて此の卷を紹介する。

山陽翁與雲華上人及小竹散人。所謂莫逆友也。文政乙酉之四月。誘此二友。拉愛弟栢植君續南遊。阻雨宿泉南岸松軒。軒主岸氏名恭。字子敬。號琴泉。爲翁舊門生也。此橫披則淹留中所作。各家詩句極精鍊。毫無虛構。叙其實情。殊到翁戲墨。絕妙動人。蓋寫眼前景致者。葛城金剛。山脈紆餘。高低起伏。遠近濃淡。變化無窮。

不可端倪。眞爲偉觀也。吁親友同遊。留其實況于翰墨吟咏。文苑快事也。雖寸楮零縑。後人展視。亦足以追想其風流文采。況於完璧此橫披乎。洵爲天地間奇寶也。

甲子臘尾賴潔拜識

卷の内容は、此の文に就て、略推し得るであらう。卷中、三人の應酬は、皆即景を詩にしたものであるが、左に二詩を収録する。

鞋襪無如風雨繁。驛亭枉路故人園。爛湯洗脚呼溫酒。簷樹棲禽未斂昏。

醉裏

途中、雨に遇うて故舊の家を訪ひ、草鞋を脱して足を洗ふ状やら、取敢ず温酒に親んだことなどが見える。

向麥將秋雲意閑。墨江南去路彎環。關心天氣陰晴際。適體人衣單袷間。繡囊携來相識客。河泉閱過未看山。批把蛤蜊多鮮脆。時釋腰瓢對解顏。

山陽外史

此の詩も、氣候や風景や同行等を叙して、飲食の事にも及び、皆記實で、賴潔氏の所謂虚構でない。此の一卷は、正しく、一部詐らざる紀行である。

卷中、最も興味を感じるのは、同行の小竹を揶揄つた長篇である。先づ其識語に、

乙酉五月南游誘承嗣。承嗣一前一卻。終夕而往。承嗣狀態多可笑者。戲作此紀之。

とある。小竹が同行を躊躇したのを、強ひて連れ出した。然る所、小竹、鬼角、歸宅の意動き、其の狀態、甚だ笑ふべきものがあるというてゐる。其の笑ふべき狀態といふは、詩に委曲を悉してゐるが、ザツトかうである。紀州に遊ばんとして小竹を誘うて見たが、行きたくもあり、行きたくもなしといふ調子で、例のごとく酒を出して、それで紛らさうとしたが、こちらは其の裏を掻き、別杯は有難いが、出てから頂戴したいと、強ひて誘ひ出し、住吉邊の旗亭で別宴が開かれた。小竹も、酔うては游意頻りに動く、山陽等は、其の圖を外さずと、相扶けて堺に赴き、そこに一泊した。さて小竹は酒が醒めて見ると、家の事が案じられる、此處を抜け出し、還るに若かずと、支度に掛つたが、時はもう朝方であつた。幸ひに、皆は、まだ舩をかいて寐てゐるので、そつと室を出で、戸外に踏み出したが、宿の老女に見尤められ、而も搔拂と誤認され、大聲で呼び立てられたから、忽ち包圍の中に陥り、奇計妙策も施すに由なく、たうとう南游を餘儀なくされた。是が「圖南終連羽」迄の處で、それから「北轅縱自遂」云々と、若し小竹の計策、圖に中り、其の心算通りになつたとしても、獨行の苦に耐へず、小兒が乳を欲しがる様に、やがては友戀しくなるに相違ないといひ、それから「同隊止」跋扈云々と、此の遊、小竹を同行させるに骨が折れたが、もう斯うなつては、四千の馬の力でも小竹の頭を回して北せしめる譯に行かぬ、況んや夫の百里俵の様に五枚の牝羊の皮で小竹を身請し、

うとしても、其れは徒だと云ひ、一轉して、友垣の睦みの愛す可く樂はしきは世寶以上だと結んで居る。小竹の狀態、笑ふべしといふのは、即ち右の通りである。全體、小竹は、商家に養子となつた人で、身體も肥満してゐたので、旅行は餘り好まず、家を明けることも欲しなかつたと見える。此の行、山陽が、計略でおびき出したのは大手柄である。左に其の長篇を掲げる。

南遊過拉君。欲出復首鼠。留吾呼別酒。吾望君出祖。墨水旗店好。文始侑綠醕。豪來意前卻。暗以指畫肚。乘其醉未醒。相掖赴界浦。且聯一宿枕。酒醒忽獨語。雖歡友侶牽。赤恐妻孥嚇。擬枕決歸計。被衣已五鼓。滿室方駒輪。匆匆行出戶。店婆恠其狀。大聲呼同侶。不知操風扇。認爲擔囊虜。檀公策雖上。至營計何補。團擁蹀而計。圖南終連羽。北轅縱自遂。獨行苦踴躍。無伴且無酒。如兒奪哺乳。團團懸汝餌。同隊止跋扈。擾狎騎神龍。羅網押猛虎。頭不回千騎。身豈贖五穀。誰知故人臂。一交勝圭組。

西省帖

山陽が其の門人關藤君達（藤陰）の爲に作つた詩畫一卷は、山陽が、天保元年六月、母の病を聴き、君達を伴うて廣島に歸省した、其の旅中の作を集めたもので、明治十七年複製して世上に出て居るが、流布が稀で、私の眼に觸れたのも、拙著を上版して後の事である。卷首に、小竹の「乃眷西顧」の題字があり、山陽の詩が五六首、畫が二枚、小竹の詩が一、杏坪の詩が最後に收めてある。卷

尾に、備後福山、田邊新七郎の跋がある。これに就て見るに、君達、山陽に扈從して郷里備後まで同行し、東移の日、此等の書畫を入れた行李を託した船が颶風に會うて覆没し、行李は海波の奪ふ所となつた。幸ひに、後日、南總の漁夫が釣獲して、君達の手に入つたのは奇縁であると書いてある。成程、巻首、小竹の題字は水に浸つて、「願」の字の外、亡びてしまひ、長三洲が三字を補書して、左の識語がある。

小竹先生所題四字。落水缺損。唯存末一字。關君成緒。請余補書之。亦不免疵嫌在前之謂耳。

長 茨

此の題字の「乃眷西顧」とあるは、關藤の歸省を斥したので、山陽の歸省と混じてはならぬ。山陽が此の巻を書いたのは、天保庚寅、即ちその五十一歳の時であるから、詩も書も畫も皆老熟の域に入つてゐて、頗る妙を覺えしめる。畫も目前の風景を興に乗じて寫したもので、如何にも面白い。此の行、小竹は、尼崎まで見送つてゐるが、其の詩の題識には、

舟送子成歸省。既三四度矣。子成五十一。余少一歲。未知一生舟送幾回耳。

六月九日書尼崎旗亭 彼崎 朔

と書いてゐる。小竹は、幾ど山陽の歸省毎に送つてゐる、こゝに一生の舟送幾回となるかを知らぬ、となほ將來を期してゐたが、山陽には其の翌年の歸省が最後のものとなつたので、小竹にはこれ

が最後の見送りとなつた。山陽は、此の舟送の實景を畫して、帆船林立の岸邊、蘆葦深き處に舟を畫き、舟中に人物を描いてゐる。即ち尼崎のスケッチで、船中の人物は、山陽、小竹、松陰、君達等であることは云ふ迄もない。山陽圖中の題識に云く、  
是日送者小竹豊肥大如牛。世張雖強亦頗相抗。獨余如鶴之絕飲喙。君達驅幹亦眇。欲各々肯之而不得。七樣擬  
才凍細也。  
銘々の體格を叙する處に妙がある。畫の及ばざる所を文を以て補ふのは山陽の慣手段だ。  
山陽、室津で舟を獻うて發するに先立ち、君達と共に明神磯に上るの詩あり。其の詩に左の識語を録す。簡潔、ただ妙を覺える。  
余題名于祠門口。庚寅六月十二日。頼襄關章同來。飲酒于虎豹虬龍之間。看夕陽飛帆久之。  
此の題詞、若し、尙祠門に存するあらば、蓋し一名物であらう。詩の次に一圖あり、即ち明神磯眺のスケッチである。

舟中、五劍山を望み、故柴栗山先生を懐ふの長篇は筆力殊に雄偉で、其の次、過三藤門の詩と最後の詩とは、水に浸つて、墨痕の散りたる痕跡がある。巻尾の杏坪の詩は、旅中に交渉のないものだ。此の巻の持主君達は、山陽に愛された門人で、山陽臨終の時、「日本政記」續成の遺命を受けた人である。此の巻は版本となつてゐるから、知つてゐる人もあらう。隨つて詩を割愛して、略することにし



た。

旅中に得た山陽と鴨尾の逸事

昨年の夏、秋田を経て郷里越後に入り、十日間の旅行を試みたが、拙著が機縁となり、到る處に山陽の書や鴨尾の詩を見ることを得て、頼氏の遺墨分布の廣いのに驚いた。先づ秋田縣の大館に入り、旅舎に投ずると、座敷に、無等道人と署した、草書の屏風が、置かれてあつた。友人に就て筆者を問ふと、此の地の淨應寺の住職で、能書を以て喧しい人だと云ふ。友人は語を續いで、頼三樹が、北海道の歸途、此の地に來り、身を寄せたのは此の寺であると云ふから、更に委曲を聴くと、格別、逸事は傳はつてゐないが、三樹が此の寺に無等和尚を訪うた時は、破れ袴を着け、見るかげもない褰れた身なりであつたので、和尚も、初めは、貧書生として遇したが、若いに似合はず、詩書も立派で達者であるので、漸く畏敬の念を生じ、それからは厚く遇して、三十餘日、寺に留めて置いたといふことが知れた。秋田市に入つて、亦一友人から三樹の消息を得た。三樹は大館から秋田に入り、藩の學館明德堂に寄宿し、且らく足を留めた。こゝでは藩儒西宮端齋と交り、滞在中、此の地の勝景、雄鹿半島を、或は遠望し或は舟游もした。其の際の詩は皆端齋に似したもので、今も秋田の人に記憶されてゐる。

三倉鼻望鹿島

鹿山粘水遠模糊。幾葉漁舟出柳蒲。一醉何妨少時睡。夢魂飛入洞庭湖。

自加茂到門前舟中作

鴨村村下借仙棹。硝壁奇青出海潮。崖樹陰冥老藥睡。洋風空澗大濤驕。

窟開蚊殿黑無底。石卷龍身天有橋。男子一搜雄鹿島。松洲始覺屬妖嬈。

此の三倉鼻の地は、雄鹿半島を馳眺するには、尤も便利な地となつてゐる。さて三樹は秋田を去り山形の新庄に入り、それから越後路へ入つたものである。越後へ入つては、海路を辿り、海府を経て直ちに新潟へ渡つたことは、家藏の三樹の詩幅の題識で知ることが出来る。

濤頭如馬蹴雙橈。鴨影依稀天水遙。一幅布帆風力足。連山卻走駛於潮。

海府歸舟一日廿有七里夕達新潟

鴨尾

尤も、新潟に行く前には、村松濱の豪家平野安之丞氏に寄宿したことは隠れもない事實で、別項、三樹が平野に寄せた書面に徴してもうなづかれる。但し、此の邊の奇景、笹川流の記を作つたのは新潟に入つてからであらうか。今次の旅行は、恰も三樹の足跡を踏んだやうなもので、それとなく三樹の足跡調べもした。新潟に入つても、偶然に一事を知り得た。それは、久しく遇はなかつた同甲の友

人吉田信吉氏と會した時、話次、三樹は新潟に来て、どこに宿したであらうと尋ねて見ると、それは私方であると云はれて「驚を喫し、遺墨でもあらば一覽したいと、直ちに伴はれて其の家を訪うた。此の家は鑛物を業とし、土屋を號とする舊家で、新潟には、しばし同祿の災があるけれども、此の家だけはいつも免れて、三樹を宿した時と少しも變つてゐない。三樹が書いた「積翠」の二字額も、如實に此の家の鬱翠たる庭の趣をあらはしてゐる。吉田氏は村松濱の平野家と親戚關係があるので、多分、平野の紹介でこゝに身を寄せたものであらう。

新潟の旗亭、行形屋に珍藏する新潟竹枝の大幅なども、恐らく此の家に寄宿中に書いたものではあるまいか。吉田家にも數多の書幅があつたといふが、今は散じて一も残つて居らぬ。唯數通の書簡と「精神一到何事不成」と書いた枝折のあるのを見た。書簡は、皆懇ろに滞在中の款待を謝してゐる。或は鳥清と云ふ酒樓で狂酔のことを言ひ、或は置き忘れた笠を送つてくれと頼んでゐるのもあつた。多分、新潟を去つてなほ越後路にあつた折の書簡であらう。京都の家に還つてから寄せた書簡も一通あつて、それには特に懇懇を悉してゐる。吉田家と自分は懇意な間柄であるのに、燈臺下暗しで、今まで此の家に三樹が宿したことを知らなかつた。按ずるに、三樹が江戸を發して漫遊の途に上つたのは、弘化三年二十二歳の時で、先づ筑波山に登り、水戸に赴き、海道を経て仙臺に抵り、松島、鹽竈に遊び、石巻、南部を経て、青森より函館に渡り、幌泉より石狩に出で、小樽より江差に着し、それ

から津輕を経て歸路に就いたので、京都へ歸つたのは嘉永二年十二月、即ち二十五歳の時である。翌年の正月、藤井竹外が三樹を年賀に訪うた時、三樹は例の沙河の旗亭に伴ひ、酒間、竹外に詠した詩は左の二首である。

捲簾嵐翠落杯扃。山水與人皆舊知。飄蕩孤斟異鄉酒。七年風月在天涯。

三十六峰依舊青。與君詩格闊嵒嶽。慙吾文字無奇氣。踏盡毛人萬里程。

詩中に七年天涯に在りとあるが、三樹は天保十四年十九歳の時江戸に遊學し、嘉永二年歸洛したから、其の間、丁度七年になる。頼家に於て三樹は最も長く羈旅の客となつた者で、春水や山陽の、足跡の到らなかつた所を、専ら跋渉した。安政五年の大獄にかゝり、江戸に拘送されたのは三十四歳の時で、翌年、斬に處せられたから、京都には、旅より戻つて九年ゐたことになる。

三樹の記事が意外に長くなつたが、此の旅次、山陽に觸れた始めは、やはり大館であつた。此の町の館助役から示された一面の研は、正しく山陽手澤のもので、蓋に「天機」の二字が刻されてあつた。落款は無いけれども、山陽の書であることは疑ふの餘地がなかつた。外に山陽の草稿があるといふことで、是非、見たいと思つたが、勿卒の際で、終に果さなかつたのは遺憾である。此の館氏の祖父は山本北山の門下で、天籟と號し、朝川善庵と同窓の關係があり、天籟の子は國歌を善くし、樺園と云うた。此の人が川田斐江博士と懇意で、研も草稿も、博士から譲り受けたのだと聞いた。秋田に

入つて、更に大なる山陽に觸れた。秋田の大夫で介川子明、綠堂と號した人があつた。此の人が、藩の命で大阪に祇役し、藩の米廩を宰した時、山陽と交り、互ひに往來して詩酒の間に徵逐した。此の大夫の家に傳へた山陽の書幅は、皆綠堂との交情を語るもので、長篇一幅、七絶三幅は皆見事なものであるが、介川氏の家道が衰へて、此等の幅は、友人奈良繁松氏の有となつてゐる。此の人の家は南秋田郡金足村にあつて、縣下屈指の豪家である。勿々の羈旅に此等の幅を二覽し得たのは洵に仕合せであつた。今先づ長篇を抄録する。

粉壁相映帶渺瀰。浪華港上排百邸。難價低昂國乃痛。擊罷買豎額有訛。唯因綜理失肯綮。每使人主空拊髀。聞君職司在根柢。分治内外如種蠶。政閑招士肉如坻。滿城文墨皆兄弟。醉閱簿書目不昧。官役如茶甘如齏。吾亦一見知慳悌。同舟終夜杯數洗。狂語不猜相觸抵。贈詩未必學時體。送君寧澁澁然涕。重臨要津猶可後。別後每飲伊丹釀。憶起是釀秋田米。

介川子明。將歸其藩。索送言。余亦西行發朝已迫。挑燈第二十韻寒責。詩雖硬率。語語肝膈。子明或有取焉。

此の送詩は、介川大夫の職司を説き、糶糶の經濟を語り、墨林の交情に及び、終に得意の酒に言及して、劍菱の原料は秋田より來ると云ひ、丹釀を飲む毎に君を憶ふと結ぶ。流石に才筆である。

鴨河月里水聲長。留客河亭小翠鶯。坐久鄰樓人語罷。一燈以外夜茫茫。詩用文語。易墮村俗。綠堂再過。有憶得當年夏添潤。不然明夕是中秋之句。雅俗迥別然。

綠堂胸無唐無宋。唯有文政丁亥七月十四日。余眼無長安無洛陽。唯有三樹村。是則同。

山陽外史裏

此の詩により、兩度まで綠堂が山陽の居を訪うたことがわかる。そして再訪は文政丁亥七月十四日であることも知れる。且つ題識は、例ながら妙を感じる。詩集や遺稿に其の詩が收まつてゐても、識語は多く略されてゐるが、識語は即時の情景を叙するもので一種の風味がある。原本を見るの快は此處にある。

瓜熟知君歸意忙。萍分奈我別愁長。叙勸綠鴨河邊月。他夜相望永異鄉。

七月十四夕綠堂共飲。用其七夕詩韻。起句小石玄瑞所唱也。

裏

此の詩も前詩と同時の作と見える。識語により、席に小石玄瑞もゐて、起句は即ち玄瑞の唱出したことを知り得た。

不厭匪年竣役意如何。謝轍征鞭過我家。向個東軒姑緩帶。階前桂樹恰開花。

己丑重陽前二日。介川子明東還途次。百忙中肯來過。賦此。此廿八字。寧足以爲謝哉。

裏

これで、介川大夫愈々歸藩せんとし、百忙中、途次、山陽の居に立寄つたことも知れ、兩人の交情

の深かつたことは、識語に就ても知られる。  
此の介川大夫に就て、思ひ出すことがある。村瀬栲亭は嘗て秋田に仕へ、浪華の米政を司つたことがある。栲亭何か不都合があつて其の職を罷められ、それがため栲亭は關西で不評判となり、一生、不遇に終つた。その栲亭の不都合といふは私曲があつたためか、どうかは委しく知れないが、兎角外に出で、事に當つてゐるものと、藩に在るものとの間には、往々、誤解が生じ、或は嫉妬などの爲に讒構に罹ることが頻々とあつたから、或は栲亭の罷められたのも此の類かも知れない。介川は、村瀬に代つて米政を司つたのであらうと思ふけれども、其の前後は、今十分取調べる追がない。

三樹が平野に寄せた書簡

別項、頼三樹、越後に入り、先づ、村松濱の豪家、平野安之丞に身を寄せたことを録したが、偶々雑誌の案頭に落ち来るを見ると、坪谷水哉氏の藏してゐる三樹の書簡が載つてゐた。これは、昨年の末、氏より自分に鑑定を請はれた書簡であつた。當時は匆卒で、宛名によくも氣をとめなかつたが、今見れば、三樹が京都に戻つてから、平野に寄せた書簡であつた。此の書簡で、平野との交が通り一遍でなく、百里の遠方へ、越後味噌の樽を送り、新潟花柳の遊興を語り、京洛に於ける自家の内秘を洩し、自作の俗歌までも報じてゐる。其の諧謔を弄する口吻は乃父そつくりで、人の願を解かし

めるの妙がある。書中、兄の支峰の事にも及んでゐるが、支峰は、私の郷里、水原に来て、數年學徒を教授した。自分の父も、亦其の門下である。今、左に、水哉氏の附した注釋を聊か取捨して、ここに掲げ、三樹越後入りの項を補ふことにした。

〇〇〇〇〇〇(冒頭數字闕)讀仕候、〇〇家様皆御安祥、欣并之至奉賀候、弊處無異消光罷在候、當年無<sub>二</sub>比類<sub>一</sub>大暑をこらへ、秋入の豊稔米價下落にて返報と樂居候處へ、先々月來以外之暴風雨、鴨水諸石橋皆々破壊、死傷及<sub>二</sub>百餘人<sub>一</sub>、五畿内諸國大荒、乗<sub>レ</sub>勝騰米價貴、貧生よわり申候、三伏之堪忍は皆水の泡と相成候、實地米穀は先大體之出來の由承及候、如何有之候哉、それに扱置、如<sub>レ</sub>例大尊味噌難<sub>レ</sub>有候、早々開蓋種々調羹、老設大悅無<sub>二</sub>此上<sub>一</sub>候、是にて來年迄は美味相喫し候、宜しく御禮申上候様申付候

先づ此處まで讀んで來ると、是は越後から遙々京都まで、味噌に添へて贈られた手紙に對する返事で、京都に於ける夏中の大暑や、秋の暴風雨から、延いて越後の米作に就て見舞を叙べ、次に味噌の禮に、母堂の悦び、來年まで賞味すると言はれた様子まで、珠をころがす様に次から次へと打べてゐるが、此の次は急に局面が轉ずる。

接又御老込にて信川西へ渡らじとの御事、それはく<sub>レ</sub>きてく<sub>レ</sub>御謹慎之事、其事實は美玉無<sub>二</sub>御座<sub>一</sub>故ノよし、夫レハ餘りの御ミかぎり、幾ら程御先愛妓が美と申、夫が御失ひにてガツカリと御氣落は、御悟道が早過ると存じ候、夫もあるけば棒にあたるとやら、御探索あれば又々妓王に勝る佛御前、御手に入まじとも申されず、

如何々と御勤め申候

先方主人が、近來、信濃川を渡つて新潟で遊ぶことを罷めたと報じたを見て、それでは悟道が早過ぎる、と慰めたり煽動したり、縦横自在に翻弄する用筆の妙は、山陽の筆致によく似てゐる。こゝへ、一寸、自分の事を入れて、

小生鴨東一件へ、先便申上候通りいかにもこちへ兼、二ノ足踏ミ、はまり申候、併兵糧乏絶勿々敗北、今節ハ圍城を堅守罷在候

流石に山陽の愛息だけある。更に次へ讀み續けると、愈と出で、愈と妙。

先便新詞二首入、御覽候如何、御氣にいり候哉

四海波、是は謡曲の證にさんせ、大事の處にきざがつく

ほれたよ、ナゼそうほれた、穴掘大工さんで氣がほれた

右風と存出候故費録致候、あらつばくで下作なる様に御座候ても、所謂江戸ノいきナドカ申候評判ナリ、穴掘人にならしたもうカ

斯かる戲言を述べるかと思ふと、筆は又轉じて先方の知友に及ぶ。

○佐藤父子及方舟(山)諸人起居如何、石崎は子供今以仕込不申候哉、蘭軒本間二兄如何、不ニ相替、御同

酌快語想像仕候、乍憚よろむて御傳言番上候

實に行き届いたものだ。水も漏さぬ挨拶振とは、かういふのを謂ふのであらう。尙又筆は、その頃

越後に居た兄支峰に就ての依頼に移る。

支峰三年留杖被ニ相頼、陣内罷在候、出入殿重にて窮屈成事と被存候、猶乍此上ニ御添心頼上候、今日もすでに同人方へ書狀差出候、序ながら一先先日御禮申上度、勿々如此御座候、御家中皆様へ宜御致慶奉願上候、老壹同様宜申上候

最後に、眞面目に結束して曰く、

いろ／＼存出申上度義あれども、又々期後便候、毎々亂筆々々、御推讀可被下候 頓首

九月 朔

三石 雅 宗 座右

更に尙々書がある。

尙々、氣候不順、折角御自愛專一奉ニ壽上候、兩貴姪詩稿朱批返上候、先々此順にて進歩ならば妙と奉存候、淡齋兄はもはや十六歳に御成被成候と存候、早きもの也、御互に其割老込申候、併心持ハやはりかわり不申、いつも廿載位の積り也、貴意如何

こゝで筆を止めて居る。多分、これは安政三年頃のものと思はれる。

酒ならば千里もいとひ申さず

山陽が、其の師茶山の片身に竹杖をもらひ受け、京都へ歸る途中、紛失して、大鹽中齋の世話でヤツト捜し出したことは本篇に收めたが、他にも杖に就ての軼事がある。やはり茶山から貰つた杖で、京都に歸る途中、姫路の大夫、河合漢年の壽山莊に立寄り、出發の際それを置忘れたのを、そのまゝ漢年に贈つたものである。此の杖の由來は、茶山の處に長逗留の折、茶山自身、園中の竹を斫り取つて興へたもので、「扶策」の二字を山陽自ら刻し、竹は布袋竹と唱へる多節のものである。此の頃、此の杖と共に漢年に寄せた山陽の書簡を合せて、賣却せんと都下に持來つたのを一見したが、其の書簡には杖の來歴があり、御戻しには及ばぬ、私の勞を扶けたものであり、師の懇志も籠つて居るから、私と同行の思召で長く用ひて下さい。酒ならば千里を厭はず頂戴に行くが、杖はまだ必要とする年齢でないなど、例の諧謔を弄してゐる。

西歸之時西宮より一書差出候、大阪に歸候而後崎ニ頓事傳申候、相違候哉、其後御清安被成候哉、目出度奉存候、先日は杖之事御申越し被成、御丁寧之至候、アノ杖は下拙不用ニ御座候、間ニ合候得ば、何なりとも御なし可被下候、未だ杖と申期には至り不申候へども、小生西遊之時、茶山先生の宅にて長逗留の砌、既ニ歸省ニ至り、茶山翁手づから園中の竹を切り、杖は長路の勞をたすけ候者として、下拙に給はり、旅中の徒然手づから彫刻いたし、トント忘置候を、其儘公ニ奉祝候也、血末には候得共、茶山翁の懇志有り、又小生之勞をたすけ候物ニ候得ば、何卒小生と同行之思召にて長く御用被下度、トント御返却には及不申候、酒ならば千里もいとひ不申候、一笑々々

十一月五日

河合子誠様

梧右

裏

雑事

(一) 耶馬溪訪問の経緯 本篇の耶馬溪の記事に就き、大分縣中津町、奈良本太郎氏より一簡を寄せられ、雲華の寺は正行寺であるのを、淨眞寺と書き誤つたことを指教され、なほ雲華が東道となつて耶馬溪を見せたとしたのは誤りで、雲華は、耶馬溪よりも、麻生の仙岩山の方が一層絶景であると、それへ案内したのを、山陽、これを見て喜ばず、やはり耶馬溪が優るとして羅漢寺に一宿し、翌日、本溪を溯つて遊覽したのであると、其の経緯を示された。淨眞寺を雲華の寺とした誤りは心付いて、既に改訂したが、耶馬溪訪問の経緯は初めて詳かにすることを得た。左に、奈賀氏の書簡を抄録する。

山陽が耶馬溪を通行せしは、豊後國日田郡隈町（現在日田町大字隈なり）に在りし廣瀬淡窓の成宜園（淡窓の塾の名）を訪ひ、夫より豊前國下毛郡永添村古城正行寺（現在鶴居村大字永添なり）に雲華上人を訪ひ、その途中山國谷を通行せしに、山容水態の奇絶に驚き、激賞措かざりしが、上人は更に山國谷よりも奇絶怪絶の所へ案内すべしと、宇佐郡麻生村上麻生の仙岩山に伴ひしが、山陽甚だ喜ばず、遂に上人を拉して、再び山國谷

に入り、羅漢寺に一宿して、翌日本溪を溯り、淨眞寺に宿して、其翌日古城なる正行寺に歸りしなり。

これに依れば、山陽は、廣瀬淡窓を訪ひ、更に雲華を古城の正行寺に訪はんとして、其の途中、山國谷を過ぎ、耶馬の勝景に接したのである。雲華の奇絶として伴うた處は山陽の氣に入らず、却つて雲華を拉して、再び耶馬の絶景を探賞したのであるとすると、山陽は寧ろ東道者である譯だ。兎角、其の附近に住する人で無ければ、コンナ経緯は分りかねることを、今更ながら感じた。

(二) 秦川は高梁川なり。本篇、備中玉島長尾村の小野氏の招月亭を見た記事の内に、秦川は畑川であると書いたのは、田邊碧堂君の談に據り、その川が田畑の用水路であるから、誇張は甚だしいけれども、畑川の俗を厭うて秦川としたのは無理もないと思つて、一評を加へたのであつたが、岡山縣第六高等學校教授木畑竹三郎氏からの懇書に據り、秦川は高梁川であることを知つた。高梁川は備中第一の大河で、淺口郡より海に入り、長尾村を貫き、小野氏の居宅を距る數町の近きにあつて、古くから秦川の雅稱があつて、山陽の創めて命じた名ではないと知れた。

蓋し、榛を、國音にてハシバミと云うてゐるので、ハシを取つて、高梁川を秦川としたのではあるまいか。備中には、秦川を號にしてゐる人がいくらもある。高梁川の上流、備中總社の人で、池上誼三と云ふ人は廣瀬淡窓の門人で、詩を善くし、地方の老儒であつたが、此の人も秦川と號した。又山陽が溯秦水七絶四首は岡山の某家に藏してあると云ひ、秦川は通り名となつてゐるといふ。

(三) 玉蘊女史の事。本篇に録した玉蘊女史の素姓につき、尾道の市立圖書館長澁谷榮造氏から左の事實を聞くことを得た。

玉蘊は尾道で相當の豪家の女で、姓を平田と云ひ、屋號を福岡屋と云うた。玉蘊の墓は尾道持光寺にある。正面に平田玉蘊之墓と刻し、三面には何も刻してない。宮原節庵が碑文を頼まれてゐて、うとう果さなかつたので、其の儘になつてゐる、云々。

(四) 秋吉雲庵の事。本篇、有栖川宮家に關する記事の内、醫雲庵の女が、宮家の後宮に女醫として仕へたことを書いた。これにつき、京都室町二條南入、秋吉豊次氏より一簡を寄せられ、雲庵の女須和が岩崎鷗雨に嫁したことは事實であるが、女醫として宮家に仕へた事は無いと申越された。有栖川宮家へ醫として出入したのは其の父秋吉雲庵で、其の略歴を左の如く示された。

秋吉雲庵、元雲桂と稱し、天明六年、豊後國遠見郡八阪の庄に生れ、弱冠京都に來り、醫業を開く。文政九年、有栖川宮侍醫を拜す。天保十年六月法橋に叙せられ、同十二年三月、法眼に推叙せらる。山陽、小竹、後素(大鹽)等と、最も親交あり。

これに由つて見ると、山陽が、有栖川宮家に出入して、御息女にお手本を差上げる様になつた機縁は、須和の橋渡しではなく、寧ろ其の父雲庵の推舉と見る方が妥當である。秋吉豊次氏は、雲庵の玄孫に當る人だ。

(五) 尋常詩人と伍するは御免 家藏の「文政十七家絶句」に多く朱批が加へてある。何人の評か知り難いが、書體は山陽に似て拙でない。山陽の詩に就ては殊に會心の評が多い。卷中山陽の雜詩を一も收めず、論史と論詩の作のみを特に取つたのに就て、左の如く云うてゐるのは全く同感である。

余聞。頼翁不欲與區々詩人爲伍。選此書者乞翁詩。翁不與尋常風雲月露之什。而與此豪宕怪奇之詩。蓋其意不欲列於此書中詩人也。

評者は山陽の知己と謂ふべし。論詩最後の句に云く、「欲掣鯨魚無氣力、半生徒被喚詩人」と、山陽の志、以て見る可しである。

頼山陽朱批の江馬細香詩集

私は嘗て江馬細香女史の「湘夢遺稿」を読み、山陽と女史の間に只ならぬ情緒あるを感じ、「隨筆頼山陽」に、兩者は單に子弟の關係あるのみでないと説いた。これに對し或は女史の爲に辯疏する人もあつたが、私は服しなかつた。近頃山陽朱批の細香の詩集が出版されたので、それを讀んで見ると、一層自分の説を肯定するものがあるやうに覺える。

「三月念三遊嵐山有憶舊遊」の詩の「即今髮上無多綠、却憶溪亭閑夢時」の結句に、山陽朱批して「閑夢二字恐來外人之疑」とあるが如き、暗に祕事を語るものではあるまいか。山陽と琵琶湖

上に別るゝ時の詩の結句を、原作では「別恨極時幾度誦、途上賦詩送別篇」とあるを、山陽朱批して「結末雖是實事、微覺不振、以其無清語二語、當言廿年來相逢相別、未有如此別之難別之意」とあつて、細香は「二十年中七度別、未有如此別恨纏」と改めたのは、山陽の示教に基いたもので、離情を一層切にしたのは詩家の手段であるけれども、亦實情を寓するものと思はない譯にゆかぬ。此の詩は細香の集中傑作の一で、風味は最も末の二句に在る。そして、それが山陽の改竄に係ることを知るは朱批の草稿の賜と云ふべきである。山陽、朱批を了つて一稿の餘白に朱書して曰く、七月廿二日批了、方池荷花淡、紅色者開三朵矣、丹酒送兩尊到矣、恨不同飲此酒、同看此花也、山陽外史とあり。此の種の文、山陽の常套に屬するけれども、此の場合には眞情の流露が見える。細香が、詩稿の餘白に和歌を録し、それに山陽の唱和したものがあつたが、これなどは兩者の間柄の尤もお安くないことを想像せしめる。

わかれてもまたあふみ路をかくる身は

あは津てふ地をよけてこそ行

御わらひ遊し可被下候

朱書

わかれてももぢにみたぬもくきね

みのあるかぎりあはんとぞおもふ

襄



細香の詩、山陽の加筆を得て玉成するもの少からず、然れども、全く雌黃を加へず、好評を與へたものもあり、恨らくは茶山翁に見せざりしことをなど評した詩も二首ある。兎角うぶな草稿を見ざれば、其の人の眞の技能は分りかねる。私は山陽朱批の此の稿を讀んで甚だ興を覺えた。此の詩稿の原本は頭陀囊に入れてあつて、其の表には、山陽の筆で細香詩囊の四字があるさうだ。細香が美濃から京都に遊ぶ時には必ず携へたものと見える。

此の朱批詩稿に木崎好尙氏のものされた附録が添へてある。好尙氏は山陽の日譜まで作つた山陽通であることは言ふまでもない。氏は附録に於て山陽と細香との往來を詳かに考證されてゐるが、それに據ると、兩詩人の情事の一層明かにするものがある。細香初度の入京は文化十一年、山陽三十五歳、細香二十八歳、梨影（山陽妻）十八歳の時である。細香は知るや知らずや、此の年は梨影が山陽に奥入した歳で、細香が山陽の家に招かれたのは、新婦と家庭を形作つて間もない頃であつた。その折は新婦の義親小石元瑞を觀櫻にと家に招いた處へ、細香も招かれたのであるから、情熱を藏する女詩人としては内心つらかつたであらう。その折につき好尙氏は左の如く録してゐる。

細香は喜んで當日出掛けて來た。こゝに吾々は一場の劇的光景を想像せざるを得ない。それは新婦梨影と細香女史との初對面の一齣である。細香は、昨冬恩師山陽との初對面には、必然に、事實として山陽の獨身生活といふことを聞かされてはゐなかつたか。聞かされないまでもそれを承知してはゐなかつたか。然るに事は意外

であつた。歴とした若妻が席上を周旋するのである。一方梨影の身としても、主人の門人に、このやうな御婦人があらうことを承知してゐたとして、さて直接に顔合せた時の感じは何うであつたか。この兩人の立女形を舞臺一ばいに働かすことは、第一流の劇作家にあらぬ限り、先づ手を控へるの外はあるまい。細香の詩に、

雨歇春園滴未乾、翠爐烟冷夜香殘、暫雲凝、月花猶暗、情燭蒼頭自在看  
 ばんぼりをさしのべて、庭の夜さくらを見せたのが、梨影その人であつたとしたら、その場面はいよゝゝ冴ゆることになる。

新婦の假親夫婦を招いた席に細香を新婦に紹介するなど山陽も罪作りである。山陽もそれが氣になつたか、招く書狀の内には、「御氣づまりに候はゞ、先きく御歸被成候敷、又登々庵方へ御出候ても可然候」とある。細香は新婦より十歳長ずる先輩で、容姿も優れ技能もある。かゝる席とて辟易する筈はなく、暗に妹あしらひをしたであらう。細香は當時の新しい女である。いつも山陽其の他同人の間に伍すると細香は山陽の細君氣取りでゐたとの説もある位で、内實眞妻を以て任じてゐたのかも知れない。

細香の二度目の上京は文化十四年、山陽三十八歳、細香三十一歳である。四年間頻々たる書簡の往復はあつても會見を絶つてゐたのである。文化十二年の山陽の年賀狀には、

去々冬（十年）去春（十一年）の合離共存田、闇然銷魂候……多病羸弱、伐性之事は謝絶仕候、唯閑談之伴侶

無之を歎候也

と、ひたすら細香に對して、異性の好伴侶たるべく相思の情を寄せてゐる。

好尙氏は右のごとく淡々と録してゐるが、伐性謝絶に言及しないのは何故であらうか。前に伐性の事が無ければ特に言ふに及ばないやうに思ふが、どんなものであらうか。嵐山同宿の際の閑夢の句を、山陽は、他人をして見せしめば、或は疑を發せんと云うたのを、細香は氣にかけてか、「湘夢遺稿」にはあの詩が收めてないと云ふ。今手許に此の書がないから調べるに由ないが、好尙氏の云ふ所は如斯である。かゝる佳詩を割愛した處に何かあるのではあるまいかと、却つて人に疑惑を起させる。

文政七年五度目の上京には山陽四十五歳、細香三十八歳。此の秋には山陽の母も入洛してゐた。伊豫の素封家木村力山に招かれ、山陽母子、梨影、細香は砂河に游んだ。其の際に山陽と細香は相傘で賀茂の長堤を歩いたなどはお安くない。其の時の細香の詩は、

好在東郊賣酒亭、秋殘疎雨撲簾旌、市燈未點長堤暗、同傘歸來此際情

夕まぐれのしぐれ空に、賀茂の堤を、提灯の火影で相々傘の道行は、とかく後人の邪推を招きやすいが、母と妻との同行してゐることを思ひ合はさねばならぬ。

と好尙氏は附記してゐる。

前に詩稿を見て録した山陽細香唱和の國風は、天保元年、山陽五十一歳、細香四十四歳之作であることが好尙氏の考證で知らるゝ。氏は此の唱和に左の如く附記してゐる。

この戀歌二首は漢詩人の作として、たゞにめづらしきばかりでなく、師弟相愛の至情として、無限の趣味を加ふるものである。併し、かの鄙陋邪推の俗眼者流にして、さらぬだに兩者の詩魂に一點の汚濁を投ずるあらば、それは藝術の園に逍遙することを許されざる、おぞのしれものといふ外はあるまい。

と云うてゐるが、何と粉飾しても戀は即ち戀である。「湘夢遺稿」全部が、實は戀史と見るべきものだ。師弟の兩性に切なる戀があつたとして、藝術に累するでも無からう。實は肉體を超越した戀愛ほど切なるものは無く、亦永續するものは無い。山陽が老境に入つても脊々の情懷を往復毎に漏してゐるのも、四十四歳の老婆が戀歌を詠んでゐるのも、まゝならぬ戀にあこがれて、其の情を一層切にするからの事だ。

細香は七回まで上京してゐる。美濃は近いと云うても昔は可なりの旅であつた。一生外へ嫁せないオールド・ミスは江馬家にあつてもなくてもよかつたであらうに、それが京都に移らなかつたのも寧ろ妙に思へる。山陽が細香に興へた書牘の内に、「何卒年のよらぬ内に、御上京之計御決被成度候」とあり、又一通には「春（文政三年）は何卒御一遊奉待候、如仰歲月如流、青春幾何、早自爲計を勝と奉存候」とあるを以て見れば、細香に京住居の意ありしがごとなれども、終に果さなかつた仔細は

知り難い。

細香入京の場合は、多く平等寺といふに宿した。どんな因縁があつたのか、この寺に雲華や山陽も訪ねてゐる。随分不景氣な寺院と見え、山陽は其の荒涼の状を叙し、狐に魅せられんと云うてゐる。細香の平等寺僑居の詩に「人過盛年情緒灰」と、あるが、文政七年三十八歳の時の作と思へば餘りアテにならぬ。山陽が「信能如此、可嘉可敬」と云うてゐるのも何となく皮肉の感じがする。細香女史の貞操に就ては紛々の論がある。女史が設令一時たりとも師と肉體的關係ありと云ふに對し、女史の爲め清操を辯護するものは、曰く、斯かる虚構の説を爲すものは、強ひて小説となさんとするのだと云ふ。知らず、相思うて清操を保持することは悲愴の極で、尤も小説的であることを。然らば清操を強ひて肯定するものこそ、却つて好事家の業ではあるまいか。

世の細香の詩を讀む者、多く刻本「湘夢遺稿」に據り、山陽の評語も亦同じくこれに據る。而るに公刊の集に評語を取捨するのは恒例で、著者若くは遺族の刊行に係る者には特にこれがある。刻本の山陽の評語に往々隔靴の感ある者あり、或は評語あるべくして缺くが如き此の故であらう。朱批詩稿を見て吾は殊に此の感を深うする。原稿の重んずべきは是に由つても分る。

細香の詩の佳なる所以は、恐らく眞情を吐露して僞らざる處にあらう。漢詩人の病は文飾に在つて、虚偽に墮せざるものは少い。師の山陽と雖も、全くこれを免るゝ事が出来ぬ。細香の遺稿を取つ

て、後世之を議するものあるは、其の眞事を告白してゐるからだ、實は細香の詩の取るべきは、こゝに在るのである。

細香は以て、貞淑清婉、紫式部に比するものがあるけれども、恐らく當らない。彼女が酒を好んで、家に在つても同伴なきに困しみ、其の妹の他に嫁したのが歸り來れるを、酒の同伴を得たと喜んだことが「湘夢遺稿」に見えてゐる。彼女は京都文人と角逐してビクともせず、同人の席にあつても臆面なく山陽の家内を以て任じたといふが恐らく事實であらう。彼女の多くの詩は戀愛に關するが故に、一概に女性的と見えるけれども、往々丈夫的の詩がある。晩年國事に慨し、女丈夫と云はれたと云ふも、山陽の感化を受けた女流として、又當時の事情、校書の輩と雖も往々氣節ありしに考へ、國事を憂へたりとて不思議はないが、細香の素質は、柔婉、紫式部の如くでなかつたと思はるゝ。此の點は山陽の室梨影などとは素より同日の談でない。星巖の室紅蘭なども、往々溫良の婦人と考へらるるが、事實、人の想像するとは異なつてゐる。兎角今の考を以て當時の讀書婦人を判するのは正鵠を得ない。細香は山陽を惹きつけるだけの勝氣な婦人であつたやうに思はるゝ。

賴山陽は何故に人氣があるか

——附 山陽の逸事數則——

東西古今の文豪で、長く名聲の傳はるものと否らざるものがある。必ずしも其の技能の優劣に依るものではない。不朽の大文章を残した人でも忘れられて仕舞ふものもある。一部の手に持て囃されても一般に及ばないものもある。一時持て囃されても久しく續かないものもある。賀茂眞淵は國學の泰斗であるが社會一般が持て囃すほどポピュラーでない。青木昆陽は偉い學者である。其の燒芋屋に尊崇され、豐碑の建設された譯は、その學問の爲でなく、甘藷移植の恩人としてである。新井白石などの偉い學者でも、俗流はこれを崇敬することを知らぬ。文豪にも頗る幸不幸がある。

世間で蔭日向なく崇敬を博してゐるものは、往々人格が神化する。菅公は文學の祖と云はれ、神としてウオルシツプされてゐる。空海は大天才で永く崇敬の的となつてゐるが、これも亦宗教的である。此等の人の名聲あるは、強ち人氣があるからと云ふ譯ではない。長く國民の人氣を保つものはその言行技能に原因するけれども、單にそればかりに依るとは思はれない。人氣を博するといふには複雑な原因があらねばならぬ。あらゆる美德と才能を備へてゐても、その人が必ず人氣を博するとは言ひかねる。時代の精神に觸れ大衆の氣分に投ずるの素質が無ければ、人氣は博し得られないものである。

頼山陽が何故人氣があるかといふことを書くに就ては、以上の如き前置が入用だ。山陽といふ人を赤裸々に云へば、實は疵だらけの人である。青年時代は脱藩をした。放蕩をやつて父母を困らせた。

勘當の身となり廢嫡された。學問はどうかと云ふと、當時漢學を貫んだ時代には經學の造詣の深淺が即ち學問の尺度であつた。然るに、山陽は幾ど經學を修めなかつた。山陽は史家を任じたけれども、今日から見ると、其の史學はお話にならない程の粗笨のものであつた。その最も長所であつた文や詩や書などにしても、當時山陽よりも長じたものがあつたのである。畫などになると、全くの素人畫であることは言ふを待たぬ。そして當時中央の最高學府たる昌平齋に教授の席も占めず、京洛にかゝんでゐて、割合に早世した此の人が死後人氣を大いに集めて、年を経るに従ひ、ますます其の名聲の揚るのは何故であらうか。

山陽の著述が冷熱なく歡迎を受け、「日本外史」の如きは無際限に版を重ね、版式も種々あり、譯書もあれば註釋書もあり、三四の外國語にも譯されてゐる。漢文の廢り行く世の中に斯くも普行するとは、山陽の人氣を見るの一徴であらねばならぬ。およそ山陽に關する著書の明治以來出版されたものだけでも幾十を數へるであらうが、それが多く賣行のよいのも山陽の人氣が然らしめるものである。山陽の書畫の廣く珍重されるは今日始まつたことではないが、年を経るに従つてますます價を高め、今は空前の價をあらはしてゐる。斷簡零墨と雖も山陽の筆に成るとし云へばそれが珍重されて、破格の價を以て賣買される。大體故人の墨蹟はその居住地に存し親戚故舊の手に傳はるのが通例であるのに、山陽のは全國に分布してゐて、緣故の有無に關係が無い。そして山陽の書畫は高い階級にも

低い階級にも喜ばれ、政治家にも商人にも老人にも壯者にも歡ばれてゐる。他の先哲の遺墨の愛重されてゐるものは勿論多いけれども、山陽の遺墨の喜ばるゝのは些しく違つた趣がある。空海や眞淵などの墨蹟になると、愛すると云ふよりも寧ろ敬する方で、所藏者の氣分が違ふのである。床に幅を掲げての氣分にしても、空海眞淵のになると頭も自然下るが、山陽のはそれとは違つて親しむ氣分が起る。畫などは、其の性質上誰の作でも愛玩的氣分が起るものであるが、山陽のは、その書でも畫に對すると同じ氣分が起るのは、大衆の趣味に適つてゐるからであらう。山陽の人氣のある有様は現實人の目前に在ることであるから、これより以上絮説を要せぬと思ふ。

山陽の人氣のある事實は以上の如くである。さてその原因に就て人は多く言ふ、山陽は幕府の末造に革新氣分の漸く萌した時、「日本外史」を著して勤王の大義を鼓吹し、志士を鼓舞するに大いに力があつたから、人氣を一身に集めたのであると。如何にも其の通りである。なほ山陽の子に三樹三郎があつて、勤王の爲に身を犠牲にしたことも閑却してはならぬ。三樹の遺骸を埋葬するに方り、其の片腕を奪ひ去つた幕臣があつた。その人が三樹の片腕を神棚に安置し毎朝禮拜したと云ふが、此の逸事は如何に幕末に山陽崇拜熱の高かつたかを語るもので、幕臣ですら斯くの如くであるから、肉躍り血湧く當時の志士が、山陽の文や詩に激勵されたことは想像に餘りある。併し、これだけの事で山陽の人氣がいつまでも持續するとは思へない。勤王論は今日山陽の講釋を待たず、誰も心得てゐる。

なほ又勤王論を熱烈に主張したものは決して山陽ばかりではない。然るにそれらは皆閑却されて、ひとりの山陽のみが名聲を持續するのみか、まづその名聲の騰る所以は、他に複雑の原因があらぬはなれぬ。

愚按では、山陽の作品には民衆に喜ばるべき素質がある。言ひ換へれば、山陽は國民的文藝家であるが故に、廣く長く一般から渴仰されるのであると思ふ。「日本外史」が今日尙讀書子の愛する所となつて居る所以も、やはりその歴史が國民の嗜好に投ずるやうに書かれて居るからである。山陽は外史を著すに就て、一種の新しい文體を工夫した。それが丁度國民の嗜好に適する文體であつたのだ。それより以前の歴史家は、日本の歴史を書くに當つても、無暗に支那の文章を模倣した結果として、その書かれた歴史は、恰も「左傳」でも讀むかの如く、日本の面目が一向發揮せず、さながら我が歴史を支那人を備うて書かせた様な風があつたが、山陽はこれを排して一生面を開いた。だからどの頁を、讀んで見ても、日本の面目が躍如としてゐる。全體支那崇拜の盛んであつた當時、新體の文を臆面もなく縦横に遣つたのは、大膽なる業で冒險の行爲とも見るべきものであるが、山陽はその冒險を敢てして成功したのである。勿論新體の文にはいつも非難が伴ふもので、「日本外史」の初めて出た時には、其の文章に就て、漢學者は彼是云うたものである。丁度、昔漢の時代に、司馬遷が「史記」を書いた時に、其の文章に就ても、歴史の編制に就ても、非難があつたと同様である。支那では久しい

間歴史と倫理を混同して風教に害ある事を歴史に書く可からずとした。司馬温公の「資治通鑑」などが其の一例である。班固の「漢書」なども、やはり資治通鑑風のものである。司馬遷の「史記」に至つては、歴史は歴史であると云ふ見解から刺客の傳まで收めてゐる。そして文章もすべて寫實であつて、刺客を傳するにも刺客其の人の性格に依つて書き振りを異にし、其の人を躍如たらしめてゐる。其の歴史の編制は丁度今日の西洋のその如くで、倫理道德とは全く離れたものとなつてゐる。此の新體の歴史は當時の史家を驚かし、刺客や盜賊の事蹟を書くなどは以ての外だ、と班固の如きも非難したけれども、後世になつて見れば、此の司馬遷のやり口が、歴史の本體を得てをると稱讚され、それが不朽の書となつた。山陽の新體の文も、司馬遷に私淑したと云はれてゐるが、それが新體であるだけにやはりいろいろ非難もあつたが、終には「史記」同様に不朽の歴史となり、萬戸必備のものとなつた。

漢學隆盛時代には、文章は漢魏六朝の古文に模倣し、歴史を書くにも飽くまで古體の文に據り、山陽同時代の龜井昭陽などは「書經」の文に倣つて歴史を書いた。それに對し山陽は、そんな無駄の骨を折つても、恐らく世間には流布しまいと云うたが、果して其の通りであつた。右の如き次第であつたから、山陽の「日本外史」に對しいろいろの文章家が筆を加へたものもある。聖堂などでは悪文の標本として、或る部分を抄出して學徒に直させ、文章の研究に資したこともある。又史實も頗る誤つ

てゐるといふて、川田蕪江の如きはその誤謬を指摘して全然書直さんと企て、いくばく筆を進めたこともある。實を云へば、「日本外史」は、歴史と見るよりも一篇の詩と見る方がよいかも知れない。考證本位の歴史と見る可からざるは言ふまでもない。併し、史實は正確でないにしても、描寫は如何にも妙を得てをる。英國の史家マコーレーは、グラフィックの書き方をして世界の稱讚を博したが、山陽の書き振りが亦グラフィックで、英雄の行動でも戦争の記事でも、さながら繪を見る如き生彩があり、讀者に興味をそゝるのは、主として寫實の文の然らしめる所と云ふべきであらう。

山陽の新體の史筆は國民の嗜好に適したものであつた。それが國民全般の歡迎を受けたのは決して偶然でない。これを繪畫に譬へると、古文家の文章は土佐や狩野の畫のやうなもので、少數の貴族に喜ばれたにしても、國民一般の喜んだものは、寧ろ浮世繪であつた。浮世繪は久しく市井の俗畫として、高い階段に排斥を受けなければ、實生活を如實に描寫したものは浮世繪である。その廣く社會に流布した點から見ても、これが眞に國民的繪畫であるのだ。一たびは士君子の鑑賞す可からざるもの如くに考へられた此の畫が、今日となつて世界の趣味家の賞讚を博し、内地に於ても大いに聲價を發して來たのは誰も知る通りで、畢竟、國民的繪畫として一般に認められた結果に外ならぬ。「日本外史」の文章はこの浮世繪にたとへるべきもので、その描寫がグラフィックで、読み易く解し易からしめた點は、丁度、北齋や豐國の技を文章の上に試みたものと言ひ得るであらう。又その論贊になる

と、慷慨の氣が漲つて、懦夫をして起たしめるの力がある。「日本外史」の間斷なく聲價を保つてゐるのは此の故であつて、勤王の意が寓されてゐるといふ單純な譯ではない。

全體山陽は、學者といふには餘りに經學に暗かつた。山陽は才の人であつて、學の人ではなかつた。併し、經學に暗かつただけそれだけ其の拘束を脱して、縱横に天稟の才を馳せることが出来た。若し山陽が後ればせに經學者となつて、力をその方面に用ゐたならば何うであつたらうか。遠い過去は兎に角として、山陽の時代に於ては、經學は國民文藝家に取つて既に餘り必要のもので無くなつてゐた。若し山陽が經學に造詣深く、經書の注疏に没頭したとすれば、あの位の天才を有してゐても、恐らくは遂に一學究となつてしまつて、自然種々の束縛を受け縱横の筆を揮ふことが出来なかつたであらう。元來經學者といふものは、多くは文章に拙なものである。山陽のやうな氣の利いた文章は、到底經學者に望み得べきもので無い。畢竟山陽は經學に暗かつたが爲に、却つてあのやうな氣の利いた文章を、書くことが出来たと言ひ得るであらう。山陽の文章は如何にも學者ばなれしてゐて、腐儒の臭氣が無い。そこが又國民の嗜好に投じた所以ではあるまいか。

山陽は青年時代に廣島藩を脱したので、無論藩祿を食まなかつた。後に大家になつてから、諸藩より抱へたいと云はれてもそれに應ぜず、一生處士で終つた。若し山陽が脱藩しなかつたら、無論藩祿春水の嫡子である關係上、その後を承けて藩儒となり藩祿を食んだに相違ない。随つて生活難も無かつたであらうけれども、田舎學者を以て一生を畢つたであらう。如何に氣骨があつても、あれほどの氣節を吐ける譯のものでない。何の束縛も受けず、自由の境遇にゐたればこそ勝手な主張も出来たのである。父母の藩にすら仕へないのだからと云うて、姫路藩などの聘に應じなかつたのも、山陽としては筋の通つた行き方であつた。山陽は、此の爲に生活上少からず困難を感じた。併し、飽くまで操守を枉げず、權貴に對して屈する所が無かつた。今日では權貴に屈しないなどは、餘り困難のことでないが、あの頃は事情が異つてゐた。京都の文人などは兎角表を飾つても内實は弱く、暮夜密かに權門に媚を呈するものがあり、それが利口のやり口でもあつたのだが、山陽はどこまでも地歩を保つて有力の藩から畫を依頼されても、吾は畫師にあらずと刎付けた。「日本外史」を當時の執權樂翁公に呈するにしても、先方から望まるゝので無ければ呈したくないと頑張つた。内實はいろいろ運動をやつたにしても、表面は飽くまで地歩を保つたのである。こゝらが全く江戸氣質で京都の文人としては珍しい。太田錦城が初めて山陽の居を訪うた時に酒の饗を受け、あとで何と評したかと云ふと、主人も酒も共に江戸風だと褒めたとあるが、蓋し適評である。山陽の布衣的自由の行動は、國民的性格を飾りなく赤裸に發揮したとも云ひ得るであらう。彼が國民的人氣を博しつゝあるは、決して偶然でない。

山陽は前陳の如く高く標持したけれども、決して頑固な唐變木でなく、頗る人情に通じた解人であ

つた。彼は青年時代には確かに不良青年であつた。彼は嚴島の遊里に通つたり、寡婦に通じたり、遊蕩資金に窮して悪策を弄したり、乞食姿で脱走したり、捕はれて座敷牢に入れられたり、流離時代に傭書に甘んじたり、婦を定めんとして拒絶を食つたり、世味の酸いも辛いも、嘗め盡したものであつた。彼は俗物でもあり、通人でもあつて、世間を理解してゐる。彼が手紙に妙を得てゐるのも、つまり人情味の發露に外ならぬ。彼の筆一たび動けば、決して何人をもそらさぬ。其の如才ないと云うたら、待合の女將よりも、ヨリ以上である。併しいつもどこかに地歩を占めてゐる。例へば金を借りる場合ですら、尙且つ自己の地歩を占めて居る。こんな手紙の書き振は、到底經學者などの企て及ぶ所が無い。山陽の手紙は、その存命中に於ても一般に珍重され、友人ですら之を保存したものである。爲に山陽の手紙の今日に傳はつて居るものは非常に多く、自分の寓目したものだけでも五百通に達する。若し全部を集め集めたらば、幾千通といふ多數に上るであらう。斯様に珍重され保存さるゝ所以は、山陽が高名な文人である爲よりも、その書き振りに、えも言はれない面白味があるからである。山陽は、確かに手紙の文にも獨創の一體を開いたものと言つてよい。山陽以前には、久しく支那風の形式に拘泥した手紙の體が行はれて居つたのであるが、その形式を破つて、情味本位の、氣持のよい手紙の書き方を教へたものは山陽であると云はねばならぬ。山陽の手紙は正に通人の筆であつて、國民用書簡の軌範と爲すに足るものである。

山陽の書風について見ても、亦國民的であると云ひ得る。晩年の書は殊に熟したもので、遺墨の感が深い。能書ではあるけれども、書家の臭氣が無く、又志士の粗豪な處も無い。何處と無く氣品があつて、流暢を極めて居る。云はゞ萬人受けのする書で、誰が見ても氣持よく感ずる。其の書が近來空前の値を生じて來たのは、全く何人にも喜ばれる書風であるからで、此の點も亦廣く國民の嗜好に投じて居るものと言つてよい。

山陽は如何にも多方面の趣味家であつて、此の多方面の趣味家であつたといふ事も、亦種々の方面に人受けのよい原因をなして居ると思ふ。山陽は書畫や骨董に鑑識のあつたことは勿論、煎茶もやれば酒も飲む。印を彫つたり、盆栽を玩んだり、平家を語つたり、芝居を好んだり、その嗜好は、有餘の方面に及んでゐた。この多様の趣味が自然文章の上にも現はれ、従つて其の文章には他人の及ばざる趣味を生じて來る。だから風流を喜ぶ人達は、どうしても山陽を喜ばざるを得ぬことになるのだ。書畫の題識とか、骨董の記文とか、それが山陽が書けば重きを爲すといふのも、山陽が其等の趣味に深く通じて居るからで、之を讀めば、何人といへども首肯せざるを得ない妙がある。その書畫屋、骨董屋に喜ばれ、茶家にも酒客にも其の他の風流人にも渴仰され、信者の範圍が頗る廣汎である點も、亦國民的であると云ひ得らるゝであらう。

要するに、山陽ほど手廣の信者を有つてゐる學者はない。彼の信者は全國に及んでゐる、そして或



る階級に限られてゐない。山陽は此の意味に於て天下の人である。山陽自身も廣島の人として終りたく無かつたので國を脱したのだ。廣島が生んだからと云うても廣島の人でなく、京都に帷を垂れて一生を畢つたと云うても京都の人でない。彼は日本國民共有の名器であらねばならぬ。彼も天下の人たらんことを期したに相違ないが、現實の如き人氣を博しようとは恐らく生前思はなかつたであらう。その著述が無限に賣れ、其の遺墨が全國的に分布し、その墨蹟が千金の高價で賣れるなどは、夢にも思はなかつたであらう。しかし、これは不思議でもなく、僥倖でもない。廣い民衆の氣合に投ずれば、斯くあるのが寧ろ當然である。彼は意識してか否か、彼の文藝は、當時に於て、既に國民の氣合に投じた。別して、彼が暗に冀望した維新後の民衆に投じたから、彼の名聲がますます揚り、その人氣は、年月と共に高まつて來るのである。國民の意氣に投ずれば何事も斯くある筈で、ひとり文藝のみではない。

終りに臨んで一言を要することがある。從來山陽に對して二様の見方がある。即ち山陽を一種の偶像として、その如何なる疵をも辯護する人があつたと共に、又山陽嫌ひの一派があつて、そのアテ計りを摘發する人もある。併し、その何れも中庸を得たものと云ふことは出來ぬ。私は、山陽を以て最も國民に親しみのある先輩とするものであつて、山陽に買ふ可き處は、常識があり、人間味があり、多趣味、多藝で、且つ頗る氣格の高い處にあると思ふ。従つて一概に之を崇拜することを非とする

に、その若い頃の瑕瑾をいつまでも叫んで之を罪することを欲しない。私は、山陽を國民的性格を遺憾なく發揮した愉快なる文豪として大衆と共に親しみ、且つその人氣を長く續けたいと思ふ。拙著「隨筆頼山陽」が媒をなして、山陽に關する種々の物が机邊に集まつて來るので、居ながら山陽の逸事を知ることが出来る。先頃兵庫縣本山村安東忠次郎氏より一簡を寄せられた。其の中に、山陽が王香と嵐山に遊んだ折、誤つて王香携帶の瓢を破壊したので、それを修理して一詩を題した。其の詩が録されてあつた。乃ち詩は、  
余與王香遊嵐山。誤破酒瓢。爲補之。係以詩。  
醉破君瓢。花外村。補吾膠漆尙温存。庚々橫理君宜記。亦是春鴻舊爪痕。  
右の如くで、破損の處が赤い漆で繕つてあり、詩も同じ赤漆で書かれてゐるさうな。そして此の瓢が安東氏の手に入つたと云ふことで、其の王香とある人は、私が「隨筆頼山陽」に録した、廣島の王香で、「王香園叢書」を出版せんため山陽に序を請うた人であるまいか、と問はれたのである。如何にも名が同じであり、詩の題が嵐山に遊ぶとあるから、山陽の序にもある、王香と嵐山に同游の折の事に相違ない。そして酔うて瓢を破つた出來事と、其の瓢の山陽の詩を留めて今尙存してゐる事は初めて知る所である。瓢は破損の爲に好詩を得、それが爲に今珍とさるのである。王香は珍文と稱したことを序ながら附記しておく。

「民友社出版の『頼山陽書簡集』は二千頁に垂んとする二冊の巨巻である。熟知の木崎好尙氏や光吉元次郎氏が徳富蘇峰氏の囑に應じて編纂したので、光吉氏生前しばしば訪ひ來つて、その経緯を語つたことがある。一千通の書簡を採收したと聞いたから一千頁一冊位のものかと想像したるに、案外の巨冊である。山陽の書簡集は従来も出版されてゐるが、博收千通に迫んだのはこれが初めてである。無論、これまで刊行されたものも皆納めてあるに相違ない。尙、逸してゐるのは決して少くないであらう。火災などに焼け失せ、若しくは他の事情で棄つた者などもあるであらう。それは已むを得ないとして尙埋没してゐるものを蒐集したら、別に一千頁位の一冊を爲すであらう。山陽も随分手簡の多作家と謂ふべきだ。併し、交りの廣い人や繁劇の事に當つてゐる人の一生の手紙を蒐めて見たら、随分澤山のものであらう。強ち山陽を多作家と稱すべきでもなからうか。併し、一千通が一千通悉く保存の價値があり、編纂刊行の甲斐があるものは、恐らく山陽に於て初めて見るの例であらう。西洋では文藝家の書簡を集めて公刊する例は無論澤山あつて、その書簡が藝術品として取扱はれてゐる。日本では新井白石の書簡の如き、多くは考證を包有したもので、普通の俗牘と異つてゐるが、山陽のはそれとは違つて日常の用を辨するもので、それでゐて藝術品たるの價値がある。自分は『隨筆頼山陽』に山陽の日記はその手紙である、山陽の隨筆も亦手紙であるというたが、この巨冊のごとく纏まつてみると、自分の説の虚ならざることが知れるのである。山陽の書簡も、實は大著述と云はねばならぬ。

山陽は、必ずしも後世コンナ工合に自家の書簡が纂輯されることを期して、その折々に書いたと思はれないが、交付した其の家に傳はる位は期したかも知れない。随つて筆作に意を用いたかも知れない。それは何れにもあれ、輕率に手紙を作る可からざる教訓は、この書簡集に就て得らるのである。

山陽の逸事に就て、尙他に記すべきものがある。此の頃郷人から一巻の詩畫を示された。展べて見ると、巻頭に唐美人に擬した彩色入の婦人の圖があり、その坐邊に、石菖を盛つた盆が置かれてあつて、美人はこれを見つめて满面憂色を湛へてゐる。此の圖に附屬して三家の詩が録してある。皆此の美人を思ひ遣つた閨怨の詩で、詩中の識語に、甲戌の歲、頼山陽黃薇に游んで歸らず、情婦空閨を守るとあることをも云うてゐる。此等の事實に依り、好事家が山陽の情事を一幅の巻に收めたものであることが知れた。畫の筆者は琴浦とあるが、私は未だ其の人を知らない。詩を賦した三家も、小石と琴浦の外は名を匿してゐるから誰かは知り難いが、大方、山陽と懇意の文人の戲筆であらう。随分好事家は假託のものを作つて、人を欺くこともあるから油斷が出来ないが、此の巻は假託のものと思へない。其の譯は、詩の題識は事實と吻合してゐる。山陽系譜を案するに、甲戌は文化十一年で、山陽三十五歳、此の年果して廣島に歸省してゐる。歸省の目的は父春水の病を見舞はん爲で、八月十日京都

發程、備中其の他を経て、八月廿三日廣島に歸着してゐる。識語の言ふ所は決して假託でなく、正に此の歸省の留守中の事であるとすると、當時血氣の斯人におりさうなことである。但し、山陽が梨影を其の室に定めたのは此の歳であるけれども、攀花折柳の事があつたとて不思議もあるまい。所謂美那なるものゝ本體は知ることには出来ないが、詩中、淀流を洞るとあるを見れば、浪花あたりの花柳界のものがあらうか。山陽の暗黒面を知るの資料である。

自別君來思萬端。夢魂縹渺渡層瀾。避人頻數郎歸日。不解年光似轉丸。  
凡上生塵硯欲蕪。汲泉空羨石菖蒲。庭前葉落看無色。不獨妾容愁且癯。  
美人偶得郎書喜且悲。燈前讀罷背燈啼。閉呼小婢喃喃語。郎在黃薇稱浦西。

獨對菱花開沈思。今朝懶畫遠山眉。附鴻欲寄心頭事。陰憚更多於別時。  
冷枕單衾易惹憂。屏風恁地掩牀頭。畫中又是鴛鴦子。偏使阿儂添幾愁。

岑寂一場無所訴。愁來萬事總關情。傷心厭聽黃昏雨。向夜偏成點滴聲。  
夕陽樓外雨初乾。獨捲珠簾立晚寒。今夜新升眉樣月。憶儂郎亦應憑欄。

征帆影暗暮烟愁。妾亦買舟涸。從流恨妾不如舟上月。導郎直到海西頭。

眉蹙鴛鴦一唇褪。朱。悄然歸對一燈孤。空室蕭々何所。有。阿郎曾愛石菖蒲。  
空房一枕不堪清。難奈柔腸屢易驚。愁夢床頭誰喚覺。風吹落葉一樓窓聲。

郎馬登山々有險。郎舟浮海々多瀾。妾身何恨愁憔悴。但恐郎輕行路難。  
忙拆瑤絨忽覺眉。歸期未議定何時。了鬟不解愁思切。挑得燈花頻笑嬌。

甲戌冬 小石石龍題  
頼山陽の逸事 大抵收めたが、茲に脱漏を補はん爲に工を録する。山陽が廣島を脱走した時、叔父の春風が搜索の衝に當つたことは事實であるが、果しかし、自ら刃を擧げて踪跡を尋ねたのではない、春風の命を受けて實地追跡した者は外にある、それは石井豊洲である。

此の人は春水の門人で、山陽とは同窓の關係もあり、又遊び友達でもあつたらう。これが苦心して搜索し、一旦は取押へたのであるが、取り逃したこともあつて、容易ならぬ苦勞をしてゐる。當時山陽の窮迫時代に此の人と山陽が往復した書簡が今日存在してをれば、他人に公言の出来ないなど、露骨に書かれてあるに相違なく、當時の山陽を知るには屈竟の材料であらうに、それが一つも残つてゐぬ。何故かと調べた人があるが、此の豊洲は餘程注意深い人であつたらしく、歿する時に遺命を傳



### 賴氏山陽の遺事

賴山陽の逸事は、少壯より隨聞隨錄して拙著「隨筆賴山陽」の材料となつたのであるが、あの書を著してから、追々目に觸れたものも一二に止まらない。それは概ね拙著隨筆に收めたが、尙其後二三寓目のものがあるから、爰に收めて、「隨筆賴山陽」の補遺とする。

山陽幼時の漢文尺牘を表装して一幅としたものを、此の頃一覽した。柴野栗山が山陽の郷里藝州に遊び、賴家を訪うた時、春水、杏坪が栗山を迎へ、山陽も亦座に在つて、其の應酬を傍聽し、栗山歸郷の後其報を得て、山陽が寄せた書簡である。

襄謹答。四序更端。三陽用事。伏惟

先生福履萬吉。不勝恭喜。曩者

先生千里襄糧。來訪家父。因又見家叔。曰。遂望河之想也。相得歡甚。襄亦旁聽言談。得廣異聞。何幸如之。

但不能淹留。勿々爲別。不勝悵々。去臘初旬忽得

尊書。就審

先生平安歸家。欽慰々々。見示及歸路之情況。敬誦再四。隱渡三原爲襄舊面議。讀

尊文如聽山水傳語。玉浦以東。幼時所經而不記焉。閱讀之際。如入未踐之路。茶山菅先生山陽之望也。燈下吟詩談古。雅淡可想。山間逕路。遇昇夫之空輜。如有待

先生行。一枚頭錢。以得無翼而飛之妙。其亦天幸也。舟行之快絕。與重陽阻雨之興情。皆釋旅之奇遇也。其於

玉浦以東。所相周旋。人物之沈重者。慷慨者。坦率者。魁偉者。如列一堂。捧讀不能釋手。一日不讀則鄙吝之

心復萌。嗚呼亦

斯人而有斯文也。夫自藝至阿。百里而遠。山水異地。人物異居。如之何可一日而盡哉。今讀

尊文。乃可片時而撫也。欣抃之至。敢陳鄙忱。敬奉答謝。維時春寒料峭。伏惟

順時自重。歸途諸什巧妙。誦之讀之。恍乎侍坐

其傍。爲賜實多。家父家叔皆無恙。幸勿爲念。不宜奉復。

彦先生赤松君 坐右

正月三日

賴襄再拜稽首

栗山は當時の大儒、山陽の先輩である。山陽の答簡の辭令が慇懃を極め、崇敬の情を盡して餘蘊ないのは固より其の所だが、其の言ふ所未だ稗氣を脱せず、晩年の山陽に若し此の書牘を示したら、恐らく慙汗して、それを奪ひ去り必ず寸斷したであらう。

余昨年歸省中越後新發田に於て一冊の版本俳句集を見た。山陽の序があり、書名の不作可集と云ふのも亦奇である。其序に云く、

余看花嵐山。醉三家店。店下歸人續紛。中見吾齋堂擊一客過。呼之顧而終行。後來語之曰。不能認君也。袖田與其俳師世南聯句冊。請名而序之。晒而未諾。數日世南來。前日所擊客也。叩其鄉關。知其嘗仕宦。問何以辭任。曰以遊蕩斥耳。余以聽其對。留與飲。問近詠。不敢舉。曰是不作而可者。不得已爾。世自有得已不已。以爲畢生業者矣。嗚呼何其與吾論詩文相似也。余初認之。認其貌而已。今乃認其心矣。宜乎齋堂之師之也。蓋其所以誹。異於世之所以誹歟。余烏得不序。遂名曰不作可集。而書其語於端返之。并示齋堂。齋堂云何。

戊子至後一日

山陽 外史

山陽が俳句集に序した文は恐らく此の外にあるまい。作者が放蕩の餘、仕宦を罷めて俳人となり、俳句は已むを得ずして作るのだといふ自白が、山陽の氣に入り、余が詩文を作るのも亦これに類すと云ふ處に、山陽の才識と酒脱の面目が見えて面白い。

山陽が横卷に宇治川先陣の平曲を揮毫したものが、大倉男に依つて藏されてゐる。これは頗る珍物で、山陽の識語が例に據つて面白い、云く、劍菱(酒の銘)の氣が腹に満ちて、おのづから筆端に迸り出で、高綱、景季も亦我鋒を避くと。後日山陽亦一跋を加へて云く、あの時は酔うて書いたが、今見れば敢て拙でない。俺をして今書かしても、斯うは書けぬ。これは俺が書でなく、實は酒の書で

あると云ふ處に、尤も妙がある。

文政丁亥夏五月。送母于有馬。還再過伊丹。宿長古堂。醉餘演平話。主人請余自書。半成就睡。翌晨宿醉未解。續而成之。劍菱之氣滿腹。自筆頭進出。覺高綱景季亦避我鋒也。醉裏又堂主入京。携來請置印款。一笑再聞。自愧狂態。然如其書爲野馬蛛絲狀。非斷非續處。謂之纏槽破裏王獻之。非誇語也。使余更爲之。決不能如斯。乃知酒書之。非賴書之。

私が拙劣な「隨筆頼山陽」を著した事が機縁となり、山陽の書の鑑定を求めに来るものが少くない。同時に題匣を託さるので可なり閉口してゐるが、居ながら種々の山陽の墨蹟を見る事の出来るのは仕合せというてよい。舊臘から見たもの、内で十二を擧げてみると、「梅花未放意先香」と書いた一行幅は、山陽が有栖川宮家の御息女に新年試筆の手本にと書いて差上げたもので、書は土出来であるが、落款には御息女の雅號があつて山陽の署名はなかつた。お手本として差上げたものだからかくあるべきはずである。

外に梅花七絶を書した一幅を見た。その詩は山陽三十七歳の時の作で、詩集を調べてみると東郊の僧庵を訪うて詠じた四首の内の一である事が知れたが、それには數十字の識語がある。すなはち左の如し。

疎梅參梅頓爽然。欲將茗椀換航船。水心可恨相知晚。紅紫叢中過十年。

詠梅之詩。自君復十四字以來。難復着手。此詩非詠梅。即叙吾今昔之變也。

此の詩は識語にある如く梅に藉りて自家の心事を告白したものである。すなはち詩の大意は説く迄もなく、皎潔梅の如きものに親しむ事が晩く、うか／＼紅紫のエロやグロの中で十年を過したとの述懐であるが、山陽としては偽らざる自由である。そして識語には何というてゐるかといふと、林和靖が「疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏」の詩を作つてから、それ以上の梅の詩は出来かねる。これは自家の經歷の變を叙するに過ぎないというてゐる。山陽の識語の妙は毎度敬服するが、詩集を翻へしても獲られないことが毎々書幅の識語に獲らるゝので、山陽の心事を赤裸に知り得るものは詩に附随する識語である。私が山陽の書を見ることを喜ぶ一つの理由はこゝに存する。識語中にある「君復」は林和靖の字である。

尙兩三日前山陽の臨書一幅を見た。これは明人陳元素の長篇を臨したもので、起首に「有樹倚天數千尺」とあつて、六行に互る行書であるが、讚岐に客たるの日、有り合せの紙で臨すとある。紙は糝水を掃き金粉を施したもので、墨つきがよくないが、山陽の眞蹟に相違ない。これにも、長い識語がある。

乙亥夏日。客於讚。觀明人陳元素書。偶有此紙。就試臨之。殊覺失其故步。醜拙太甚。裏

此の識語に依り山陽の不滿が見える。その「故歩に失し」とある如く、とかく自分の流儀が出て原書に似ず、醜拙の甚だしい事を感じると書いてゐるが、何人が臨書しても自己流の出る事は免かれぬもので、臨書の本意は敢て原書を摹するのではないから、自己流が出て一概に咎むべきでない。この臨書も山陽の筆意があるから寧ろ喜ぶべきで、これが光筆版の摹本の如くであつたら一向面白味がなからう。陳元素は字は古白、長州の人で、文學をもつて名を時に知られ、書法は清勁、歐陽率更に類し、墨蘭を寫せば楚宛清苑の致ありと「無聲詩史」に出てをる。

坊間の書肆を漁り「三十六峰山陽外史遺墨」と支那人沈萍香が標題を書いた一帖を獲た。自分「隨筆頼山陽」を著す時、この種のもは大概手に入れて材料に供したが、この帖は、全く初めて見るものであつた。嘉永二年七十二翁龜齡軒の上梓とあつて、その人の所藏に係る山陽の遺墨を上木したものであるが、龜齡と云ふ人は未だ委しく知ることを得ない。併し清客より月琴を學んで斯道に名のあつた人と見える。山陽竝にその友人と懇親の關係があつた所から、この帖の中には山陽の母の短冊があり、日野中納言の和歌があり、小竹の文もあつて、この遺墨帖を通して山陽の逸事を知ることが一二に止まらない。山陽には月琴の趣味があつたかどうか知れないが、全く無趣味でも無かつたらしく、母に龜齡の月琴を聴かせて興じたことも見えてゐる。龜齡の詩に應じて月琴の銘を撰んでもゐる。

る。帖の卷首にある「天倪」の二字は即ちそれである。亦月琴に題する二三首の詩もある。その七絶に曰く、山陽の才に感じさせらるるが、この詩を見ても其の感なきを得ない。月琴と云ふから直

る。後崎小竹はこの詩に左の注を施してゐる。李義山婦娥詩曰。雪屏屏風燭影深。長河漸落曉星沈。婦娥應悔偷靈藥。碧海青天夜夜心。謝疊山評云。婦娥有

長生之福。無夫婦之樂爲悔。前人未道破。余謂當時或有其人其事。義山託婦娥咏之耳。子成爲龜齡老人。咏月琴。結用義山全句。老人恐未知之。故爲書其末。

弘化二年七夕前三日  
支那音で唄つたら月琴に乗りさうな詩である。この詩に附して左の詩歌がある。都門迎母半年留。月白風清何處游。携酒侍興三十里。供君湖閣作中秋。

母と近江の琵琶湖に月琴師を伴うて仲秋の月を賞したなどは、山陽の傳中に漏す可からざる風流韻事である。山陽の國歌も亦珍しい。この時龜齡の詠じた下句に、母の梅鬢が添へた和歌がある。その短冊の詞書に、初秋のよひ過る頃、龜齡ぬじ訪らひ、月琴を弾、かつ下の句をうたひて、

この外に山陽の短冊がある。植しその五もと柳いつまでもわがたらちねとながめてしがな

この歌は山陽の水西莊に植えた柳を母と共にいつまでも詠めたいと云ふ感想を漏したのだが、日野卿がこれを見て山陽の孝に感じ、上の句をそのままにして、感想を書かれた短冊がある。

その詞書には、



山陽の歌を見て感慨にたへず、上の句はそのまゝに置いて獨りこつ

とあつて、（註）山陽の歌を讀み、そのまゝに置いて獨りこつて、とあるが、これは一佳話として傳ふべきである。すべてこの帖に存するものを、拙著「隨筆頼山陽」に逸したことを遺憾とし、爰に加へて置く。尙、この帖の中に江芸閣のことを云々して龜齡に寄せた手紙が收めてある。それには「江芸閣の約束の事有之、來て居るか、いつ歸るかと言事、御聞出しなれば急に御知らせ可被下候」とある。山陽が清客江芸閣に交つたことは著名な事實だが、こゝに、この人を待つてゐる消息が簡單ながらほのめいてゐる。尙、この手紙に琴銘を撰んだことを云ひ、「月琴貴藏なれば勉強可仕候、即別紙に仕候間、朱漆にてゞも御入させ可被成候」とある。龜齡が芸閣にも銘を請ひたしと山陽に謀りたるらしく、それに對し山陽は、芸閣などには七絶の方へマリ可申候と答へてゐる。龜齡は多分長崎邊の人であらう。この帖に題署した沈萍香は日本の國歌まで解した長崎在住の支那人で、山陽の門人を以て自任し、山陽を悼むの詩を録してゐるが、それは割愛する。

「竹雨齋詩鈔」は備中小野泉藏の詩集である。山陽は泉藏と交深く、毎詩に評がある。そして、評語中往々自家の生活を云々するものがある。泉藏の詩は、敢て珍とするに足らないが、山陽自ら自家の嗜好を云々するものは山陽の傳を補ふの資となすに足る。今左に數件を録す。

泉藏が和蘭製の杯を人に送りたる詩に、山陽は己れも蘭製の杯を愛することを陳べ、小杯は最も喜ぶ所だ。蓋し小杯は久坐細談、漸く醉郷に入るによろしいからだ云ひ、また中井履軒の杯の嗜好を併せ記してゐる。履軒は玉杯を好み、先づ其の色を賞し、後に其の味を領す、是先づ我心を獲たものだ。世多く漆盞を用ひて一生琥珀の光を知らないのは氣の毒千萬である。丹醜の佳なるものは、色、曉月の水に在るが如し。玉杯でなければ此の色を見る可からずと、履軒に左袒してゐる。泉藏の偶成七律の内に「酒味年加時自温」とあるのを山陽評して、酒を温めるに自ら候あり、過不及の際毫髮差へば氣味素然たり、故に酒は自ら温めざる可らずと云うて、酒の爛のやかましかつたことがこれで知れる。

泉藏の舟行の詩に山陽評して云く、三四句舟行の實況であるが、茶山翁舟を畏ること虎の如し、嘗て此の境を経ざるが故に圈點を施さないのだと、茶山の舟嫌ひのことが此の評語に因て初めて知ることが得た。

泉藏の「花下與友人飲」の詩に、山陽評して云く、世間の俗漢、往々花に對して韻書を讀んで作詩に夢中になり、杯到つても飲まざるものあり、余は泉藏を煩して此の詩を千萬紙書かせて花筵に張りたいものだ。酒客山陽に此の評無かる可からず、山陽は泉藏の詩を藉りて世を罵つてゐる。山陽の

評は概ね斯くの如き含蓄がある。山陽の泉藏の詩を評して山陽曰く、俺も嗜好を同じうた、但だ藝州の産、其の皮軟がで、「皮を和して之れを炊けば、香氣亦他産に倍するものがある。京師に来てから徒に之を夢想するのみだ。今高作を読んで涎を流す。併し貴産の豆、藝のに比して如何は未だ審かにせずと。こゝに亦山陽が蠶豆に嗜好のあつたことを知り得た。」茶山の詩を評して山陽曰く、此の詩、世教に關するものあり、圍點なき能はず。唯泉藏の「竹院圍碁」の詩を小竹評して曰く、此の詩、世教に關するものあり、圍點なき能はず。唯菅賴諸公、碁を解せず、故に一語なきのみと。こゝに小竹に依り菅茶山、賴杏坪二家の圍碁を解せざるを知り得た。杏坪は他の評語中にも碁を解せざることを自白してゐる。山陽の詩を評して山陽曰く、正儀の事跡の知す可からず、余外史を筆し、是に至つて、筆を握り躊躇之を久しうし、遂に糊塗に終ると。大日本史には正儀を將軍家臣傳に收めて惡を懲らしてゐるが、自分の糊塗を爲すは關疑の爲であると、圖らずも此の評語にて山陽が外史執筆中正儀に及んで困惑したことが知れた。泉藏が人の間に答へて、山陽を蘇東坡に比し、「到處逢人何所說、方今都下有東坡」と詠じたのを、山陽評して、溢譽、之を読み、人をして面熱し汗下らしむ。獨り子年の臘月生れたるは東坡翁に同じ。中年已前酒を飲まざりしことも亦同じ。近頃飲を過せども、究竟酒腸を具するものにあらざる

也。東坡の詩に曰く、「少年多病性杯觴、老去初知此味長」と、東坡も亦老に及んで此の味を解する也と。山陽が内々東坡を氣取つて以上のごときことを言うたのは有名の話であるが、典據の一は此の評語にあるのだ。

其時山陽の評語を讀み、泉藏の詩を讀み、其の意を解するに、山陽の評語を讀み、泉藏の詩を讀み、其の意を解するに、山陽の評語を讀み、泉藏の詩を讀み、其の意を解するに、

山陽簡潔の漢文書牘、殊に情味を覺えるものは左の一文である。お世辭も茲に至つて妙甚し。梅雨蕭然。終日未舉杯。以其無肴也。而今獲此。多謝々々。唯恨無客耳。公不與魚共來。然魚味佳。猶公之談也。台詞讀之。其の意を解するに、山陽の評語を讀み、泉藏の詩を讀み、其の意を解するに、

其の人の意を讀むと、山陽の評語を讀み、泉藏の詩を讀み、其の意を解するに、山陽の評語を讀み、泉藏の詩を讀み、其の意を解するに、

も喜ぶ酒は劍菱で、近衛家から往々頒ち購うたことが此の書状に書かれてある。これも初め知ることとて、其の酒が重くつてよくないと云ふことも初めて知つた。兎角劍菱を一樽買ひ取ることが困難であつたらしく、已むなくば泉川を見合せて一樽劍菱を求めんなど云うてみる。泉川銘の酒も山陽の常用したものであることが此の書状で明かとなつた。山陽は酒の甚話をする人を此の上流を珍重がゆゑ其の人の爲なら何でも揮毫を厭はないと云うてゐる。山陽は酒にはどこまでも忠實であつた。

(首部二行散落不能讀)

伊丹挨拶に(不明)書翰鴉狼藉數張仕候へども、一ツも可觀は無之候へ共、先あまり延引に及候故、是をだに被遣可被下候、皆々酒にかゝり候時に御座候、長篇の方は在長崎作申候、彼地は皆々堺酒にて、丹醜は七星斗參合候節にて、そのみみ長崎中たへ申候、絶句は下關にて鶴と申候酒、是は灘にて丹にせと相見へ、是のみたへ候而作候事存出候儘認申候、四字類二、是を全紙にそへ泉川主人へ贈申度、半切絶句、御世話に候儀、御門人へ寸志に進上仕度候、若ケ様之拙書にて御用に立候事なれば、何ぞ自然御好にても有之候は、いか様の六ヶ敷事にて可被仰下と御傳可被下候、其代酒之御世話奉煩度候、甚御面倒なるべけれ共、泉川四斗樽一丁買調申度奉存候、貴家迄御取寄、明石屋へ御出可被下候、價直御申越、直に可差出候

又先便にも申上候通、家母へ劍菱贈候處、敗候て甚失意、何とぞ又々差下くれと申越候、此酒は別々六ヶ敷と承候へ共、三升にて五升にてもらひ候事は出来申まじくや、若小買不出来に候は、劍菱之方四斗調申度

存候、左候へば其内分遣候て、泉川は追而の事に可仕哉、兩様共御面倒彼御門人の御方へ被仰遣、何卒早々返事被致候様萬々奉希候

丹醜は何印にても當地近衛家にて讀もらひ候へば自由に御座候へ共、先便度々申上候通、彼御家の分は兎角重き様に覺申候、已に只今白雪、あの方より大樽にて取寄居申候へ共、是迄御地小西店より取寄候より重く候て不好候、それ故劍菱なども決して直に取寄候は、軽く候て可宜と奉存候、何分劍は少々なりとも右之譯にて入手致度奉存候

泉川名醜醜醜清冽、私多年の注文に合候義は先便にも申上候通に御座候、猶其内と申殘候、頓首

九月既望

又ふり申候、樓前水増、水聲甚候、大阪如何

襄

承 弱 老 兄

承 蒙 答 又

大正乙丑秋九月

癸

後山陽翁見此書乎。一讀應戟手大罵曰。咄何物閒人。

博引旁搜敢暴露乃公隱祕。既而啞然大笑曰。吾之修史。無數英雄活殺在手。吾今爲春城所活殺。所謂因果應報者歟。忽又抵掌大喜曰。從來傳吾者多矣。然未見傳神之妙如此。吾始得身後知己。嗟乎使翁忽罵忽笑忽喜。不遑應接者。豈非此書耶。不知春城君見余之言。其亦罵乎笑乎喜乎。書以問之。

書隨筆賴山陽後

使山陽翁見此書乎。一讀應戟手大罵曰。咄何物閒人。博引旁搜敢暴露乃公隱祕。既而啞然大笑曰。吾之修史。無數英雄活殺在手。吾今爲春城所活殺。所謂因果應報者歟。忽又抵掌大喜曰。從來傳吾者多矣。然未見傳神之妙如此。吾始得身後知己。嗟乎使翁忽罵忽笑忽喜。不遑應接者。豈非此書耶。不知春城君見余之言。其亦罵乎笑乎喜乎。書以問之。

大正乙丑秋九月

佐伯仲藏識

大五ノ狂癖也

書中雜錄

余之言。其亦飄乎笑乎喜乎。吾以問之。

感笑感喜。不厭謝對答。豈非也書耶。不厭春賦吾見

未見書傳文也。吾誠得良對也。吾平對像感照

果謝辭答頌。感又淋霖大喜曰。翁來對吾答矣。然

史。誠感其對吾對吾。吾今忍春賦詞所發。詞簡因

對臣妾對筆暴露氏公烈舞。對面而烈大笑曰。吾文謝

對山謝翁良也。吾平。一語謝舞手大飄曰。即回謝問人。

書中雜錄山謝翁

『隨筆賴山陽』を讀んで

文化文政の詞壇に縦横の奇才として、超世の粹人として、多方面の趣味家として、名聲を馳せた  
賴山陽を傳するには、それ相當の經歷と手腕を有つ人でなければ、何人も承知しまい。頃日上刊され  
た『隨筆賴山陽』を取つて讀むと、其の著書が、明治大正の一奇才、粹人、且つ趣味家である所の春  
城市嶋謙吉君であることに於て、先づ讀者をして胸をすつきりせしめる。

春城君が多年山陽翁の逸事遺聞を討究し、其の傳記の資料のあらゆるものゝ、探訪に苦心して居ら  
れたことは、常に承聞して居たが、本書を見るに及んで、果して之有るかの嘆を發した。而も明に山  
陽の生涯を叙して、精細周到委曲を悉したものであるに拘らず、今題の通り『隨筆』の二字を冠して、  
袴を脱いで平服の着流し的に、賴翁傳をもつる趣を見せ、仍て構思著筆の自由について十二分にダ  
メを推してかゝられた處は、山陽以上の老獪さであると謂ひたい。通例一箇の別傳を作る人は、傳記  
主人公の生誕から、終焉の日に至るまでを編年的に叙述するのを、法式の如く心得て居るけれど、そ  
れでは乾枯なる碑文のやうなものになつてしまつて、主人公の風采や言動を活寫する譯に行かぬ。況

して山陽の如き壽齡こそ短い、録すべき行事は十人前二十人前もある場合に於てをや。そこで陽には憶ひ出し、憶ひ出して書くこと云ふ體を執り、陰には門類を立て、系統を整へて初中後一申通讀の隨聞隨録風の書き方であつたならば、時の上にも事の上にも、餘りに不順序、無聯絡、散漫で、縦し主人公たる人物の、局部的解剖は之を成し得ても、其の全體を取纏めて考へさせることはむづかしい。此うした叙述法に依つた傳記も、間々世間に在るが、要するに眞成傳記の資料までのもので謂はば未成の書である。春城君の此の書は、さやうにいつとほりの凡々たる隨筆では無い。自ら謙して、さうは題してあるけれども、中みはどうして、初から心を用ひて、秩序を立て、本末を次第して、山陽の生涯が誰も心往くまでに、分るやうに書かれてある。

但し本書の生ひ立ちについて、試に臆測して見ると、恐らくは著者平生の書翰趣味から、山陽の手札に巧なる點を風賞しつゝ、其の數百千通を歴覽して、具に翁の文才、史眼や、情趣、好尚を詳にし得たのは言ふに及ばず、凡ての長所短所をも看破し、此くして所謂赤裸々の山陽を捉へ來つて、然る後徐に其の人物總體の解剖に取掛られたものであらう。

◇

本書中にも述べてある如く、山陽は書翰を書くには、殊に筆まめで、其の五十三歳の短生涯に幾千萬通を認めたか分らぬ。而もそれは「日本外史」や「政紀」や詩文類を草するよりも、遙に達文で、何物にも拘束されず、ウイットを加へ、ユーモアを挿んで、縦横に書きのめす處、眞に意到筆到の妙を得て居る（其の様子は本書中に力を極めて述べてある）から、餘人より格別慧眼の春城君が、此等の書翰に山陽傳の究竟材料を見付けられぬ筈も無いのである。併し此の「隨筆」一部を仕上げるまでに、山陽の手札を見通すといふ事は、決して容易な業では無い。其の従事の徹底的で、研究心の熾烈なるには驚入るの外無い。

山陽傳と視るべき書は、是より以前に二三ある。中にも木崎好尙氏の「手紙の頼山陽」家庭の頼山陽」などは、數年前の作で、今も好評噴々たるものである。春城君の著は此等先行書に出て居る事項をば、成るべく避け、其の他世間に知れ渡つて居る逸話等をも、省けるだけ省いて、全く著者自身に研究調査の勞を取つて知り得た事のみを録された（其の由は本書の「はしがき」にも出て居る）ものと云ふ點に、本書の生氣も特色も存する。「あゝ山陽の事か、それなら大抵承知して居る」など、知つたか態をする人も、一たび本書を緋いて意外の發見をする節が多々あることを疑はぬ。

◇

單に新事實を知るのみならず此の著者の才筆に依つて、今まであやふやに視て居た山陽其の人に對する同情を、深く豊にするを得るのも、一種の樂事である。尤も「はしがき」に『本書は山陽を稱揚するを以て目的として居らぬ』とあり、又『往々關點を擧げた所もあるが、それも貶するを目的とした譯でない』とある通り、着筆は頗る公平無私であるけれど、苟も傳記を作る上は、其の主人公に多分の同情を寄せなくては、到底書けるもので無い。春城君は吾人の聞くとところ見るところ、決して山陽に白眼冷々たる人で無いことは明白である。殊に幾回と無く狂風怒濤を凌ぎ、種々様々の難所を乗切つて、具に辛酸を嘗め來つた老船長の如き、大苦勞人である點に於て、多少山陽を彷彿せしめるものが、春城君に在るとすれば、君には山陽に對し、寧ろ深甚の同情があつて、さてこそ此の翁の起居消息の穿鑿に、少からぬ面倒を執られたに相違無い。勿論咄嗟の思附で、是程の大作が出来る譯も無い。又山陽に就いて笑ふ事もあり、涙を催す事もあるのを、其の儘に書いて行く間には、自然揚げる處も貶す處も出るのは當然の數である。世に完全無缺の人は無いのに、褒貶を丸除きにした傳記などが、書かれる道理も無い。要は其の褒貶が當つて居るや否やにある。著者の山陽評は、大抵吾人の意を得て居て、甚しい曲筆舞文らしい處は見出されぬ。

著者の筆路の宛轉無碍、行文の縱横自在は、恰も同じ人の演説や座談を聴く時の如く、知らず識ら

ず引入れられて行つて、六百三十餘頁の大冊を讀了するのに、一日を要せぬ程であるのは、文章の力で無くて何であらう。自分の如き平素山陽先生に、餘り多くの執着心を有たぬ者ですら、然りとすれば、あの人氣澤山の翁を渴仰する人々は、猶の事であらう。近來の一快著として大方に薦めたいのは此の『隨筆山陽』である。蓋し本書の著者が記述に巧であるのみならず、一種諷詠的の韻致を關かぬ處、全く biographies 其の人の手筆に類似して居ると謂ふべきか。亦案するに同一著者曩に「大隈侯を傳し、前島子を傳して、既に十分の手慣しが出来て居る所爲もあらう（併し是はホンの餘計の談である）。註、本文中の頁數は舊版のまゝを存す。

本書篇を分つこと凡そ六、即ち（一）「山陽の生活」（八二頁）、（二）「山陽の文藝」（一五六頁）、（三）「山陽の趣味」（八七頁）、（四）「山陽と諸家」（八六頁）、（五）「山陽の雜事」（七七頁）、（六）「山陽の遺跡を訪ふ」（六二頁）、外に「追録」（三二頁）の順である。

此の中、第一篇「山陽の生活」は本書の總序亦本紀とも謂ふべきもので、此の篇で主人公「通りの生涯を敘した形である。されど何處までも隨筆の標榜通りで、事實の聯絡には強て拘制されて居ない。此の中起端第一節「小影」で先づ山陽の容貌風骨を描出したのは、紀傳の一新機軸と謂ふべきもの、第二節「小影自題」で、山陽自らの抱負をあらはしたのも、自然の順序で面白い。第三節「父子

の至情」で、父春水が、山陽の生れ落ちの日に於て、早くも其の將來を期望した心情が、躍如として出て居る。

第四部「山陽の檻室」で、廣島の頼家の家構への様から、山陽の懲治檻となつた部屋の所在までが善く分る。此の一室の中で、驛馬が或點まで調御されたのみか、後年の大著述「外史」の初稿が推敲されたものである。第五節「苦勞人の山陽」で、山陽の青壯年時代の不身持から貧苦、煩悶、屈辱を續けて、後京都に垂帷して、漸く一家を營み、遂に前非を悔いて別人の如くなつた次第が、簡潔に而も巧に書かれてある。第六節「父子再會」には、父の勘氣を受けたまゝの山陽が久潤後に父と我子串菴とに對面の一幕があはれ深く叙出されてある。賢母梅麩に贈つた細書の全文を掲げて、山陽の孝心を示してもある。それから二節を隔て、第九節「大患不起の消息」で、文豪最期の狀を詳かにし、第一〇節「未亡人の書簡」は前節の補遺の上に、未亡人梨影の貞節才藻が克く寫出されてある。第一三節「未亡人に就て」には、山陽夫妻間の伉儷和樂を叙し、寡となつた夫人が遺兒を撫育し、其操志堅固なる廉で、公邊から褒詞を得たといふ佳話がある。

第四節「三樹三郎に就て」には、父祖の家聲を墮さぬ傑士頼醇の生立から、其の殉國後の埋骨一

件に係る、驚くべき奇談を収めてある。最後の第一五節「山陽の貧富」の條には、山陽盛時に獲た潤筆料の消息を泄し、其をかしいやうであるが彼は實際之に依つて家産を造るに汲々として居た由を、主として彼自身の書東の土で説明してある。是については初耳である人が多からう。前半生には放蕩無頼の窮措大であつたのが、後にはなかくの縮りやになつて、セツ／＼と貯金利殖した様子が歴々に見える。晩年の翁を底抜上戸の後先構はずなどと思つたら大違ひである。併し此の邊やゝもすると、曠世の文豪を、只の下卑助にしてしまひかねぬ處を、著者獨得の才筆は、能く毅然傲然たる山陽の面目を、保たせるやうに描いてある。何でも無いやうでも、此處に春城先生の政治家骨法の閃きが微見える。

以上第一篇の内容を略説したのは、未讀の人々に本書の一斑を擧げて、全約を窺はせようとするものである。次下の諸項に就いては諄々しい解題めいた事はせぬが、第二篇「文藝」の段で、山陽畢生の大作「日本外史」の成立、並に發表の経緯を緻密に述べて、良匠苦心の存する處を解明されたのは、泉下の山陽翁の横顔に、千載の知己を喜ぶ色が見えるやうな氣がする。それから「文」の品隴に及んでは、小品文に他人の企及し難い筆の冴がある事を指摘し、尙「書翰」の條に於ては、山陽を以て古今獨歩の消息文の名家として、其の然る所以を詳論し、翁の書翰は、特に或時或人或事にキツカ



リと當嵌つたもので、他の孰れの時、孰れの人、孰れの事にも、流通の出来る底の浮泛さが無いことや、文詞の上に言ひ知らぬ情味を添へ、餘韻を有たせて居ることなどを、實例に依つて示し、十七頁の長きに亘つて娓娓數千言を費してゐる。蓋し一部を通じて著者最努力、最得意の處、山陽を揚げながら著者の一見識を示した利口さ加減、憎い程である。とにかく山陽の俗用文の上に、此くまで燃犀の光を投げた人は、恐らくは曠前であらう。山陽が如法の漢文家であつて、同時に和俗文の大家であるのは、尋常腐儒に比して、彼の地歩遂に高きを證する所以か。著者の此の推稱は著者自家の趣味性から、來て居ること明白であるが、深く文章に通じた人で無ければ、此くまでに這般の消息を解することは出来ぬ。

◇ 山陽の「書」及「畫」を論評して、非書家の書、非畫人の畫が本職の作技以上に、世の歡迎を蒙つた狀を巨細に叙した處も、痛快な筆を以てしてある。次篇山陽の「趣味」に於ては、更に筆を揮つて翁の書畫骨董趣味から、篆刻、煎茶、平曲、酒曆等の事を列擧して、彼が風流を解する大通人たる趣を明にしてゐる。但し平曲だけは、随分と友人等を辟易させたものであらうと思ふと、好い年をした翁も亦稚氣、茶氣滿々であつたと可笑しくもある。次篇の山陽と交遊諸家との關係や、「雜事」の列記も、翁を中心としての當時の巨匠聞人等の生活情態やら、翁の日常又は臨機の行動やらを見るに、甚

だたよりある話説である。而もそれが一々興味津々たるもので、本傳の難肋と視るのは餘りに勿體ない。最後に著者が自身を各地に運んだ山陽の遺蹟訪查の一篇は、掉尾の大手筆で、他の山陽傳には、更に見られぬものである。蓋し著者の山陽先生に對する傾注は悉皆此に遺漏なく披露されて居る。

◇ 之を要するに、「隨筆山陽」の主人公山陽は青年時代には瑕瑾だらけの、それこそ箸にも棒にもかからぬ不良性の人物であつたけれど、至純至眞の情は其の頃から光芒をあらはし、一生を通じて此の情熱を失はず、仍て權貴にも屈せず、黄金にも媚びず、往きたいと欲した處に往き、言ひたいと思つた事を言つて、敢然として進み、晏如として退き、偽の儀禮や、心にも無い謙讓をするやうな、女々しい振舞は一度もせず、而も天稟の英才機智は、前半生の數奇なる運命より彼を轉向させ、結局多艱を他日玉成の資として、遂に一代の文豪たるを贏ち得たのであるが、其の一伍一什が殆ど全く本書に悉してある。本書にもある通り、山陽翁は深く蘇東坡に私淑し、竊に我國の坡仙を以て任じたと謂ふが、如何にも性情趣味の上に相似の點がある。伶俐なる愛人梨影を得て其の眞心籠めた奉事を受けたことまで、坡仙の朝雲に於けるに比べられる。但し東坡は前半生に於て輝き、後半生に於て曇つたに反し、賴翁は晩年に及ぶ程、華も實もある生活に入つたことは、東西大に異なる處である。布衣賴翁で立て通した翁は、官祿を食んだ蘇氏より多幸であつたとも謂はれよう。

山陽、又皮相から察した山陽、肚裡に入つた山陽の總てが、本書一部に包まれてあるから、かの憂國史家、勤王詩人の眞面目を知らうとする人は、「外史」を読み、「政記」「通議」を繕き、亦「詩抄」や「遺稿」を手にする前に於て、本書を流覽し過するべき、料らざる處に新なる領會を得ることが出来る。開卷益あり興ある書として、本書の如きは近來罕觀の一である。

此の妄言を草したへた時、ふと「東坡」「山陽」といふ文系の後に少し長い線を引いて、「市嶋春城」と置いて見る氣になるのも不思議か。此う言つたならば春城君は、必ず頭を横に振つて、「敢てあたち」などと云はれるに相違無いが、自分はずかす、と雖も遠からずと思つて居るさ」と申さう。君の磊々の襟度は、自分が此の戲言を作すのを容されることがい信するに多謝。○(文學博士 和田萬吉)

### 市嶋春城翁の「山陽」

市嶋春城翁の「山陽」は近來最も人氣ある名著である。小説を除いて此の如く人氣があるは誠に少なく、又人氣があるのも不思議で無いほど興味に富んでゐる。小説を除いて此の如く面白く讀ませる著述は滅多にあるもんで無い。小説以外の著述を滅多に覗いた事の無い文學青年で、偶然之を讀んで面白さに堪り兼ねて有頂天になつて激賞止まなかつたものが私の交遊内に有つた。

凡そ年齒の長じたものゝ作は如何に苦辛した著述でも生彩を缺いてゐる。學術的や思想的に勝れたものはある。考證的に貴いものや趣味的に面白いものはある。が、人氣を吸集するものは容易に求められない。年長者の著述を面白く讀むのは年長者で、壯齡者は感嘆し或は敬服しても面白く思ふものは無い。丁度老優の技は感服させられても牽付ける力はないやうなものだ。

春城君の名著を我々が讀んで嘆賞するのは少しも不思議は無い。が、若い者までも牽付けて人氣を高くするといふは誠に異數である。春城翁が老來益々牙えて壯者の意氣の横溢するを知るべきであるが、春城翁の著常に必ず人氣を呼ぶのではない。春城翁の近侍は少くも私の知る處で、「蟹の泡」と「藝苑」夕話」と「大隈公一言一行」と三部あるが、最後のものを除き前二著は今度の「山陽」と

多少ドコカで共通する所がある風流傳であつて、相當面白く一部に讀まれ、現に私の如きも暫らく机右を離さなかつたが、今度の『頼山陽』ほど盛んな人氣を呼ばなかつた。之といふのは前の二著は翁の博覽の産物であるが、今度の『頼山陽』は縦令時代を異にするも何十年間傾倒沈潜して殆んど相識の友の如く、所謂足駄を履いて其の腹中を駈け廻る心肝肺腑の底まで究め抜いてゐたから、山陽に就て語る恰も自己を語るが如くで、生氣が全幅に溢れて讀者を牽付けずには措かない。

翁は座談の雄。圓轉滑脫の中に機鋒を藏して聽者を擒縱するの妙を究む。翁は政治に奔走する何十年間、演壇の鬪將として雄辯を以て鳴る。が、演壇に立つて數百人乃至數千人を對手に長廣舌を掉ぶよりは數人の小集に得意の風流を縱談横談する處に翁の本面目が現はれ、滾々盡きざる博通と快辯とが愈と冴えて聽者を煙に巻き酔へるが如くならしむ。如何に平凡の家常茶飯的話柄も翁の口頭の上る時は、忽ち精彩を生じて活き／＼とする。翁の座中に在る恰も枯木花咲き、三冬煖氣を生ずる趣きがある。群客自らに牽付けられて翁の周圍に集まり、翁は常に座談の中心となる。圓滑にして俊爽、恬淡にして辛辣、機智縱横、諷諭百出、翁の座談は天下一品の稱がある。『頼山陽』は恰も翁と相對して此の巧妙な天下一品の座談を聴くの感がある。戸籍調べや履歷書から始める傳記の從來の型を破つて、丁度フィルム劇が先づ登場俳優の素顔を映寫する如くに山陽自身を引張出して素面を讀者にお目見えさせる。翁の巧妙なる話術は先づ讀者と顔馴染にさせてからソロ

ソロと牽込む。翁の座談の緩急急調のリズムは句々章々に現はれて聲を聴くやうである。最も得意の壇場に入る時は紅を潮して破顔する翁の會心の笑聲が紙面から聞える。翁が竹田の描いた山陽の肖像を評して、山陽に親炙して何も彼も腹に這入つて名手の筆であるから活氣が自らに漲つてをると云つたのは、其の儘移して翁の山陽傳の評語とする事が出来る。

此の竹田の山紫水明處に主客相對酌する圖は本書發行後愛讀者から寫眞を送られた由で増訂版に挿入されてるが、山陽の面目と生活を偲ぶべき好畫圖である。暫らく此の小影を熟睹して瞑目すると竹田と代つて春城翁が山陽と對坐款談する別畫圖が眼裏に泛んで來る。翁と山陽とは時代を異にしてゐるが、恐らく翁は山紫水明處に主客對坐する會心の場面を夢寐の中で幻想する事があらう。

翁が山陽を語る殆んど自己を語る如くであるは嘗だ何十年來山陽に傾倒して、山陽に就て細大究めて知らざる處が無いばかりでなくて、山陽と翁とドコカで共通點を以てゐる處があるからであらう。山陽は儒を以て起つて操觚に隠れたが、念々國事を憂ひて大義を唱へて止まなかつた。翁は今こそ讀書風流に韜晦してゐるが、本と政治に志して曾ては議政壇の候補を争つた事もあつた。山陽は儒を任じながらも句を摘み章を授くる師たるを喜ばなかつたが、經學文章は自づから門下に俊髦を集めて松陰鰐水等の異才を輩出した。翁は學者を任せず教育家を以て處らなかつたが、永く早稻田に席を置いて教壇にこそ餘り立たなかつたが諸生を董沐し、早稻田三長老の一人として推されてをる。山陽が翰

墨の技を以て鳴り書畫骨董にも亦暗からぬは翁の傳ふる通りであるが、翁も亦筆札に長じ遒勁雅馴は儕輩の推す處である。好事の趣味に造詣し且醜觸するは山陽以上であらう。就中翁と山陽とは一が青州從事たれば一は醴泉の太守、中山千日の醉も足らざるべく、翁が山陽の酒を談するや山陽の酒曆よりは春城先生の灘の禮讚を聴く感がある。若し夫れ酒中の三昧境に入つて品詩折花の風流に陶然たるに於ては翁と山陽と何れぞや。山陽若し存在するなら翁と相見て天下の英雄は使君と操のみ云ふならん。翁も亦恐らく、山陽と時を同うして生れて相共に對酌して伊丹の美釀を談する事が出来なかつたのを終生の恨事とするであらう。

山陽傳の批評は春城論となつた。が、昔から其の友を見て其の人を知れといふ如く、嘗に生ける友ばかりでなく會心の故人を見て其の人が解る。況んや其の生涯や業績を月且し品藻するを聴けば、言者の品性や習癖や好尚も亦自ら彷彿される。等しく山陽を評するにも、翁と蘇峰氏と故思軒とは各々看方を異にするので、三人三様の批評は各々各自の面を照らすの鏡とする事が出来る。が、夫は擬置いて山陽は何たる多幸の文人であらう。近代文人中山陽ほど多く評されたのは無い。其の尤なるものだけでも前記の翁と蘇峰氏と故思軒とに加ふるに木崎氏の著がある。小篇零冊斷章片楮まで拾ひ上げたら一部の山陽書史を作るは決して難く無からう。雲耶山耶の吟ぜられるは枯れすゝみや籠の鳥どころではなからう。日本外史の賣れ高は恐らく今の人氣小説家の作の全部の賣れ高を合算したよりも多

からう。人氣は眞價を決定する唯一の尺度にはなるまいが亦決して眞價を裏切るものでも無い。少くも人氣を沸騰させる魅力が著書にも人物にも有るのは争はれない。

山陽は既に論じ盡されてゐる。著書も人物も評價は略ぼ一定してゐる。外史の文章が漢文として成つてをらんでも歴史として出鱈目の小説野乘に過ぎなくても、外史の日本文學史に於ける位置は動かすべからざるものがある。又山陽の性格に幾多の缺陷があつて意外な暗黒面を持つてゐても、丸裸としても相當に値踏みされる一廉の人物であつた事は争ふ事は出来ない。

人氣のあるものは必ず半面に敵がある。判官最良といふ言葉があるほど人氣のあつた義經の花やかな成功を嫉妬するものが有る事無い事尾鰭をつけて觸れ散らしたのが後の世まで傳へられたのであらう。廉塾に於ける青年山陽の不品行の如きも、義經の艶聞と違つて較や信すべき根據があるやうであるが、矢張山陽の後の人氣が招いた反感から若い時代の暗黒面が抉り出されて吹聴されたのであらう。縦令事實であつても青年時代の所謂若氣の過ちは後の業績と相殺して左して咎めるに足らないのは、若い日吉丸や藤吉が盜賊の居候をしても金の持逃げをしても後の太閤の偉業を毫も累するに足らないやうなものだ。

一體人氣は圓滿無礙の聖人や君子には湧かないものだ。多少の不良分子があつて面白味のある人間でなければ人氣は生じないものだ。人氣は魅力であつて徳望ではない。徂徠と仁齋と比較して、仁齋

の學徳人品は徂徠の敵では無いが、徂徠の方に人氣があつて護園は堀河塾の凡才庸器と違つて俊逸奇才が雲の如く集つた。山陽時代の儒林を見渡して、小竹は市塵があつてホコリ臭く、履軒は田舎があつて喰足らず、敬所は朴念仁で對手にならず、一齋は固苦しく慷慨堂はマジメ過ぎ、栗山は官僚臭があり、中齋は物騒である。見渡した處、多才多能往く處として可ならざる無く、時務に通じ世事に精しく、慷慨氣節あつてシカモ風流を解し、詩を品し畫を談する清遊の友とすべく、醉歌亂舞の濁遊にも亦宜しき八面玲瓏の高才は、山陽一人であつたといふも甚だしい。最良眼で無からう。

山陽が廉塾の不良少年であつたといふは必ずしも山陽の偉器を傷つける話では無い。維新の元老が青年及び壯年時代は敢て云はずもがな、老年になつてさへ屢々有らぬ噂を立てられたのは渠等の成育時代の空氣が悪い習慣を興へたので、渠等の環境を多分に考慮して斟酌しなければならぬ。古今の偉人傑士は大抵各々多少の程度を異にした不良少年ならぬは極めて少ないので、聖人君子と云はれた人たちの生ひたちにさへも不良の事跡を残したものがあつた。思慮未だ定まらぬ少年時代の多少の不良はワザ／＼洗ひ立てして咎めないでも、目をねぶつて知らぬ振するが古人に對する禮儀であらう。

但だ一つ閉棄てならぬは山陽は利殖に精しく幾分かシミツタレであつたといふ説である。が、富を卑しみ財を語るを不義とする封建の學者として苟くも殖利に觸れる逸話を残したといふは不似合であるが、土地の投機や株の賣買に熱中したり家賃や地代の取立てに忙がしく銀行の預金の利子を勘定し

て楽しむ學者が珍らしくない今から考ふれば擧げざるがものは無い。山陽をして今に在らしめば國家の功勞者として少くも貴族院議員（山陽最良には不足だらうが）ぐらゐにはなれるだらうし、理財の才幹からは會社の重役ぐらゐにはなれよう。此の學者でもあり又理財家でもあるといふ點が亦幾分か春城翁に共通する。

由來學者や文人の仕事は書齋で営まれるから其の生活や行實の社會的に顯はれるは少ないのを常とする。随つて傳記を編まうとすれば昵近者に質すか或は交友間に往復した尺牘に頼る外は無いので、時代を距て、昵近者の多く亡びたもの、傳記は手紙が唯一の資料である。幸ひ山陽は筆まめで無数の手紙を残し、シカモ生前からの崇拜者が多くて斷簡零墨も大切に保存された爲め、故思軒及び木崎氏が手紙を基礎として傳記を著述したに係らず、春城翁は別に遺墨を採訪して二氏が使用したものよりもヨリ以上の豊富の資料を集める事が出来た。此の間の苦辛は喩ふべからざるものがあつたらうが、シカモ此の苦辛は山陽癖の翁が楽しんで満喫する處であつた。但だ之だけの資料を累積するには一通りで無い長い歳月を要したのは當然で、翁の著述的氣根の耐久は眞に驚くべきものがある。シカモ之だけではマダ満足出来ないで、發刊後僅に一年を経た第六版には其の後收得した材料に由て復た新に百頁を追補してをる。翁の山陽研究慾はドコまで行つても留まる處を知らないのである。

翁の研究は微に入り細を究めて學者著述家として造詣や業績や見識や態度から日常細事まで萬遍な

く行渡つてをる。門人某の筆録を基として猫騷動まで記述するに到つては如何なる些事をも見のがすまいとする翁の細心を知るべきである。資料の豊富なのと、洞察の犀利なると、一言一行一舉手一投足までも洩らさず記したのは恰もボスウエルの筆に酷似してゐる。女弟子細香との風流韻事の如き、酸いも甘いも噛分けた苦勞人の氏ならではの容易に窺ふ事の出来ない極めてデリケートの機微にまで穿入してをる。恐らく翁の最も會心の一章であらう。

最後の山紫水明處を訪ふの記は畫龍點睛の一篇無韻の長詩である。叙景、咏嘆、感慨、懷想、情臻り筆隨つて綿々の餘韻盡きる處を知らない。讀畢つて暫らく鴨涯の水莊に魂馳せて古人を懷ふの情に堪へない。劇以上、小説以上に人氣を呼ぶのも不思議は無い。近來最も興味ある好什である。

(内田魯庵)

# 隨筆 賴山陽 終

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字列が並ぶ。これは原稿の影写ミスか、あるいは極淡く書かれた筆跡によるものと思われる。）

昭和十七年十一月一日印刷  
昭和十七年十一月十五日發行

隨筆賴山陽定價三圓五十錢

檢



著者	市嶋謙吉
發行者	湯川龍造
印刷者(東京)	堀修造
印刷所	大日本印刷株式會社榎町工場 東京市牛込區榎町七番地

發行所

東京市麹町區丸ノ内二丁目丸ノ内ビルディング五八八區

中央公論社

會員番號第一一七五〇七號  
振替口座東京三四番  
電話丸ノ内(23)  
五五五五  
三三三三  
八七六五  
番番番番

954
115

終

